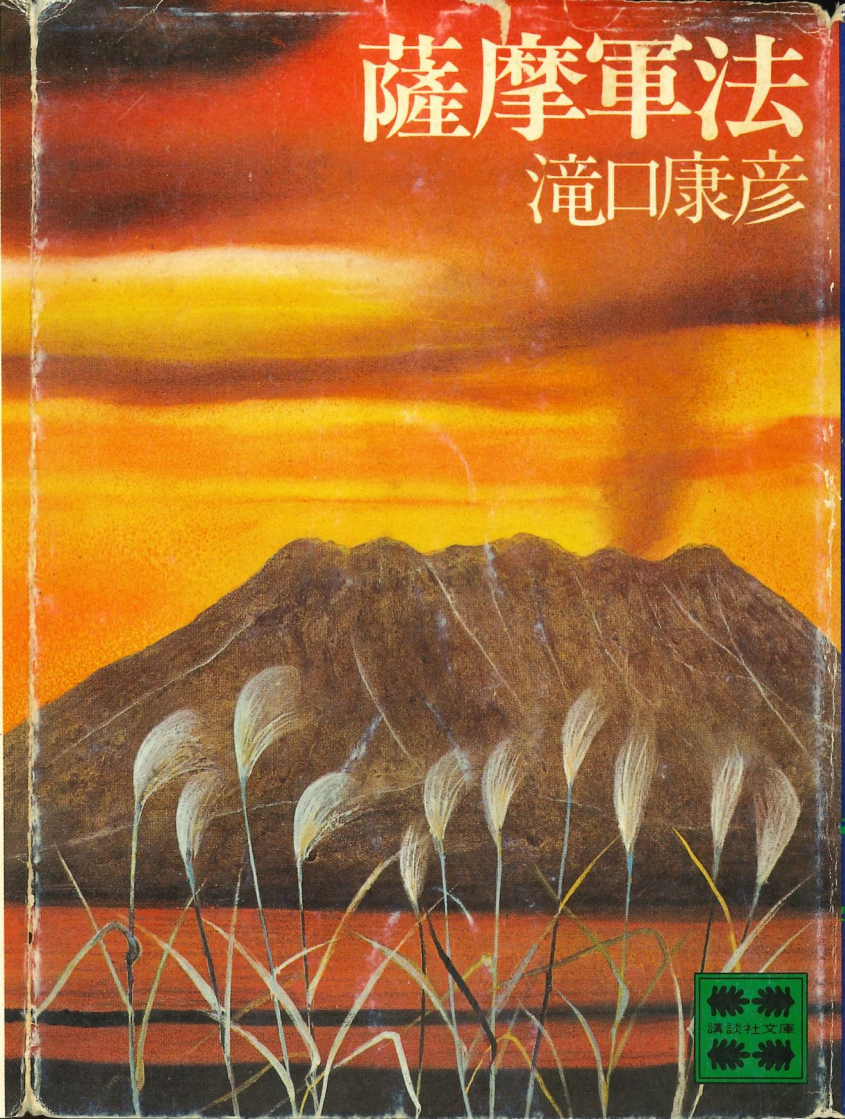
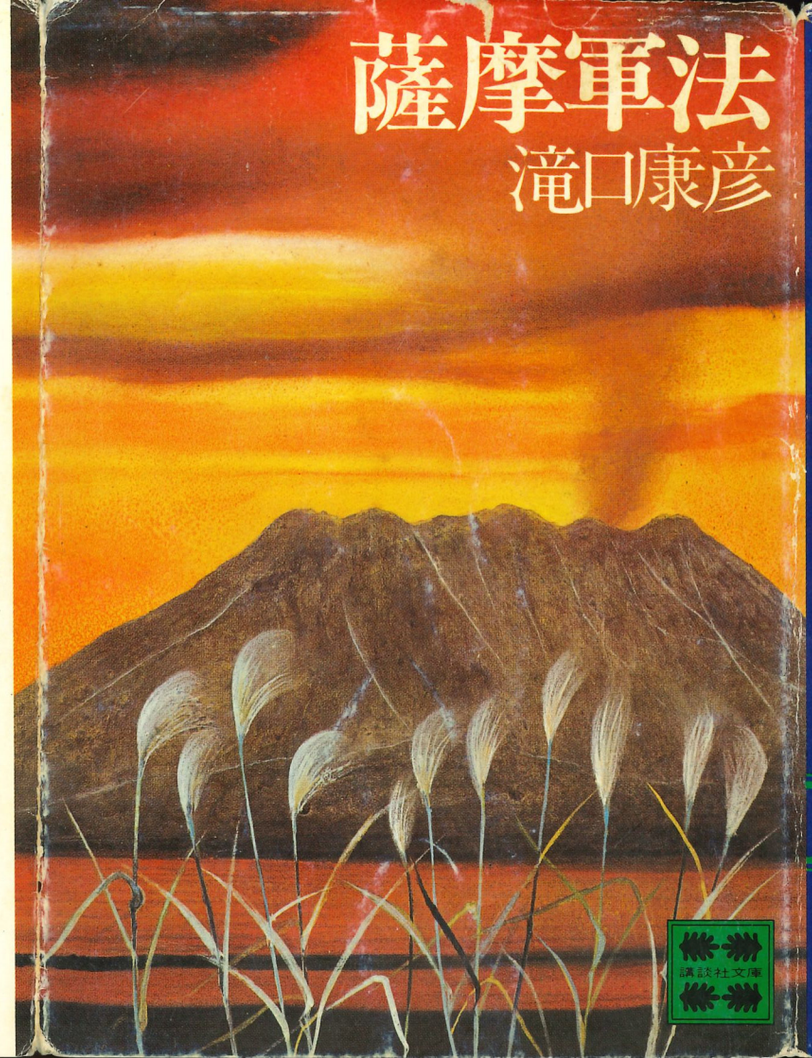
薩摩軍法

滝口康彦



講談社文庫

カバー装画　文月　信



薩摩軍法
滝口康彦
170
2
A735
講談社文庫
360

ひっそり暮らす田舎の老爺与茂作に、突然七十万石の太守島津家久から呼び出し命令がきた。「きっとあのことじゃ」と胸に覚えのある与茂作は腰をぬかしそうになる。四十年も前の戦場で起きたあの出来事こそ、薩摩武士の酷薄な掟によって秘匿された与茂作の秘密であった。士道の表裏を鮮烈に描く、俊英の代表作品集

2253　定価360円

ISBN4-06-131735-0 C0193 ¥360E

■講談社文庫／滝口康彦作品

落日の鷹……A615
薩摩軍法……A735

薩摩軍法

滝口康彦

講談社文庫

薩摩軍法

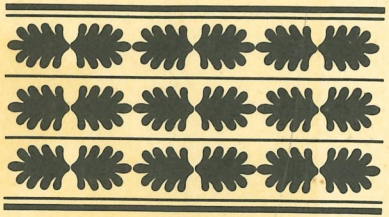
滝口康彦

講談社文庫

講談社文庫

薩摩軍法

滝口康彦



講談社

目次

薩摩軍法　七
秋雨の首　四七
仲秋十五日　九三
白梅月夜　一三三
鶴姫　一六三
かげろう記　一九七
奸臣と人のいう　二四一
解説　磯貝勝太郎　二九一

薩摩軍法

一、一人の敵をも殺したる証拠なきものは死罪、その父子親族は重科に処せらるることあるべし。

一、わが隊将の首級を敵に委すべからず、この仇を報ずるあたわざる時は一隊ことごとく討死せよ。

島津家軍法

一

鹿児島の西北三里ともいい、あるいは五里ともいう。むかし姫野と呼ばれる小さな村があった。いや、村というより、おそらくは薩摩領独自の門割制度による、いわゆる方限であったろうか。薩摩では門割の単位となる一戸の農家を家部と称した。その戸主は名子である。いくつかの家部の集ったものが門で、門の長は名頭もしくは乙名といった。方限は門の集ったもので長は名主と呼ばれた。

姫野が今のどのあたりにあるかは明らかでない。ただわかっているのは、ほど遠からぬところに重平山が望まれたことだけである。その姫野に一つの墓があった。墓地にあるのではなかっ

た。姫野の北のはずれ、隣り合った二つの村への岐れ道近くに一もとの松が枝をひろげていて、墓はその松のかたわらにあった。墓とはいっても、雑草の中にさほど大きくもないありふれた自然石がやや傾きかげんに立っているのみで、石にはなにも刻んでなく、竹の花筒が目に入らなければ、だれ一人墓だとは気づきそうもない。まことに石はひっそりと立っていた。

墓の主がだれなのか村人はまったく知らなかった。古老たちでさえ例外ではなく、知ろうとつとめることも今はないようである。強いていえば、古老たちのうち何人かは、その石がいつごろ、そして、だれの手で立てられたということだけは、おぼろげな記憶の底にとどめていた。もうかれこれ七十に近い、与茂作という老人がいる。墓は与茂作が、まだ若かったころ立てたものであった。

二十三、四のころ、与茂作は、一度村を飛び出している。いや飛び出したといっては嘘になろう。どこかの合戦の折、兵糧運びとしてかり出されたのがきっかけで、そのまま何年も家にはもどらず親もあきらめていた。くわしくはわからぬが、鹿児島衆中（鹿児島城下の武士）に奉公していたらしい。それがある年ふらっと姫野にもどってくると、間もなく女房をもらい、まっくろになって野良仕事に精を出した。女房はおきよといった。

当の与茂作をのぞけば、石のことを、いつまでも忘れず覚えていたのはおきよであったろう。なんでも、いっしょになっていくらもならぬ十一月の末だった。南国薩摩にはめずらしい寒いある日、与茂作は庄屋に頼まれた用事で鹿児島まで出かけたが、日の暮れがた思いつめたひどく青い顔をしてもどってきた。心配した両親やおきよが、なにかあったのかと問いただしても、いいやと首をふるだけで一向にわけをいおうともしなかった。その夜与茂作は、しきりに寝がえりばかりうった。おきよは気がかりで仕方がなかったが、昼間の疲れで、いつの間にか眠ってしまった。それからどのくらいたっただろうか。おきよはふっと目をさました。あたりはまだ暗く、夜明けにはだいぶ間がありそうだった。

夢うつつの中で、おきよははねつるべのきしみと水の音を聞いたような気がする。が、今はしんとしていた。そら耳だったのか。またうとうとしかけて急にどきっとした。手のとどくところにいる筈の与茂作のからだがなかった。与茂作は井戸ばたにいた。まっ白い下帯ととりかえ、洗いざらしながら、こざっぱりした着物をつけ終ったところだった。おきよは声をのみこんだ。

与茂作は家の中にもどると、ゆうべの残りめしを、水をぶっかけて流しこんだが、それがすむと、大黒を祀った棚の下にすすけた竹の筒がかけてあるのを手にとった。竹筒の口は厳重にめばりがしてある。与茂作は日ごろからその竹筒を宝もののように大切にしていたが、なんでそんなに大切にするのか、おきよはもとより、両親も知らなかった。

「おやじやおふくろを大事にしろ」

ぽつんと与茂作がいった。声がひどくかすれていた。おそるおそるおきよはきいた。

「どげんしたと、あんた」

「鹿児島へいく。死んでくるかもしれん。わけはきくな。そのうちにわかる」

のみこむのにいっときかかった。それほど信じられなかった。おそろしい意味がずしりと胸に落ちこんだ瞬間、おきよは声をあげようとしたが、

「騒ぐな。まだかならず死ぬとはかぎっとらん。ひょっとすれば助かるかもしれん。が、覚悟だけはきめちょけ。よかか、おやじや村ん衆にはもらすでなかぞ。ただ鹿児島へまた行ったとだけいうんじゃ」

いやといえば、首もしめかねない与茂作の気がまえだった。おきよは仕方なくうなずいた。与茂作は血ばしった目をして、さらに念を押して外へ飛び出した。まるで磔柱を背負わせられたような思いだったが、それでもおきよはいわれた通りにした。口外しそうになると、すさまじい与茂作の顔を思い浮かべた。しかし、おきよは最後に負けてしまった。陽が傾きかけたころ、なにもかもしゅうとに告げたのである。

「ばかっ、なんではよういわんとじゃ」

仰天したしゅうとは、鍬もなにもほうり出して、大声をあげて村ん衆を呼び集めた。しゅうとめは、しらがを振り乱して、おきよをこづきまわし、ののしり散らした。小娘のようにおきよは泣いた。

当の与茂作が、すごすごともどってきたのは村ん衆が集って間もなくである。いったいどうしたのだと口々にたずねる村ん衆へ、なんでもなかと与茂作は一言いい、あとはなんときいても口をつぐんで押し通した。

「人さわがせにもほどがある」

村ん衆は、ぶつぶついって引きあげた。おきよは、ばったのように頭をさげねばならなかった。その日から与茂作は、人が変ったように無口になり、石みたいに黙りこんでいることが多

かった。わけはいわない。しつこくたずねると、

「うぜらし」

とどなった。

村ん衆をさわがせてから、二月ばかりたったころ、与茂作は、村はずれの岐れ道近くにある松の木のかたわらに、どこからか石を運んできて立てた。花を供えた竹筒で、墓のつもりだとわかったが、だれの墓だとは一言もしゃべらなかった。おきよにさえもいわなかった。さまざまなうわさが立った。女の墓かもしれないとおきよは思った。

「ばか、そげんもんじゃありゃあせん」

与茂作は頭ごなしにきめつけた。そのくせ、だれの墓だとは明かしてくれなかった。そんなある日、村の腕白がわるさをした。松の枝に立ちはだかって、たかだかと小便を飛ばせ、墓にひっかけたのである。そこへ与茂作が通り合わせたからたまらない。血相を変えて走り寄った与茂作はいきなり腕白の足をつかんで引きずり落し、顔が倍になるほどなぐりつけたが、それだけではまだおさまらず、松の枝に逆づりにした。泣きさけぶ声に耳もかさなかった。激昂した村ん衆が、こんどは与茂作をふくろだたきにした。

気がついたのは日が暮れてからである。そばに石があった。空には、初夏の月が、あわい光をなげていた。石のうしろの方から声がした。おきよだった。

「あんた……」

「すまん。心配かけた……」

そのとき、しばらく忘れていた嫉妬が、おきよの胸の中で急に青い火を吐きはじめた。この石は、だれの墓なんだろう。にじり寄って与茂作を責めた。与茂作はやはり教えてはくれなかった。

「死んだお人と約束した。だから、おまえにだっていえん」

ただ、墓の主は決して女ではない、色恋沙汰から出たことではない、それだけははっきり誓うと与茂作はつけ加えた。嘘ではないとおきよは思った。無理に自分を納得させたのではなかった。そのときから、おきよは二度と石のことを口に出さなかった。

長い歳月が流れた。

与茂作はそろそろ七十に手がとどきかけている。おきよは数年前に死んだ。死ぬときも石のことはなにもいわなかった。与茂作のいちばん上の孫は、もう野良仕事ができた。

石はむかしのままひっそりと立っている。その石をめぐって、むかしどんなことがあったか、たいていの村ん衆は、ほとんど忘れかけていた。だれの墓かたずねる者など、今はもう一人もなかった。当の与茂作でさえ、思い出すこともないかに見えた。ところが、ある日、門の乙名が名主をつれて与茂作のもとへやってきたのである。

「与茂作、庄屋さまからお迎えじゃ」

庄屋といえば、方限の長である名主よりもえらい。方限が集ったものが村で、その村をとりしきっているのが庄屋なのである。しかも薩摩では、庄屋は百姓ではなく郷士であった。

「庄屋さまが、なんの用じゃろう……」

与茂作は足がふるえた。元和四年春のはじめであった。

二

うす暗くなるころ、庄屋の屋敷からもどってきた与茂作は、うちに着くなり、へたへたと上りかまちに腰をおろした。

「お殿様がわしをお城にお召しになる……。あの石のことで……」

今日、庄屋のもとまで、鹿児島のお城下から、樺山なにがしという武士がきて、太守島津家久の命を伝えたのである。与茂作は途方にくれた。家久が、なんであの石のことを知ったか、よくわからない。ずうっと以前、この地方の地頭をつとめたことのある、本郷次郎右衛門が話をしたのかもしれなかった。しきりにため息ばかり出た。せがれや孫たちも不安そうであった。

数日後与茂作は、鶴丸城に召された。鶴丸城は、上之山にあるところから上之山城とも称され、慶長六年に当代の島津家久が築いたものだが、天守閣もない屋形づくりの質素な居館である。しかし与茂作にとっては、胆のつぶれるような存在に違いなかった。

その日与茂作は、本丸のお庭先で家久に謁した。家久は、広縁にすえさせた床几にゆったりとかけ、かたわらには、伊勢兵部をはじめおもだった老職、近習の面々、太刀を捧げた小姓などがひかえていたが、与茂作はただかすみが立ちこめているように感じた。

「だれぞの墓じゃとかきいた。何人の墓であるか、またいかなるいわれのあるものか、じきじきにききたい」

家久のことばに添えて、即答を許すとの仰せであるぞと、伊勢兵部がいった。ありうべきことではない。薩摩、大隅、七十二万八千石の太守が、一介の老爺に即答を許す、それだけでも、家久がどれほどの興をそそられているかがうかがわれた。気も遠くなる思いで与茂作は額を地にすりつけていた。伊勢兵部に答えをうながされたが、しばらくは口もきけない。ふたたびうながされ、与茂作は、顔をあげずほそぼそとなにやらいった。家久も兵部も聞きとることができないでいると、

「せっかくの思召ながら、死んだ者との約束があって、申しあげるわけには参らぬ。かように申しております」

近習の一人がかわっていった。

「なに、申されぬ。殿のおたずねに対して、お答えができぬとはなにごとじゃ」

日ごろは温厚な伊勢兵部の顔がけわしくなった。与茂作の返事は変らなかった。責めてもすかしてもきめはない。

「首をはねられてもいえぬと申すか」

兵部は声をはげました。与茂作は平伏したまま動かなかった。それが答えであった。近習たちは息をのんだ。怒った家久が、いきなり与茂作を手討ちにするのではないかと見たのである。家久の父島津義弘は、朝鮮役の折石曼子の名を鶏林八道に轟かせ、関ケ原の合戦に際しては、烏頭坂において敵中突破の離れ業を演じた勇将として知られている。その血を受けて家久も剛毅の性の持主であった。ただではすむまいと、だれしも考えたのは無理ではない。が、意外であった。

「さようか。首にかけてもいわれぬと申すものを、強いて聞くわけにも参るまい。兵部、なにもいわずもどしてつかわせ」

「しかしながら……」

「よいと申すに」

奥へ去りかけた家久が、なにげなく振りかえったとき、おそるおそる顔をあげた与茂作と目があった。与茂作はまたあわてて、額を地にすりつけたが、その一瞬の与茂作の表情を、家久はいち早く見てとった。家久は、もとの席にもどった。

「与茂作とか申したの。その方、余になんぞ申したいのであろう。違うか」

やさしいことばが、とっさに与茂作の腹をきめさせたらしい。与茂作は、伊勢兵部の方へ向き直った。

「お側ん衆まで申しあげます。むかし御家中に、染川小八郎という者がおりましたこと、お殿様にはご存じでございましょうか」

染川小八郎は、天正九年の秋、わずか十五歳の若さで死んだ。父の名はたしか染川掃部という筈だと与茂作はつけ加えた。

天正九年といえば、家久は米菊丸と呼ばれてまだ六歳、むろん染川小八郎の名を覚えているわけがなかった。近侍の者も知らぬし、伊勢兵部にも記憶がなかった。なにぶん四十年近くも昔のことである。家久は、右筆頭の木脇忠太夫を呼び、古い記録類を調べるように命じた。与茂作に語らせるだけではすまないなにかが、どこかに隠されている。しきりにそう考えられた。忠太夫

は、部下の右筆方全員を集めて、ただちに調べにあたった。

その間に家久は、伊勢兵部とはかって、六名の者を城中に呼んだ。いずれも五十四、五歳前後の者ばかりである。小八郎が今生きているとすれば、五十二歳になるところからこうした措置がとられたものだった。六名の者は、みなそれぞれ、染川小八郎についてかすかな記憶を残しており、語るところはおおむね一致した。小八郎は美貌の少年であった。三国一のよか稚児どんと、たいそうな評判だった。だが、それ以外については、六名のうち五名までがなにも知らぬという。小八郎の死についても記憶がないというのだ。これはいかにも不審だった。逆ならば話はわかる。十一、二のころの小八郎を覚えていて、小八郎の死について覚えのない筈はあるまい。知っていていわないのだとしか思いようがなかった。なにかございますなと、伊勢兵部の目が、家久に語った。五名の者はみな、こころもち顔を伏せたままで、一人広瀬助之丞のみが、他とやや様子が違っている。

「その方はどうじゃな」

すこし膝を進めて兵部がきいた。知っているがいえぬと助之丞はいった。

「お家の恥でござわす。語るだけにても口が汚れ申す」

それだけいうと、助之丞は口をつぐんでしまった。もともと頑固でへんくつな男である。これ以上は聞き出せぬと見て、兵部は六名をさがらせた。

あくる日島津家久は、伊勢兵部の登城を待ちもうけて、右筆頭木脇忠太夫を召し寄せた。忠太夫は、紙の色もすっかり変ってしまった古い美濃紙の綴りを、二、三冊手にして伺候したが、血

のにじんだような赤い目をしていた。おそらく右筆方一同を督励して徹宵したものであろう。忠太夫の語るところによれば、染川小八郎の名が記録に見られるのは、わずかに天正九年八月の分と、同じく十一月分のみで、それ以外のものには一個所も記載されていないという。だが、父掃部の名は、天正九年よりさかのぼってしばしば見られた。掃部は大剛の士であったらしく、抜群の戦功を樹てて、感状を賜わったこともなんどか記載されている。忠太夫はまず、天正九年八月の記録をさししめした。

「肥後水俣城攻略に際しての、出陣の着到にございます」

このときの着到には、小八郎の名があり、父の染川掃部の名は見られない。なんらかの理由があって、小八郎がかわりに出陣したものであろうと忠太夫はいい足した。忠太夫はつづいて、十一月分の記録をとり出した。

「これには、小八郎はゆえあって切腹とございます。なおこのとき、父の掃部も切腹、染川家は断絶しております」

昨日、広瀬助之丞がいったのはそのことかと察せられたが、ゆえあってとだけではなんの手がかりも得られない。家久が兵部と顔を見合わせていると、

「それにつき、いささか解しかねることがございます」

忠太夫はさらに意外なことを告げた。というのは、天正九年八月の、肥後水俣城攻略の際における島津軍の戦死は百四十名を記録されているが、それには古垣右馬助の一隊五十名の全滅がふくまれている。ところが、出陣の着到から推しはかれば、染川小八郎もその古垣隊に属していた

と考えられるのだ。

「しかも、これをごらん下さい」

忠太夫は、いま一つの記録の綴りをさしだした。見れば数個所、墨をもってくろぐろとぬりつぶしてある。

「水俣合戦に関するものでございます」

たしかになにかある。家久ははっきりそれを感じた。秘密はぬりつぶされた墨のあとに隠されている。しかし、解くべき鍵はどこにもなかった。

「殿、諏訪神六を召されてはいかがでございましょう」

伊勢兵部が急にこういい出したのは、木脇忠太夫がさがって間もなくであった。兵部は、諏訪神六の父、上井覚兼のことをいったのである。なるほどと家久は軽くうなずいた。

上井覚兼。本姓は諏訪、祖父の代に地名をとって上井とあらためた。覚兼は、神五郎、神左衛門と称し、二十九歳の折、先々代すなわち家久にとっては伯父にあたる島津義久の奏者となったが、後日さらに抜擢されて老中職に就き、伊勢守に任ぜられた。単なる武将ではなかった。文雅のたしなみも深く、伊勢守心得書をあらわし、また数多くの歌も残している。

飛鳥川淵より深きなさけだに
　瀬にかわりぬることぞかなしき

右の歌など家久も知っている。しかし、兵部がふっと上井伊勢守の名を持ち出したのは、伊勢守が克明に日記をしたためていたということを、だれかに聞かされたことがあったからである。

ちなみにしるすと、伊勢守の日記の残された分は、『大日本古記録上井覚兼日記』として、全三冊にまとめられ、先年岩波書店から出版されている。

「伊勢守の日記をのう……」

家久は考えこんだ。伊勢守は晩年、薙髪して伊集院に隠栖し、天正十七年に歿している。すでに三十年も昔のことである。

「よし、諏訪神六を呼べ」

ややあって家久は、兵部に命じた。その日のうちに諏訪神六は登城したが、家久の問いに対して、

「父の書き残したもの、すべて残っております」

と、謹んで答えた。

三

島津家久の命で、城中にとめおかれた与茂作は、数日後の昼過ぎに、ふたたび本丸の庭先に召された。それまでに、染川小八郎に関するあらましは、すでにくわしく調べがついていた。諏訪神六が差し出した上井伊勢守の覚書によって委細が判明したのである。

天正九年八月なかば、染川小八郎は父掃部病気のためかわって出陣した。このとき島津軍は、当時八代にあった人吉城主相良義陽の老臣、犬童頼安の守る肥後水俣城を攻めた。総勢四陣にわかれ、島津忠平――のちの義弘は焼井原に、島津征久は南福寺井手川に、島津義虎は藁皿に、そ

して、新納忠元は銭亀尾にそれぞれ陣した。

二十日の早暁、城兵は門をひらいて突出、島津勢また相応じ、大明神口から源蔵渡しをわたって進撃した。この日、薩軍の死者百四十、相良方の死者百六十、勝敗のわかれはほとんど五分だったが、薩軍は古垣右馬助を失った。古垣は士五十人の将である。その首級をあげたのは、相良勢きっての勇士、前田監物であった。古垣隊五十名は、引きあげの貝が吹かれてもさがらず全滅した。

一、わが隊将の首級を敵に委すべからず、この仇を報ずるあたわざる時は一隊ことごとく討死せよ。

死をもって、厳たる島津家の軍法を守ったのである。あくる朝、合戦らしからぬ風流なことがあった。薩軍の新納忠元が、

秋風に水また落つる木の葉かな

と、上の句をしるした矢を射こむと、城中からは犬童頼安が、

寄せては沈む浦波の月

と、たちどころに下の句を賦して、薩軍の陣営に射返してきた。

「敵ながらあっぱれだな」

島津忠平は、かたわらの上井伊勢守をかえりみて、後陣にある総大将、兄義久にもこの旨を知らせよと命じたが、そのあとにわかに陣営が騒がしくなった。ほどなく、首袋を腰に結びつけた一人の若武者が、忠平の前に平伏した。昨日全滅した古垣隊に属している、十五歳の染川小八郎である。小八郎は、首袋のひもをゆるめて、一個の首をとり出し、忠平の前に置いた。

「古垣右馬助どのの首にございます」

おどろいたのは忠平だけではない。上井伊勢守や、平田光宗、本田親貞も、ほうと身を乗り出した。

「昨夜おそく、水俣城に忍びこみ、奪い返して参りました」

夜の明ける前に首をとり返して城からぬけ出すことに成功したが、昨夜ぬぎ捨てた鎧の隠し場所をたずねあてるのに手間どってしまったと、小八郎はいい足した。忠平は、いろいろ問いただしたが、小八郎はいちいちはっきり答えた。忠平は最後にきいた。

「どういうつもりで、首を奪い返す気になったのじゃな」

「命が惜しゅうございました。まだまだ生きていたかったのでございます」

小八郎はまっすぐに忠平を見た。自分はまだ十五歳に過ぎない。死ぬことをおそろしいとは思わぬが、いま死ぬのはいやだった。そんな風に小八郎はいった。

「ハハハ、小気味よいことを申す。よしよし、もう死ぬには及ばんぞ」

忠平は笑って、当座の褒美じゃと、小八郎に印籠を与えた。こうして染川小八郎は、死をまぬがれたばかりでなく、大いに面目をほどこし、日ならずして、薩摩随一の美少年と賞めたたえる声が、味方の全陣営に伝わったのである。ここでいう美少年とは、単に容貌の美をさしているのみではない。いわば心ばえの美、つまりは薩摩勇少年の意味であった。が、その美名は、後日いまわしい汚辱にまみれるはめとなった。

八月二十七日、犬童頼安は、水俣城を明け渡した。いくほどもなく相良義陽は、島津義久に対して降伏を申し入れ、義久もこれを許した。水俣、津奈木、佐敷、ほか合わせて六城を割き、二子を人質として鹿児島へ送るという条件であった。

その年の十一月はじめ、相良義陽は、島津義久に、前田監物を使者として、

「われいま麾下に属して寸功もなし。阿蘇惟前近きにありて服せず、これを討って功に代えん」

と申し出た。義久はそのことを感謝し、武運めでたい戦いとなるよう祈ると答えた。それまではなにごともなかった。その夕刻、義久の内意を受けて、上井伊勢守は、城中の一室に監物を招いて饗応したが、このとき思いがけないことが生じた。たまたま水俣合戦の話が出たので、伊勢守は、古垣右馬助を討ち取った監物の武勇を賞賛したあと、染川小八郎の話を持ち出した。伊勢守にしてみれば、少年小八郎の勇を、それとなく誇る気持が動いたであろうことは否めない。それが悪かった。

「なに、水俣城中に忍びこんで、古垣どのの首を奪い返したと」

監物はたちまち色をなして、そんな筈は絶対にないといい切った。激越なひびきがあった。監物の目は、怒りを宿しながらもすずしく澄んでいる。嘘をついている目ではなかった。自分の一語が、まだ会ったこともない染川小八郎という少年の運命を、根底から狂わせるかもしれないことを、おそらく監物はわきまえていよう。にもかかわらず、断乎として監物はいい切った。強弁とは思われなかった。とすれば、まことにゆゆしいことといわねばならぬ。ともあれ、この場をとりつくろうことが先決だった。

「ただいまのこと、願わくはお忘れいただきたい」

伊勢守の鄭重な言葉に、前田監物はかるくうなずき、すぐ平静にかえった。伊勢守は、同席した島津がわの者にも、他言無用と釘をさした。あくる日前田監物は、島津義久の返書をたずさえて鹿児島を去ったが、上井伊勢守の胸には重苦しいものが残った。

小八郎が奪い返した古垣右馬助の首は、当日、伊勢守自身もつぶさにあらためている。それが違うとすれば、いったいだれの首か。答えはおのずから明らかであった。というのは、古垣隊に属して全滅したなかに、綾部主税という男がいる。かねてから武勇の士として知られていたが、これが右馬助と実によく似ていた。瓜ふたつといってもよい。もっとも、二人はいとこ同士であった。別々に育てられた双生児だというわさもあった。

きかぬ気で勇敢とはいっても、やはりまだ十五歳の小八郎、命惜しさに、討死をとげた綾部主税の首をかき、右馬助の首を奪い返したと見せかけたか。そうとしか考えようがなかった。しかし、あのときの小八郎には、みじんもそんなかげはなかった。忠平の問いに対する応答も、堂々としていた。とはいえ、前田監物の投じた一石は、伊勢守の胸中に波紋を描かずにはいない。だが、いつまでも、思いあぐねてばかりはおれなかった。伊勢守は、自分一人の胸にたたみこんですまそうと決心し、饗応の席につらなった者に、再度、他言無用と念をおした。

が、えてしてこんなことはもれやすいもので、密々にしていたことが、日ならずして城下のうわさになってしまった。こうなっては伊勢守としても捨ててはおけず、ともかく、当の染川小八郎を呼んで、といただすほかはあるまいと考えた。もしかすれば、助ける口実が見つからぬもの

でもない。いちがいに小八郎が、卑劣な振舞をしたときめつける気にはなれないのだ。きっとなにか仔細がある。切にそうあってほしかった。

しかし、染川小八郎は、出頭を命ぜられて、その前に腹を切ってしまった。死にのぞんで父の掃部に、ただ一言、

「みれんでござった」

と詫びたという。父の掃部は、小八郎を介錯したあと、妻女を刺殺し、自分もまた切腹した。こうして、いったん薩摩きっての美少年とたたえられた染川小八郎は、卑怯みれんの醜少年となり果てたのである。

以上のことを、かいつまんで伊勢兵部が語る間、庭にすわって、身じろぎもせず耳を傾けていた与茂作は、話が終りに近づくころから、かたくこぶしを握りしめ、ときどきそのこぶしでめがしらをぬぐった。与茂作のからだぜんたいが、違う、違うとさけんでいるようであった。

四

与茂作は、とつとつと語った。

天正九年八月の水俣攻めの際、染川掃部は出陣できなかった。その年の春、さるところの合戦で、ふとももに負うた鉄砲傷が意外に悪化し、進退の自由にもこと欠いたためである。でなければ、掃部自身が小八郎を戦場にともなっていただろう。初陣の機会はまだいくらもあると、掃部はしきりに説いたのだが小八郎は聞き入れず、是非ともこんどの水俣攻めで、晴れの初陣を飾りたいとひたむきに主張した。もともと小八郎は、気性のはげしい子であった。とはいえ、戦場の働きはまた別である。掃部の目から見れば、やはり心もとなかった。

「鉄砲一つもまともには扱えんくせに、なにをいうぞ」

薩摩の武士にとっては、鉄砲のわざが、いわば表芸の一つである。それを楯にとって掃部はたしなめたが、

「鉄砲ぐらいどうにでも扱えもす」

小八郎は、無二無三にくいさがった。しまいには、

「許して下さらんのなら、もう父上とは口をききもはん」

とまでいう。とうとう掃部の方が折れて君公に願い、小八郎を戦場におもむかせることにした。元服はまだであった。兜首の功名を樹て、帰ってから元服する。小八郎はぬけぬけとそういった。

「ばか、生きてもどる気で合戦にのぞむのか」

掃部に叱られると、小八郎はにこっと笑った。掃部は小八郎を綾部主税に託した。主税は精強を誇る島津勢の中でも、ことに勇猛を知られた名誉の武士で、これまでいくどとなく感状を授けられていた。与茂作はその従卒であった。

「よし、しかとあずかった。じゃが念のためにいうておく。命までは保証せんぞ」

ぶっきらぼうに主税はいった。掃部は大きくうなずいた。小八郎は、うわさにたがわず胆ふとい少年であった。綾部主税があらためて舌を巻いた。戦闘の間ぎわになれば、歴戦の勇士でさえ

覚えず胴ぶるいが出るものだし、中には甲冑の金具が、音をたてるほどわななくものもあるが、小八郎は憎らしいくらい平然としていた。老練の武者たちが、あきれたように苦が笑いした。

薩摩の戦法は、一種独特のものである。まず第一に騎馬隊と称するものがない。第二に鉄砲を重視する。他国においては、鉄砲を駆使するのは、例外なく足軽の任務となっているが、薩摩では、士分の者が一人も残らず鉄砲を使った。義務といってよかった。

鹿児島の城下に居住するものを鹿児島衆中といい、在郷の士を外城衆中と呼ぶが、鹿児島衆中と外城衆中を問わず、士五人をもって一伍となし、二伍十人をもって一小組とする。その十人を一列火と称した。長は先銃火配士と呼ばれる。一隊の人数は別だんの定めがなく、臨機応変の編成となるが、二伍十人が基本となることは、いつの場合も変りがなかった。島津軍法の一例をあげても明らかで、たとえば一伍のうち一人功あれば、他の四人の功となすとか、二伍十人は離れることを許さず、一人の勇怯は他の九人の功罪となすというごときがそれである。

そしてまた、各備えは、それぞれかならず三隊にわかたれた。火器隊、殺手隊、親軍隊である。士みずから鉄砲をとり、刀槍を陪卒に持たせるのが火器隊、刀槍をとって斬撃を主とし、陪卒に鉄砲をたずさえさせるのが殺手隊、火器、殺手相なかばする混成隊がすなわち親軍隊であった。しかもこれらは、ときにのぞんで、火器隊たちまち殺手隊に変り、殺手隊たちまち火器隊に転じた。

八月二十日。この日島津軍は大明神口から源蔵渡しをわたって進んだが、水俣城の相良軍もまた、門をひらいて三度突撃し三度退いた。三度目の戦闘の際、小八郎は兜首をとった。小八郎は

綾部主税とともに、古垣右馬助の隊に属して戦った。戦陣にのぞんでは、原則として、肉親の者を同一の隊に配することは避けることになっている。恩愛のきずなに左右されぬためである。主税が、いとこの右馬助の隊に加えられたのは、隊の編成にあたってなんらかの手違いがあったものであろうか。むろんそんなことは、主税の念頭にはなかった。

与茂作はふと心づいた。全員鉄砲を捨て、殺手隊に変じて白兵戦に移った乱戦の渦の中で、小八郎は屈強な敵の鎧武者と渡り合っていた。綾部主税は、邪魔する敵を突き伏せながら、

「小八郎、手は貸さぬぞ。一人で討ち取れ。一人で兜首をあげるのじゃ」

と大声ではげました。気ははやっても、戦いなれない小八郎は、しだいに押されぎみになった。与茂作ははらはらするが、主税は助けようとはしない。やがて小八郎は組討ちになりごろごろ転がった。組討ちは軍令をもって禁じられているが、おそらく夢中なのであろう。与茂作が飛び出そうとすると、

「ばかめ、放っちょくのじゃ」

主税はどなった。さすがに主税はよく見ていた。死にもの狂いの末に、小八郎はようやく首をあげた。その時であった。どよめきの中から大声がひびいた。

「相良の家臣前田監物、薩摩の古垣右馬助を討ち取ったぞ」

衝撃が味方の陣を波のように走った。前田監物はすでに馬上にあった。馬の鞍に結んだ首袋は、ずしりとした重みをはっきり見せている。首を奪い去られることは、一隊の全滅を意味していた。主税も、小八郎も、前後左右の味方の兵も、いっせいに前田監物めがけて殺到した。監物

はおそろしく強かった。追いすがる島津勢を、突き伏せ突き伏せ、ゆうゆうと城に引きあげた。さしもの綾部主税でさえ討つことができなかった。染川小八郎の運命はそこから狂った。

すすきの原に宵闇がこめていた。あたりには虫の音が満ちている。その虫の音が、不思議な静けさをかもし出していた。水俣城は、鳴りをひそめて、宵空の下に黒くうずくまっている。後方の味方の陣のところどころには、篝火が望まれた。

すすきの中に、人影がわずかに揺れた。三つ、四つ、五つ——。あとはない。あとは夜があった。主税、小八郎、与茂作、他に、有川、碇山という味方の武士、そして、小八郎と与茂作だけがかすり傷で、残る三名はいずれも重傷を負っていた。さっきから、みなすわりこんだままであった。

引きあげの貝が鳴るのはわかっていたが、古垣右馬助を討たれた以上、退くわけにはいかなかった。島津の軍法が、厳として帰営をはばんだ。いや、いったん退いて、明日の戦闘に死を賭けることはできる。しかし、それすら恥とするものがだれの胸にもあった。ここに残った以外の古垣隊の者は、おそらくほとんど討死をとげたに違いない。不幸にも生き残った者ばかりがここにはいた。

「おはんら、おいの首をうて」

長い沈黙のあと、突然主税が身を乗り出した。はじめはなんのことかわからず、与茂作はあっけにとられていた。

「おいの首をうて。古垣どんの首じゃというて持ち帰るんじゃ。死首になれば、まず見わけはつ

かんに違いなか」

「いやでごわす」

いきなり三つの声がもどってきた。黙っていたのは与茂作だけである。主税はなおもいった。

「しょせん助かりようのないおいじゃ。だが、この首で、おはんらは助かる。頼む、そげんしてくれ」

主税は、小八郎を助けることを考えている。それがやっと与茂作にも読めた。が、有川と碇山は、そこまでは気づかず、

「ばかをいわっしゃい」

「そげんしてまで、命助かりたいとは思いもはん」

吐き捨てるようにいって、よろよろと立ちあがると、刀を杖にして歩き出した。おぼつかない足どりだった。多分、別の場所にひそんで夜明けを待ち、出撃する敵の中に斬りこむつもりに違いない。あとを追おうとして、主税は思いとどまった。二人の足音が消えたあと、しばらくして、小八郎が急に立ちあがろうとした。草摺をつかんで主税が引きとめたとき、やや離れたすきの中から、鋭いうめき声が聞えた。

「刺し違えおった……」

夜明けを待っても、とうてい満足な戦いはできぬと悟ったものだろうか。小八郎もすぐうめき声に気づいたらしい。主税の正面にまわって片膝ついた。必死の気がまえがうかがわれた。小八郎の口を封じるように、先に主税が切り出した。

「おいは、おはんだけでも助けてやりたか」
「いやでごわす」
にべもなかった。
「小八郎、おはんな、おいを卑怯者とでも思うのか」
「思いもす」
ずばっと返事がはねかえった。
「黙れ」
主税ははじめて、はげしい声を出したが、すぐまた平静をとりもどした。
「よいか小八郎、おいはこれまでの合戦に、なんども感状を頂戴した。綾部主税の名は隣国にも知られちょる。そのおいが、なんで卑怯みれんなことをおはんに強いるものか。おいは、今ここでおはんを殺すとが惜しかとじゃ。おはんな、まだ十五歳に過ぎん。にもかかわらず、おはんな、今日のいくさにひとかどの働きをしめした。この先あと十五年、いや、あと五年でもよい。生きておれば、島津のお家のために、どれほどの働きができることか。小八郎、今死んでは、もったいなかとは思わんのか……」
小八郎は黙っていた。さすがに心を揺すぶり動かされたらしい。ここぞと主税はにじり出た。
「実をいえば、このおいとて、今ここで死にとうはなか。が、厳たる島津の軍法の前にはもはや生きてはおれんのじゃ。おはんな違う。おはんにはまだ生きる道がある。おいの首を役だてて、さきざき、このおいの分まで働いてはくれんか」

むろん、それだけが本心ではない。なんとしてでも小八郎を助けたいという、綾部主税の思いが与茂作には読めた。しかし、それをいってはならない。一言でもそれをもらせば、弱年ながら気性のはげしい小八郎が、聞き入れる筈もなかった。
「島津のお家のために、一生一度の大嘘をついてもらいたいのじゃ」
それを大上段にかざして、綾部主税はじゅんじゅんと説いた。答えはなかった。
「わかってくれ、小八郎」
肩にかけようとする主税の手を、ややじゃけんに振りはらって、
「考えさせてもらいもす」
小八郎は立ちあがった。まだ怒っているようすがあった。小八郎はやがて、すすきの中をどこかへ消えた。与茂作が、あわててあとを追おうとしたが、
「よいから放っちょけ」
と主税が制止した。小八郎は、腹を切るかもしれないと与茂作は案じた。
「その時はその時じゃ」
主税は、重い息を吐いた。

五

血のにおいのする暗い中を、与茂作は歩いた。槍や、刀や、鉄砲や、旗指物（はたさしもの）の落ちているのが、ときどきつま先にふれた。死人もころがっている。中には、まだ苦しそうにうめいている者

もあった。鎧武者の死体につまずくたびに、与茂作はそのからだを手さぐりした。

「矢立てを持ったやつがいるかもしれん。拾ってこい」

さっき、主税にいいつけられたのだ。不思議と、おそろしさは感じなかった。うす気味が悪いとも思わない。頭の中には小八郎のことだけがこびりついていた。矢立ては、意外と早く探しあてることができた。

夜露をふみ、すすきをかきわけて、もとの場所にたどりついたとき、綾部主税はすわりこんだまま腕を組んでいた。矢立てを渡しながら与茂作は、小八郎のことをきいた。

「まだもどってこん」

ややふきげんに主税は答えた。迷っているのだとは思うが、それにしてもあまりにもおそ過ぎる。ひょっとすると、腹を切ったのかもしれないとしきりに気づかわれた。おそい二十日の月の出も、間もなくらしい。山の端がほんのり明るかった。虫の声は、相変らずすすきの原を埋めている。

「島津の軍法と申すのは、まことにむごいものでございもすなあ」

与茂作はしみじみもらした。

「よけいなことを申すな。それゆえにこそ薩摩は強いのじゃ」

思いのほかに主税はけしきばんだ。

「いかにもむごくきびしい軍法ではある。じゃがのう与茂作、そのむごくきびしい軍法が、薩摩の平安を支えちょるのじゃ。薩摩びとの命をちりあくたのように扱うことで、同じ薩摩びとの平

安が守られちょるのじゃ」

昂然たる声であった。だが、与茂作はかえって、逆のものを感じた。主税さまは、うらはらなことを申されている。そう思った。与茂作が、くしゅんとはなをすすったとき、小八郎が姿をあらわした。帰ろうか帰るまいかと思案をかさねた末、やっと心をきめてもどってきたようなようすがあった。いつの間にか月が出ている。欠けて光の弱い月だった。筆はとてもとれそうもない。主税は、そとにもれぬように用心して、与茂作に火をたかせ、そのあかりで、数枚の鼻紙に矢立ての筆を走らせた。主君島津義久にあてて、小八郎に首を与える仔細をしたためたのである。最後に、

……後日お家のお役に立つべき小八郎と存じ、かくは苦肉の策をとり申し候しだいにござ候。小八郎に卑劣みれんの汚名かかり候ては、主税儀未来永劫成仏なりかね申し候。

と結び、自分の名を記した。

「よいな与茂作、小八郎にまさかの疑いがかかるような節は、この状を持って、その方があかしを立てるのじゃぞ」

噛んでふくめるように主税はいった。押しいただいて与茂作は、その鼻紙をふところにおさめた。

「この火を始末して、うまく逃げろ。その方は下郎のことゆえ、ほとぼりさえおさまればさしたるお咎めはなか筈じゃ」

与茂作にいい足してから主税は、さあと小八郎をうながした。小八郎は動かない。唇を噛んだ

その顔を月が照らし出している。主税はいらだった。

「なぜためらう。なにも恥ずるところはなかぞ。おはんな、島津のお家のために、この綾部主税の命を受け継いで、新しく生れ変るとじゃ。卑劣な振舞と恥じる心がもたげたら、そのときは十の兜首をとれ、百の兜首をとれ。また万が一、身に疑いの及ぶような際はあくまでしらを切り通すのじゃ。しらを切ることが、大嘘つくことが、とりも直さず御奉公じゃと思うがよか……」

語尾が、苦しげに乱れた。もう、気力だけで支えているのに違いなかった。

「さ、ついてこい」

やがて、二つの足音が去った。すでに残り火の始末をつけていた与茂作は、目に見えぬ糸で引かれるようにふらふらと跡を追った。すすきの道であった。ひどく遠い気がした。

「ここらでよかろう」

主税の声がし、すすきの倒れる音がした。あと、しいんとなった。与茂作はうずくまってつばをのみこんだ。虫の声が聞えなくなった。鳴いてはいるのだ。

「敵の首をあげるつもりでやれ」

どうやら主税は大の字なりに倒れているらしい。返事はない。みたび、主税の声がした。

「いい忘れちょった。おいの首、新し過ぎるかもしれん。うまく汚しちょけ」

古垣右馬助が討たれたのは、今日の夕暮れごろだった。あれから、だいぶ時刻がたっている。主税はそれをいっているのだ。

「やれ、馬乗りになってざっくりやれ」

小八郎は答えない。主税は励ました。

「臆したのか」

与茂作は、そこからはうようにして逃げ出した。いたたまれなかった。のどがからからになっている。与茂作は大きく息をした。夢の中でおそろしいものに追われたときのようにへとへとに疲れている。頭上には澄み切った秋の星空があり、地には無数の虫の声が満ちていた。

与茂作は耳をすました。耳だけの与茂作がいた。どこか遠くで鈍い音がした。違う、気のせいだ、あわてて打ち消した。しんとしている。やはりそら耳だった、ほっとしたとき与茂作は、かすかな笛の音を聞いたと思った。笛ではなかった。少年のすすり泣きであった。

六

そこまで語って、与茂作は、重い息をもらした。島津家久も、かたわらの伊勢兵部も、近侍の面々も、太刀を捧げた小姓も、皆いちように息をのんでいた。しわぶきをもらすものもない。年老いた与茂作の、両の頬がぬれて光っている。

「戦場からは、無事に逃げかえることができました」

与茂作はまた語り出した。

何年ぶりかに踏む、姫野の土だった。重平山がなつかしかった。とっくにあきらめていたおやじやおふくろは、涙を流さんばかりであったが、与茂作はひどく落ち着かなかった。胸のどこかに石がつかえているような毎日を送った。そのうちに与茂作は、小八郎が、薩摩きっての勇少年

として、賞讃的になっていることを知った。やっと安心できた。

おやじにすすめられて、与茂作はやがて女房をもらい、野良仕事に精を出した。主税に与えられた例の鼻紙を、竹の筒に入れ、厳重に目ばりをして、与茂作は、大黒を祀った棚の下にかけた。

「これはお宝じゃ。このおかげで、わしは生きてもどれたからのう」

そういっただけで、仔細はだれにも明かさなかった。村でもときどき小八郎の話が出た。

「なんとえらいもんじゃのう。まだたったの十五というのに敵の城に忍びこんで、首をとりもどしてくるとは」

もう大丈夫だ。与茂作は安心した。ところが、破局はほどなくやってきた。十一月の末ごろだったが、庄屋のいいつけで、与茂作は鹿児島へ出かけた。そのとき、用をすませたあと、ある屋敷に奉公している甚作という知り合いをたずねて、その口から思いがけないことを聞いたのである。

「染川小八郎さまのごようすを知りたいというのか。それがのう……」

与茂作はどきっとした。

「与茂作、高い声ではいわれんが、水俣の城から、古垣さまの首をとりかえしてきたちゅうのは、嘘ちゅう話じゃ」

「そげなばかな。小八郎さまは、わしゃよう知っちょる。そげなお人じゃなか」

「しかし、のっぴきならぬ証拠があるからのう。相良の使者の口からわかったそうじゃ」

与茂作は、がたがたとふるえがきた。村にもどったときも、顔がまっ青だった。主税さまのおいいつけを果たさねばならぬ。それはわかっていた。わかっていても、からだが、いや、心が思い通りにならないのである。苦しみもだえ、のたうちまわる思いをした。知らぬふりをしていよう。悪魔に、しきりにそそのかされた。しかし、与茂作に最後の決心をつけさせたのは、頭にこびりついている、すすきの中の一夜であった。

あの書きつけを差し出すだけではすまん。そうだ、腹を切ろう。腹ぐらい、おれにも切れんことはない。おれがりっぱに腹を切れば、きっとだれもが、小八郎さまの潔白を信じてくれよう。綾部主税さまの心を、わかってくれよう。

年とった両親も、もらって間もない女房のおきよも、振り捨てる決心がついた。仕方がないと思った。

「わたくしは、証拠の書きつけの入った竹筒を握りしめて、無我夢中で、お城下へ駆けつけました」

そこまで語って、与茂作がはなをすすりあげたとき、島津家久がきいた。

「間に合わなかったのじゃな」

「いいえ、間に合ったのでございます」

与茂作は強く首を横にふった。

「これで、小八郎さまは助かる。わたくしはそう思いました……」

与茂作は、またもはなをすすりあげ、こぶしで涙をふいた。忘れようとしても忘れることので

きない、その朝の思い出が、えぐるように胸に迫ってきた。そのとき、たしかに与茂作は間に合った。霜ばしらの道をいっさんに駆けて、夜の明けしらむ前に、鹿児島の城下へ着いたのである。そのときまで、染川小八郎は生きていた。

与茂作は語った。

……いったいどのようにして、染川掃部さまのお屋敷へ飛びこんだか、わたくし自身、しかとは覚えておりません。気がついたときには、染川さまのお庭にいた、そうとでもいうよりほかはないのでございます。

たちまち、おそろしい光景が目の前になだれてきました。小八郎さまは、畳二枚を敷いた切腹の座に直られ、背後には父の掃部さまが、たすきがけ、袴のももだちを高くとって立っておいでになりました。検使の方は見あたりませぬ。正式に死罪を申し渡される前に、みずからお腹を召されるのだと、すぐ読めました。三方にのせられた腹切り刀、かたわらの水桶、小八郎さまの白装束……。

——間に合った、間に合った。

わたくしは、へたへたとその場にすわりこみ、荒いいきを吐きながら、夢中でなにやらさけび、右手につかんだ例の竹筒を、目の前に突き出しておりました。

「小、小八郎さま」

わたくしはそのとき、小八郎さまの顔色が変るのを、はっきり見ました。さっとそのおもてをかすめたのは、喜びではありません。明らかに、怒りともとれるはげしいものでございました。

「いうな与茂作」

一喝した小八郎さまは、右手に腹切り刀をとり、左手につかんだ三方を、この与茂作めがけてたたきつけるが早いか、前をくつろげ、同時に、左の脇腹へ、ずぶっときっ先を突き通すと、力まかせに右へ引きまわされました。そしてさらに、その短刀を持ちかえてみぞおちに突き立て、まっすぐへそまで切りさげられたのでございます。

「父上、御介錯」

すかさず、振りかざした掃部さまの刃が、白く光りました。庭にかけこんでからそれまでが、ほとんど一瞬でございました。ふと気がつくと、縁がわに、掃部さまのおつれあいが、氷りついたようにすわっておられました。その目には、ひとしずくも宿されてはおりません。けれども、声をかぎりに泣きさけぶよりもいっそう切ないものがおつれあいの身のまわりに、まつわりついていたと申せましょう。わたくしは掃部さまの方へ、例の竹筒を差し出して、

「お信じ下さい。小八郎さまは、決して卑劣な振舞などなされてはおりません。あの首は、あの首は、綾部主税さまがご自分から……」

堰を切ったように、忘れることのできないすすきの原でのいきさつを物語りました。話すということのもどかしさを、そのときほど強く感じたことはございません。わたくしはそれこそ、掃部さまを叱りつけるようなはげしさで、小八郎さまのために弁じました。

その間掃部さまは、血刀をだらんと右手にさげたまま、ときどき、うむ、うむと、うなずきうなずき、わたくしの物語りに、耳を傾けておいでございましたが、ようやく一通り語り終りま

すと、はじめて刀の血糊をぬぐって鞘におさめ、
「わしは小八郎を信じておった」
と、つぶやくように申されました。
「親の口から申すもおかしいが、命惜しさに卑劣な小細工を弄する小八郎とは、とうてい考えられぬ。これには定めしわけがあるに違いない。それゆえわしは、つつまず仔細を申せとけさがけさまで責めたのじゃ……」
だが、小八郎さまは、
「申しわけごわはん。みれんでごわした」
との一点ばりだったそうでございます。なおまた、つい前の日掃部さまは、老中職の上井伊勢守さまとお会いになったとか。その折伊勢守さまも、
「これにはかならず仔細がある筈、わしが一度会うてみよう。それまではかまえて短慮の振舞に及ばぬよう」
とくれぐれも念を押された由でございますが、小八郎さまは、
「小八郎の武士は、もはやすたっておりもす。いまさら伊勢守さまに会っても、恥の上ぬりでごわす」
とお答えなされたとやら……。
申しおくれましたが、小八郎さまには、許婚がございました。中馬四郎五郎さまの娘ごで名をなみと申され、小八郎さまとは一つ違いでございます。掃部さまは、わたくしに、こうも申され

ました。
「薩摩隼人としてあるまじきことかもしれんが、わしは小八郎が不憫での、最後にきいたのじゃ。そげな卑劣な男と、なみに思われてもよいか。身のあかしも立てず、黙って死んでゆくつもりか。と……」
すると小八郎さまは、血のにじむほど唇を噛んでおいでだったそうでございますが、
「いたし方ごわはん」
つぶやくようにもらされ、さすがにそのときばかりは、ほろっと涙をこぼされたと申します。

七

「主税どののお情けが、かえってあだになりましたなあ」
事情を知ったおつれあいは、さように申されましたが、その声には、どこかやはりうらめしげなひびきがございました。しかし掃部さまは、たしなめるように申されました。
「あだになったのではない。無になってしもうたのじゃ」
やがて掃部さまは、わたしが渡しました竹の筒を二つに割って、とり出した鼻紙をひろげ、綾部主税さまの筆蹟に、じっと見入っておいでございました。おつれあいは、
「もはやかえらぬ小八郎ながら、せめて身のあかしだけは立ててやりとうございます」
と掃部さまに申されたあと、わたくしへも、
「そなたも証人になって下さるであろうな」

とお頼みなされたのでございます。もちろんわたくしはうなずきました。命もいらぬ気になりました。掃部さまもそのおつもりと見えました。ところが、いかほどもせぬうちに掃部さまは、にわかに思いかえして、

「いやいや、やめておこう」

と申されます。心外なといわんばかりに、おつれあいがきつくおなじりなさると、

「あかしを立ててやったとて、小八郎は喜びはすまい。それを喜ぶ小八郎ならば、与茂作を目の前において、腹など切りはすまいからのう。小八郎は、われらが信じてやればそれでよかろう……」

掃部さまは、そうおっしゃったのでございます。おつれあいは、言葉もなく首うなだれておしまいになりました。あらためて掃部さまは、この与茂作にも、

「よいか与茂作、このことは、今日かぎり忘れてくれ。一切他言無用じゃ」

ときつく釘をさし、おつれあいにもなにか申されました。なんと申されたか、その場では聞きとれずにいましたが、いくほどもなくわかりました。うなずいて奥へ去られたおつれあいは、間もなく、火をともしたろうそくを運んでこられたのでございます。

掃部さまは、黙って受けとると、綾部主税さまのしたためなされた、小八郎さまの身のあかしとなるべき書きつけを、火にかざされました。あかしは、わたくしの目の前で、たちまち青いほのおとなり、灰になってしまいました。

後日のうわさによりますと、掃部さまは、わたくしが立ち去ったのを見届けてのち、おつれあ

いを刺し殺し、かえす刃で、みずからも腹かっさばいてお果てになった由でございます。かたわらには、御親類あてに一通の書置があり、文句はもはやうろ覚えにしか覚えておりませんが、

卑怯みれんの子を持ち候こと、不運のきわみにござ候。さはあれ、子の不覚は父の不覚にござ候。われら父子の墓を立つること一切無用、また後日家名の再興をはかり候儀、ゆめゆめあるまじく候。

とあったとか聞いております。一切他言無用という掃部さまのお言葉を、わたくしは、おいいつけ通りに守りました。女房にさえも、ついに語り聞かせたことはなかったのでございます。長い間、自分一人の胸にたたんできたことを、与茂作はいま残らず語ったが、心のどこかに、悔いに似た痛みを覚えた。いまさら語ってみたところで、いったい、なにになるというのだ。しかし、重荷をおろしたような安らぎを覚えたのもまた事実だった。

「その方たち、わかるか、小八郎の心が」

しばらく閉じていた目をあけて、島津家久は左右の者にたずねた。だれも答えなかった。家久は伊勢兵部をかえりみた。兵部は黙ってうなずいただけだった。家久はいった。

「さよう。小八郎ははじめから生きるつもりはなかったのじゃ。綾部主税がいうまま、古垣右馬助の首を、水俣城から奪い返したと必死の嘘をついたのは、生きるがためではなかった。ましてや、島津の家のためなどではなかったろう。小八郎はただ、綾部主税の情誼に酬いたのみ……」

そうかもしれぬ、いや、たしかにその通りだと、与茂作も思った。だからこそ掃部さまは、あのとき、小八郎さまの身のあかしとなるべきものさえ、灰になってしまわれたのではなかろう

か。

頭上に、家久の声がした。

「与茂作、よくぞ語ってくれた。これで、小八郎も、掃部も、多少なりとも浮かばれるであろう」

与茂作は、顔をあげて家久を見た。ひたと見た。

「いいえ、多少なりとも浮かばれるのは、小八郎さまや掃部さまもさることながら、まず第一には、綾部主税さまの筈でございます」

家久は黙っていた。黙っていたことが、答えだったかもしれない。見るかげもない百姓の一老爺与茂作の、赤くしょぼしょぼした目が、なにか言葉にあらわしにくい、強烈な光をたたえているのを、島津家久は目にとめた。いつの間にか陽が傾いて、鶴丸城本丸の庭に、影がひろがっていた。

秋雨の首

一

島津家の陣屋は、小高い丘の上にあった。地形全体が高いので、正面から見れば、丘というほどの感じはないが、裏手はかなりな勾配で海に落ちこんでおり、崖のすそは、岩のごろごろした磯になっていて、終日、白い波が岩をかんだ。昼間でさえ、ほかの物音にまぎれることもなく、夜ともなれば、陣屋がゆらぐばかりの波の音だった。

このあたりは井樋田という。後に、島津家にちなんで、薩摩陣と呼ばれた。現在も、字名として残っている。波戸岬の近くである。陣屋の裏手から、岬のとっぱなが見えた。さらに、加唐島、松島、馬渡島なども望まれる。よほどの曇り空でなければ、はるか彼方に、壱岐の姿をとらえることも、さしてむずかしくはない。

太閤秀吉のいる名護屋城の本丸からは、半里あるなしであろうか。道のりからいえばたいしたことはないが、他の諸侯の陣屋とくらべると、もっとも遠い位置にあり、そのことが、いささかならず島津義久の気分を重くさせた。

文禄元年、いや、文禄と改元されたのは十二月になってからだから、正確には天正二十年六月

五日、いまは竜伯と号している島津修理大夫義久は、この肥前名護屋に着陣した。

ことし早々、他の諸大名同様、義久も秀吉に朝鮮出兵を命ぜられたが、年も六十になり、加えて近ごろ病気がちだった義久は、その任に耐えずとして、二つ違いの弟で、現在は島津家の当主でもある兵庫頭義弘を、みずからに代えて朝鮮におもむかせたい旨、秀吉に願い出て許された。こんどは、そのお礼言上のための名護屋伺候であった。

「遠路のところ大儀」

秀吉は、にこやかに迎えてはくれた。が、島津陣屋の位置の微妙さに、義久はすぐ気がついた。

天下周知のとおり、五年前の去る天正十五年、義久ははげしい抵抗の末、秀吉の軍門に降っている。頭をまるめて、竜伯と号したのもそのときである。

降伏した義久に、秀吉は意外に寛大であった。薩摩、大隅の二ヵ国と日向の一部を安堵しばかりか、京都の周辺に、新しく一万石の地を与えてくれた。それに、人質として差し出した、愛娘亀寿に寄せる義久の愛憐の思いを知ると、いくほどもなく亀寿を返してもくれた。そうしたことが、秀吉に対する義久の心服をいっそう深めたといえる。弟義弘も同様であった。それだけに、名護屋へやってきて、初めて知った島津陣屋の位置に、義久は動揺させられたのだ。

「あのときのわだかまり、やはりまだ捨てておいでではなかったのか」

あらためて胸にこたえた。

お礼言上がすむと、秀吉は無造作に先に立って、義久を天守に案内し、天守の最上層から、諸

大名の陣屋の配置を見せた。

さすがに、秀吉らしい、周到な心くばりがなされていた。鉢畑に、甥の大和中納言秀保をすえたのをはじめ、西大ひらに加藤主計頭清正、小松に福島左衛門大夫正則、善友山に堀久太郎秀治、筑前町に加賀宰相前田利家など、城のまわりの要所要所には、縁戚や子飼いの大名、あるいはもっとも信頼できる大名の陣屋を置き、表面上の親近ぶりとは別に、徳川家康、伊達政宗らの陣屋は、城から遠ざけてあった。ことに家康の陣屋などは、一ヵ所は竹の丸、一ヵ所は地獄浜の近くと、二つに分断してある。竹の丸は、秀吉の居所からそう遠くはないが、そのかわり本丸から眼下に見おろせる位置である。諸代と外様の陣屋を、たくみに交錯させてもある。島津陣屋の遠さも、おそらく配慮の上でのことに違いない。

しかし、天守での秀吉は、始終上きげんだった。もしかすれば、島津陣屋の位置は、単なる偶然ではなかろうか。そんな気がしないでもなかった。

陣屋の位置よりも、もっと気になることが義久にはあった。いまは朝鮮にある、弟兵庫頭義弘のことだった。

義久は、名護屋へ出てくる際、老臣新納忠元の居城大口城に立ち寄って、そのとき忠元から、

「武庫さまよりのご書状でございもす」

と一通の手紙を見せられた。武庫さまとは義弘のことである。義弘の手紙の日付けは、四月六日になっていた。乗船まぎわに、名護屋でしたためたものであった。

兵庫頭義弘は、二月二十七日、嫡男久保とともに、居城の栗野城を出た。このときの供は、二

十三騎である。三月三日、大口城に立ち寄り、後続の兵を待って、大口を出たのが三月五日。肥前名護屋には三月二十日に到着した。義弘は第四陣を命ぜられていた。

義弘父子は、名護屋でむなしく半月余を過ごした。乗るべき船がなかったのである。船の手配は、国もとですませてあった。老臣たちが、とっくに名護屋回航の手はずをとっているはずなのに、その船が、いつまで待っても着かない。兵数もそろわなかった。島津勢は一万の付け出しだったが、半数にも足りないありさまだった。義弘の手紙には、

一、渡唐船一艘も不レ廻候て、外聞実儀迷惑申候。

とあった。

やむを得ず義弘は、借り船を使うことにした。といっても、金子の用意も十分ではないところから、部下の多くは名護屋へとどめ、まず義弘父子と、ごく少数の近臣のみが、四月七日名護屋を発して壱岐に向かったというのである。

一、やうやく五六端帆之小船、十艘にて渡海候。あはれをとどめたる事にこそ候へ。中々申もいかがに候。

これも義弘の書状の一節である。

四月六日になっても、国もとからの船が一艘もまわってこないなど、とうてい考えられない。きっと何事か起こったに違いないが、なにがあったのか、まったく見当もつかなかった。不審の念を抱いたまま義久は、忠元に後事を托して名護屋におもむいた。大口を出たのが、五月なかばであった。

六月五日、名護屋に着き、秀吉にお礼言上も終わって数日後の夜、新納忠元から書状が届いた。それには、五月五日付けで、義弘からその留守家老川上忠智へあてた手紙の写しも添えてあった。それによって、義弘たちのその後の様子があらまし知れた。

四月七日、借り船で名護屋を発った義弘父子は、しばらく壱岐にとどまってから対馬に渡った。対馬には、四月二十六日まで逗留した。この間、国もとからの船はついに来なかった。義弘父子は、またも賃船を借りて、四月二十七日、対馬の名室港を出、五月三日、ようやく釜山に着いたのだという。義弘はつぎのように訴えている。

一、任二風便一企二一書一候。仍其地之船一円不レ参候而、拙者一人遅陣に罷成、迷惑之至候間、賃船を以卯月（四月）二十七日、対馬名室の港より、任二順風一漸今月（五月）三日に、高麗釜山かいに罷渡候。

このころ、第一陣の小西行長、宗義智ら、第二陣の加藤清正、鍋島直茂らは、すでに京城に達していた。義弘が遅陣をなげいたのも無理はない。名護屋に参着したのは、かなり早い時期だった。おくれはそれ以後のことである。国もとの船さえ間に合っていれば、こんなみじめな思いはせずにすんでいた。義弘はいう。

一、竜伯（義久）様御為、御家の御為を存知、身命を捨、名護屋江も能時分に参候得共、船延引之故、日本一の遅陣に罷成、自他之失面目一、剰先之様仕合可レ悪事、覚悟の前に候得共、別条に可レ仕様無二之候間、公儀之御使を待、兎も角も可二罷成一意にて、無念千万候事。

一、あまり〳〵遅陣迷惑に而、五枚帆を壱艘借出候而令二乗船一、去月対島（対馬）わたりを

渡候。誠に小者壱人にて、槍を五本共不レ持、高麗迄渡候事、浅間敷為レ体、涙もとどまらん仕合に候。船著とまりにても、身を忍ぶ様に候事、呉々国元嘆を恨入候事（以下略）

薩摩、大隅の二ヵ国に、日向の一部を加え、合わせて六十二万石を領する大大名の渡海とは、とても思われぬ見すぼらしさに、義弘の一行は、人目を忍ぶようにして釜山へ渡ったのである。

義弘の訴えは、なおめんめんとつづく。

読み終わったのは、もう夜中であった。崖下の、岩をかむ波の音が、義久の居室まで迫ってくる。

こんどの朝鮮渡海は、かつて秀吉に手向かい、降伏した島津家にとっては、秀吉に忠節を示し、これまでの過失のつぐないをすべき絶好の機会だった。それ故にこそ義弘は、兄義久にかわり、勇躍して国もとを出立した。それが、かんじんの渡海の際に、かえって天下に面目を失うはめになったのである。

二

間断なく、すさまじい波の音がひびく。名にしおう玄界灘である。めりめりと、音を立てて、陣屋もゆらぐかのようであった。幸いにいまは夏なのでよいが、これが冬ならば、さぞ荒涼たる思いであろう。

にわかづくりの陣屋ながら、義久の居室はともかくも書院のていになっている。が、陣屋全体は粗末だった。すべて板屋根だし、部下たちが起居する部屋は、ほとんどが板敷か、土間に筵を

しいただけである。

島津陣屋のやや南には、上杉越後宰相景勝の陣屋があるが、そこは見るからに堂々たる居館であった。

島津家には、それだけのゆとりがない。長期にわたって秀吉と戦った五年前の痛手が、財政の上でも、暗い影を落としていた。船の手配がおくれたのも、一つにはそのせいとみてよかった。それにしても、一艘も間に合わぬとは異常である。

「さては……」

漠然としたものではあるが、義久には、心あたりがないでもない。島津家中には、義久や義弘の、秀吉に対する心服ぶりを、心よからず思っている者がいくらもいる。義久が降伏した際も、まだまだ戦えるとして、徹底抗戦を叫んだ者たちである。義弘のつぎの弟で、家中の者が、

「金吾さま」

と呼ぶ、島津左衛門督歳久も、その一人であった。義久より四つ若く、いまは入道して晴蓑と号している。島津家中では、義久や義弘以上に信望があった。しかし歳久は、島津一門の棟梁として、あえて秀吉に降らざるを得なかった、兄義久の苦衷を知っている。武将としての義久を、心から敬愛してもいる。内心に多少の不満は抱いていても、二人の兄、義久、義弘の立場を危くするようなまねをするとは、とうてい考えられなかった。

「とすれば……」

それらしい何人かの中から、一つの顔が浮かびあがった。

「これよ」

義久の声に応じて、家臣の一人が縁がわにひかえた。義久がつれてきたのではなく、早くから陣屋詰めだった男である。名を敷根源三郎といった。

「国兼は渡海したか」

湯の尾の地頭、梅北宮内左衛門のことである。国兼は、先発した義弘の供に加わるべく、一足おくれて出国したが、もう当然追いついてもよいはずだった。五月五日付けの義弘の書状には、国兼のことはなに一つふれてはない。しかし、それからさらに、一月以上たっている。

「まだなにも存じませぬ」

敷根源三郎はそう答えた。

朝鮮へ向かうにしても、一度は名護屋へ立ち寄るはずだった。まっすぐ朝鮮に渡ったにしても、なんらかの連絡はするであろう。それが、いまだになんの音沙汰もないとは、いったいどういうことか。

不安のうちに、義久は何日かを過ごした。その不安は、いくばくもせぬうちに現実となった。六月十六日の夜、ゆゆしい知らせが届いたのである。使者は肥後からだった。馬を乗り継ぎ乗り継ぎ、名護屋へ駆けつけたという。井樋田の島津陣屋に着いたときは、息も絶え絶えになっていた。手当てを加えてやると、ようやく人心地がついたようで、顔をこわばらせて、

「お人ばらいを」

といった。男は、国兼とともに、朝鮮に向かうべきはずの牟礼市之助であった。義久は、いわ

れるまま人を遠ざけた。市之助が、肥後からきたということで、一応の予測はついている。果たして市之助は、

「梅北宮内左衛門どの、去る十四日、肥後の左敷城を攻め取りました」

おどろくべきことを告げた。そのとき、義久の身内をゆすぶるように、ひときわはげしい波の音が聞こえた。今夜は、とりわけ海が荒れているらしい。

船で義弘のあとを追った梅北国兼は、名護屋へはいかず、平戸に船を寄せた。平戸は、かつて倭寇の頭目、明人王直の根拠地として知られた港である。

国兼には、初めから朝鮮に渡るつもりはなかった。それどころか、二十万の大軍が、朝鮮へ渡ったことを幸いに、手うすになった名護屋を衝き、秀吉を討って、昔の恨みを晴らすつもりだった。

「竜伯さまの仰せである」

と称して国兼は、海路をとった後続の兵を一兵も名護屋へ送らず、ことごとく平戸に待機させ、船も一艘残らず押さえた。

「それでか……」

竜伯はうめいた。

「ご決意願わしゅうございもす」

市之助はにじり寄った。

国兼の企てに、伊集院三河や田尻但馬も同意し、人数はすでに二千人を越えた。彼らは二手に

分かれて平戸から引き返し、国兼の隊は、一足早く佐敷に上陸、たちまち佐敷城を乗っ取った。一方、田尻但馬のほうは、ややおくれて松橋に上陸したあと、南下して八代城を襲う手はずだった。

「田尻但馬どの、いまごろは多分、八代城に乗りこんでおりもそ」

国兼らは、八代、佐敷両城を攻め落とすと同時に、留守の国元衆にも呼びかけて、名護屋へ押し寄せるつもりだと市之助はいった。

「伊集院三河はいかがした」

「兵を集めるため、自分の所領、姶良へもどりもした」

あまりの無謀さに、義久はいうべきことばもない。市之助は、

「梅北どのには、晴蓑入道（歳久）さまのご家来衆も加わっておりもす」

ともいう。歳久は、義久より四つ若く、ことし五十六だが、久しく中風をわずらって、手足が不自由だった。そのため、朝鮮へも渡海していない。したがって、歳久自身が、国兼の陰謀に加担しているとは、まず考えられなかった。おそらくは、家臣たちが、勝手に加わったものに違いない。

「どうすべきか」

義久は、さわぎ立つ胸を押さえて思案した。二十万の軍勢が渡海して、名護屋が手うすになったとはいえ、大和中納言秀保、徳川家康、前田利家、伊達政宗ら、有力大名が駐屯して、なお十万近い人数が残っている。

万一、国兼らの謀反が、秀吉の耳にでもはいれば、井樋田の島津陣屋は、時を移さず討手をさ

しむけられるであろう。その場合、わずかな人数では、いかに義久でも手のほどこしようはない。朝鮮在陣中の義弘、久保父子や家臣たちにも累が及ぶ。また京都には、義弘の妻や、こんどの朝鮮出兵に際して、あらためて人質に差し出した、愛娘の亀寿もいる。とすれば、一つしか道はない。

「いかがなされもす」

牟礼市之助は進み出た。

国兼は、時と場合によっては、義久や義弘、久保父子を見殺しにすることまで考えていよう。いよいよのときは、宮之城にいる歳久を立てればよい。市之助も、それを聞かされているはずだった。

「わしや義弘を、捨て殺しにする気か」

義久にもとっくに読めていた。もしこの企てが、歳久自身から出たものであれば、あるいは義久も、島津家の命運を賭けて、わが身を捨てる気になったかもしれない。国兼では役者が違った。国兼の剛勇は、義久としても、みとめるにやぶさかではない。が、惜しいことに、知略において欠けている。しょせん、大事を成しとげうる器ではなかった。まして、伊集院三河や、田尻但馬など、論外だった。

義久の腹はきまった。市之助の報告を聞き終わってから、長い刻がたったようだが、その実、いかほども過ぎてはいない。崖下からひびいてくる、岩をかむ波の音を、七、八度も聞いたであろうか。

「近う寄れ。申し聞かせることがある」

市之助は義久に命ぜられるまま、耳を寄せる形になった。その一瞬、義久は、いきなり脇差をぬいて市之助の胸を刺しつらぬいた。

「だれかある。謀反人を成敗した。死骸をとりかたづけよ」

それまで、じっと静止しているかのようだった燭台の灯りが、にわかに大きくゆらいだ。立ち上がった義久の足もとに、血がひろがっていった。

三

翌日、義久は、石田三成の兄で、大手門御番衆の一人、石田木工頭正澄のもとへおもむき、委細を告げた。正澄から、秀吉に報告された。

秀吉は激怒した。

義久のあずかり知らぬところとはいえ、国兼は、義久の命と称して兵を募った。当然、義久に責めがある。

「そうであろう」

折から登営してきた家康に、秀吉は同意を求めた。いますぐにも、島津陣屋へ兵をさしむけたい口ぶりであった。家康は、おだやかに反対した。

「義久をお責め遊ばすは、いささか筋違いかと存じます」

朝鮮には、義弘、久保父子がいる。京都には、義弘の妻や、義久の娘亀寿がいる。謀反などたくらめるわけがなかった。それを家康はいった。

「恩愛の情は、だれしも同じでございます。ましてや島津どのは、かねて殿下もご承知のとおり、情愛深いお人、わが弟や、娘や甥を捨て殺しにできるはずがございません」

その一言で、義久は救われた。義久への怒りをといた秀吉は、浅野長政、幸長父子、伊藤長門らを召し寄せて、

「梅北国兼を討て」

と命じた。長政らは、ただちに肥後に向かった。

肥後の佐敷城は、またの名を花岡城ともいう。熊本城主加藤清正の臣加藤重次の居城だが、重次はこの春、部下ともども、清正にしたがって朝鮮に渡り、あとには、境善左衛門、安田弥左衛門ら、わずかな人数しか残っていなかった。そこへ、六月十四日、国兼が千余の手勢を率いて押し寄せたのである。なすすべもなく、佐敷城はたちまち占拠された。

これにやおくれて、松橋に上陸した田尻但馬の隊は、国兼に呼応して八代城を乗っ取ろうと、各所に火を放ちつつ南下したが、それと見て、八代近辺に在住する松浦筑前という者が、近郷の者を狩り集めて不意打ちをかけ、田尻但馬や、その子荒次郎、荒五郎をはじめ、百余人を討ち取った。

指揮者を失った但馬の残党は、八代城を攻めるどころではない。国兼のいる佐敷城めざして逃げ出した。それをまた、松浦筑前の人数が追いかけ、赤松太郎峠でほとんど討ち果たした。それが六月十七日である。

国兼は、そんなこととは夢にも知らない。たやすく佐敷城を手に入れた成功に酔いしれて、但馬からの吉報を待っていた。

一方、境善左衛門の耳には、いち早く田尻但馬の死が伝わった。善左衛門は、安田弥左衛門としめし合わせて、周辺の村々から、屈強そうな郷士や農夫たちを集めると、

「お味方に加えていただきたい」

と国兼を油断させ、夜になって、国兼たちのために、城中で盛大な酒宴をひらいてもてなし、宴席には美女をはべらせた。

「お気に召されたらどれなりと」

部下のおもだった者にも、それぞれ女をあてがった。国兼は根が好色である。策略とも悟らず、

「おぬしら、よう気がきくのう」

と上きげんで、立てつづけに大杯を傾けた。したたかに酔ってから、女に抱きかかえられて寝所に消えた。部下たちも、思い思いに部屋に去る。

「うまくいった」

善左衛門と弥左衛門は、顔を見合わせてにんまりと笑った。

しばらくして、国兼の寝所にあてられた部屋から、嬌声がもれた。やがて、しんとなった。その夜半、国兼も部下たちも、ふみこんだ善左衛門らに、あっさり寝首をかかれた。あとの者は、ちりぢりになって逃走した。その始末は、数日後到着した浅野長政を通じて、名護屋の秀吉のもとへ、くわしく報ぜられた。それとほぼ前後して秀吉から、

「急ぎ国もとへ帰り、梅北の残党ことごとく成敗せよ」

と命ぜられた義久は、ただちに帰国の途についた。新納忠元の居城大口城に到着したとき、すべてはけりがついていた。佐敷城から逃げ帰った者や、国兼へ呼応の支度をととのえていた者は、新納忠元の手の者、大口衆によって討ち取られたのである。捕えられた者は、すべて首をはねられた。また、兵を集めに戻っていた伊集院三河は、その所領姶良で誅せられた。田尻但馬の叔父、荒尾嘉兵衛も、川辺市之瀬で斬られた。見事な忠元の処置ぶりであった。

義久は大口城を辞し、鹿児島へ帰った。居城は内城である。別名水上城。単にお内と呼ぶこともある。大竜寺城と称されたのは、さらに後日のことである。城は鶴丸の東北、清水の西南に位置していた。天文十九年義久の父で、島津家中興の祖というべき、島津貴久が築いた城であった。

義久は、七月五日付けの書状をもって、梅北の残党を成敗し終わった旨、名護屋の秀吉に報じた。しかし、まだ安心するわけにはいかない。義久には、なお気がかりなことが一つあった。いうまでもなく、弟歳久のことである。秀吉はかねてから、歳久にふくむところがあった。

義久の危惧は的中した。細川幽斎が、秀吉の厳命を帯びて、鹿児島に乗りこんできたのである。幽斎は、七月十日付けの秀吉の朱印状をたずさえていた。鹿児島に着いたのは、十六日午後である。身分軽い者ではない。幽斎は細川忠興の父である。それが、この早さはただごとではなかった。

応接には、比志島紀伊守国貞と、白浜次郎左衛門重治があたった。朱印状を見せられて、両名は血の色を失ってしまった。その朱印状には、

「歳久の首を差し出すべし」

といわんばかりのことが書かれていた。それとは別に、幽斎は口頭で、歳久の罪状五ヵ条をしめした。しかも、そのうちの二ヵ条までは、五年も前のことであった。

四

「五年も前のことをお責めあるか」

夕方ごろ、あわただしく伺候した、比志島紀伊、白浜次郎左衛門両名から委細を聞き、義久は胸をとざされた。両名のほかに、町田出羽守久倍も、やや後ろにひかえている。義久の手の中で、朱印状が小きざみにゆれた。三名は平伏して、おもてを上げようともしない。

――殿下西征の日、義久合族出て降る。歳久ひとり病と称して出ず。その罪一。

幽斎はそういったという。

――違う。

義久は叫びたかった。五年前のことが、なだれのように胸にせまってきた。

天正十五年春、関白秀吉は、みずから九州に乗りこんできた。その前年秀吉は、書をもって義久に、

「豊後の大友と和せよ」

と命じた。義久は拒絶した。

天正四、五年ごろ、九州では、薩摩の島津義久、豊後の大友宗麟、肥前の竜造寺隆信、この三

者が、三つどもえの形で争い、ほぼ均衡が保たれていた。天正六年になって、それがくずれた。宗麟と義久が、それぞれ大軍を率いて日向の耳川で激突し宗麟が大敗、その結果、大友の勢威はみる間に衰退した。あとは、竜造寺対島津の争いである。これも島津の勝利に帰した。

天正十二年三月、義久の末弟家久が、肥前島原において、有馬晴信を助けて竜造寺隆信と戦い、五倍近い竜造寺軍を破って、隆信の首を上げた。竜造寺方の名ある武将は、大半が討死した。隆信の子政家は、肥後の地を割譲して義久に降り忠誠を誓った。こうなれば、もはや九州に敵はない。

ところが、一度は力を失った大友が、竜造寺の敗北を好機として、筑前、筑後へ進出し、勢力挽回をねらった。全九州の制覇をめざす義久としては、無視できなかった。その矢先に、秀吉が調停を申し入れても、おいそれと聞くわけにはいかない。それに、秀吉の実力についての認識不足もあって、義久は、

「大友と和を結ぶ意志なし」

との返事を送ったのである。

秀吉は西征を決意した。それを知った義久は、機先を制して、筑前岩屋城、宝満城を攻め落としたあと、一転して、弟義弘、歳久、家久らを将とし、肥後口、日向口の両面から、豊後へ殺到した。これが天正十四年初冬のころである。

島津勢は連戦連勝であった。ことに戸次川の戦いでは、秀吉の命で大友の加勢に乗りこんできた、長宗我部元親、信親父子、十河存保、仙石秀久ら四国勢を大いに破った。四国勢は、信親、

存保を失い、総くずれになった。味方は勝利に酔いしれて、雑兵小者までがおごりたかぶり、

「猿に似た関白などおそるるに足らず」

と高言する始末だった。そんな中で、秀吉のおそるべきことを十分わきまえ、

「秀吉と戦うべからず」

と、兄義久をいさめたのが、左衛門督歳久である。

島津貴久を父とする、義久、義弘、歳久、家久、この四人の兄弟は、武将として優劣つけがたいほど傑出していた。貴久を助けて、薩摩、大隅、日向——いわゆる三州の統一に力をつくした祖父島津忠良は、四人の孫のうち、義久については、三州の総大将たる材徳おのずから備わるといい、義弘については、その勇武をたたえている。また家久のことは、

「兵法戦術にすぐれている」

とした。家久が、竜造寺隆信を討ったことは、忠良のことばを証拠だてるものである。歳久については、

「始終の利害を察するの知に富む」

と評した。しかも知のみではなく、剛勇の面でも、決して他の兄弟に劣るものではなかった。その歳久が、秀吉と戦ってはならぬと主張したのである。だが、それほどの歳久の意見さえも、周囲から無視されてしまった。歳久は悪びれぬ。決戦ときまると、まっ先に戦った。

明けて天正十五年春、秀吉は九州に親征した。秀吉自身は、肥後路から薩摩をめざし、秀吉の異父弟大和中納言秀長は、別軍を率いて豊後から日向へ攻め入った。こうなれば、だれにしても

自分の身がかわいい。昨日までの味方は、つぎつぎに秀吉に降った。島津勢は、豊後からも肥後からもしりぞいた。なにしろ相手は、すさまじい大軍である。

この戦いのさなか、歳久は、居城の宮之城へ引き上げた。にわかに中風にかかって、手足がなえしびれてしまったのである。

島津勢は、局地的には善戦した。しかし、大局的にはじりじり追いつめられた。もっとも勇戦したのは、高城の守将山田有信、平佐城の桂神祇坊忠昉である。

やがて、島津の運命のきわまる日がきた。四月十七日の夜、義久は、敵の大軍にかこまれて孤立した、山田有信の高城を救うため、義弘、家久とともに、二万余の兵をもって、宮部善祥坊の守る根白坂を夜襲した。根白坂を突破しなければ、高城へいけないのだ。味方の先鋒は、左翼が北郷一雲、右翼が伊集院忠棟であった。

敵は前面に深さ二間、幅三間の空濠を掘り、濠ぎわには、土居を築き、塀や柵をめぐらせていた。島津軍は、真夜中から朝にかけて、くり返しくり返し攻撃をかけた。倒されても倒されても、なお塀にとりつき柵にいどんだ。おびただしい犠牲が出た。空濠は味方の死骸で埋まった。この戦いは、後日になって、長篠における武田勝頼軍の戦いぶりそのままと評された。島津軍の死者は、数千を数えた。

歳久の養子で、武勇を知られた十九歳の島津三郎二郎忠憐も、この根白坂で討死した。先鋒北郷一雲の手の者三百余名が、濠を乗り越えて敵営に突入したが、後続を断たれて残らず全滅した。夜が明けたとき、空濠の周辺は、見渡すかぎり味方の死骸ばかりだった。義久はついに、根

白坂の突破を断念した。このときの敗戦が、島津方にとって決定的打撃となった。四日後、義久は、大和中納言秀長に、老臣伊集院忠棟を質として、降伏を申し入れた。天正十五年四月二十一日である。

が、これをいさぎよしとせぬ者も多く、高城の山田有信、平佐城の桂神祇坊忠昉らは、なお抗戦のかまえを見せたが、義久の説得によって、やむなく城を開け渡した。

兵庫頭義弘は、五月にはいっても、あくまで戦う姿勢を見せ、宮之城の歳久や、肥後路での戦いに敗れて、人吉から大口へ引き上げていた島津征久、新納忠元らとはかって、飯野城にこもろうとし、使者をやって、義久の降伏をやめさせようとした。

義久の決意は、すでにゆるがない。責任の重い、島津一族の棟梁として、これ以上の抵抗は無理と見ていた。へたにあがけば、鎌倉以来の名家はつぶれることになる。義久はそれをおそれた。

五月七日、伊集院の雪窓院において、髪をおろし、名も竜伯とあらためた義久は、あくる五月八日、川内の太平寺におもむき秀吉に謁した。

義久は無腰で白洲に平伏した。

「近う」

と秀吉が縁から声をかける。おそるおそる近づく義久に、秀吉は、

「それでは腰がさびしかろう」

といい、自分の腰から、備前包平、三条宗近の二刀をはずし、無造作に投げ与えた。義久が手

向かいを詫びたあと、杯ごとになる。秀吉は、

「杯をこれへ」

と左右にいいつけたあと、

「酒は盛るに及ばず」

と命じた。義久の面上にちらっと、もしや毒酒ではとの不安がかすめたのを、いち早く見ぬいたからである。義久は、からの杯を受け、またからのまま返杯した。このときの、秀吉の心づかいが、以後義久を心服させる結果となった。

五

それから半月ばかり後、義弘も、祁答院の鶴田で秀吉にまみえた。最強硬派の一人、大口城主新納忠元も、曽木で秀吉に拝謁した。義久の末弟家久は、秀長に目通りした。その間、左衛門督歳久のみが、病を理由に、ついに秀吉のもとへ顔を出さなかった。

秀吉の旨をふくんで鹿児島入りした細川幽斎が、罪の第一に数えたのはそのことであった。が、歳久は事実病んでいた。それも中風であった。半身がしびれて手足の自由もきかぬ。ことばももつれた。歳久にすれば、秀吉の前に、見苦しい姿をさらしたくなかったに違いない。そのかわり、家臣本田掃部助を、秀吉のもとへおもむかせている。

幽斎はいう。

――祁答院を経過するとき、嚮導をして嶮難の経路を導き、山賊を馳せて軍を悩ませ卒を殺

す、その罪二。

和平成って帰途につく際、秀吉は平佐から祁答院を通ろうとした。祁答院というのは、歳久の所領で、宮之城、鶴田、大村、佐志、藺牟田、山崎、黒木、以上七郷のことである。そのことから、島津家中の士は、歳久のことを、

「祁答院さま」

とも呼んだ。

歳久は、秀吉の領内通行を謝絶したが、義久になだめられてしぶしぶみとめた。秀吉の一行が山崎に着いたとき、歳久が兵を伏せて秀吉を襲うかもしれぬというわさがあり、五十余名が、備えがあるかどうかをさぐるため、諏訪原あたりまでいったところ、歳久の兵に襲撃をかけられて、軽卒二名が死んだ。それだけではない。

山崎から鶴田へ出る際には、歳久は、道案内役にいいふくめて、わざとけわしい山路をえらばせたのだ。陰暦五月の末といえば、すでに盛夏である。秀吉の一行は、暑熱と険路に苦しんだ。途中、山賊に襲われた。

その実は、歳久の臣、本田五郎左衛門の手の者であった。秀吉の駕に、六本まで矢が立った。警護の者が追いかけたが、土地不案内の山中のこと、たちまち見失ってしまった。そのときの、一連の歳久の行動を、秀吉はいまなお忘れてはいなかったのだ。

そうした、反抗的な行動のうらに秘められた、歳久の思いが義久にはわかる。一つは意地であった。歳久は初め、

「秀吉と戦うべからず」

と、恭順を主張した。それを周囲は無視した。

「祁答院さま、臆されたか」

と、かげぐちきいた者さえあったと聞く。そのくせ戦いが不利に傾くと、たちまち腰がくだけて秀吉に降伏した。歳久にすれば、それがいいようもなく腹だたしい。

「いまさら降伏するくらいなら、初めからなぜ戦ったのだ」

といいたかった。その歳久の叫びが、義久の胸に鋭く突きささる。とはいっても、歳久はかならずしも、義久を責めてのみいるわけではない。その半面には、兄義久への愛情があった。義久を守り、島津の家を守るための、秀吉に対するいやがらせであった。

和議成ったあと、最初の約を破り、降将に腹を切らせ、あるいはいったん安堵をみとめた領国を没収するといった例は、古今東西を通じて多い。

「そうはさせぬぞ」

それが、歳久の真意だったに違いない。当の秀吉も、十分知っているはずだった。内心では腹を立てつつも、

「さすがは歳久よ」

と、秀吉が賞めたとも聞いている。秀吉のご前に出なかった理由の一つも、島津の家を守るためといえなくはない。

秀吉がもっともおそれていたのは、歳久の知略であり思慮であった。その歳久が、手足もかな

わず、ことばももつれる状態で秀吉に会えば、秀吉の歳久に対する畏怖は、たちまちうすれてしまうであろう。そこを見こしての、ことさらな歳久の無礼であった。

幽斎はさらに、歳久の罪を数える。

——今に至って朝覲の礼を失す、その罪三。

秀吉の帰洛後、義久、義弘をはじめ、島津一門のおもだった者は、あらためて上洛し、秀吉に以後の忠誠を誓った。歳久のみがそれをしていない。上洛できるからだではなかった。

——命に背き朝鮮に至らず、その罪四。

これは、無体としかいいようがない。戦いに加わるなど、思いも寄らなかった。いいがかりとしかいえない難題である。しいて罪らしきものといえば、

——梅北の叛、歳久の臣多し、その罪五。

この最後の条のみである。それさえも、歳久のあずかり知らぬところで、死に価するものではなかった。それを秀吉は、

「歳久の首を」

と要求してきた。

義久は、秀吉に心服していた。太平寺における謁見の際の、秀吉のこまかな心づかいに感じたこともちろんながら、ほかにも秀吉の情けを受けたことがある。

義久は、降伏の条件として、まだ十五の愛娘亀寿を人質として差し出した。後日、お礼言上に上洛した義久は、一日、久々に亀寿と会い、その折、

二世とは契らぬものを親と子の
　別れむ袖の哀れをも知れ

右のような一首を詠じ、幽斎——細川藤孝に贈った。幽斎からそれを聞いた秀吉は、

「帰国の際、つれてもどるがよい」

と、こころよく亀寿を返してくれた。それほどの秀吉が、こんどはうってかわって、まっ向から、歳久の首を差し出せとせまったのである。

「金吾さま（歳久）の罪ではないこと、太閤さまは、ご承知の上でござわしょうな」

比志島紀伊がいった。白浜次郎左衛門もうなずいた。

「そちたちもそう思うか」

「御意」

沈痛な声で両名は答えた。

義久はふたたび朱印状に目を落とした。初めにこうある。

去五日之書状披見候。梅北一類、其方下向無き以前に生捕、首を刎ね差上候由、尤思召候。猶以入念堅申付らるべく候。

以上は、国兼一党の成敗を終わったことについての返事である。そのあと、

随而先年其国へ御動座之刻、其方（義久）兵庫頭（義弘）御赦免成さる之処、祁答院（歳久）事、上意に対し慮外之働、曲事に思召され候。其刻御誅伐を加へらる可く候と雖も、其方兵庫頭御赦免之上者、是非に及ばず候つる。然りと雖も、最前重畳相届かざる儀候条、京都よ

りも御出さる可く候処、御次これ無く候付而、御延引成され候。

とつづく。

これは御用繁多で、歳久の処置が延び延びになったことを告げているのだが、その実は中止されていたものとみていいであろう。処罰する気であれば、五年の間も放置するはずがない。義久自身も、国兼一件を聞くまでは、歳久の罪は、とっくに免ぜられたものと思っていた。その歳久の罪を秀吉はむし返した。中止していたはずのものを、延引とすりかえたのである。朱印状はさらにつづく。

然者、今度祁答院、兵庫頭与高麗へ罷渡候はば、其身之儀は御助成さる可く候間、彼家中之者悪逆之棟梁これ有る可く候条、十人も廿人も首を刎ね進上致す可く候。若又、高麗へ相渡らず、此方にこれ有るに於ては、祁答院より首刎ね出す可く候。自然何角滞に付而は、御人数を差遣され、祁答院事は申すに及ばず、在所より隣郷共に悉撫切ニ仰付らるべく候。

（天正二十年）
七月十日　御朱印

島津修理大夫入道とのへ

義久の目は、血がしたたりそうになっていた。秀吉は、歳久が朝鮮へ出陣すれば、助命するといっている。が、できぬ相談である。手足もかなわぬ歳久が、朝鮮へ渡海できるわけがない。しょせんは歳久を殺せという以外のなにものでもなかった。

秀吉の底意は知れている。理由は一つしかない。梅北国兼の乱は、謀反の名にも価しない、と

るにも足らぬ小事件だが、朝鮮との戦いのさなかに、秀吉の足もと近くで起こったことを考えれば、見過ごしにはできない。捨ておいては、太閤の威信にかかわり、今後の戦局にも重大な影響を与える。へたをすれば、第二第三の内乱を呼ぶおそれがあった。ここはどうでも、断固たる手段に訴えるほかなかった。

その点、理不尽であればあるほどよい。無理無体ないいがかりと見られれば、見られるほどよい。その理不尽な命に、六十二万石の太守、竜伯、島津修理大夫義久でさえ、唯々として服したということになれば、なによりも効果的なのだ。

「いかがなされもす」

比志島紀伊が進み出た。

「歳久は、朝鮮へはいくまいな」

ひとり言のように義久はもらした。わかりきったことなのに、なおみれんがあった。

「そのことでございもす」

紀伊は、白浜次郎左衛門と顔を見合わせた。歳久が、朝鮮へいってくれれば、命を助けることができる。

「いやといえば、討たざるを得ぬ」

ひざの上で、義久の手がこぶしに変わっている。できれば、秀吉の命を突っぱねたかった。が、かなわぬことである。かつては、大友宗麟を破り、竜造寺隆信を討ち、全九州の制覇を目前にしたほどの義久だが、いまは昔の力はない。

年もすでに六十であった。

「歳久を呼び寄せよ」

苦しげに、義久はいった。

「かしこまりました」

比志島紀伊が立ち、ついで、白浜次郎左衛門が立った。最後に町田出羽守久倍が残った。久倍のおもてに、なにかものいいたげな表情がたたえられた。

「久倍……」

義久はなにかいおうとしたが、すぐまた、自分自身にいい聞かせるように、首を横にふり、久倍に、

「そちもさがってよい」

とだけいった。

六

「急ぎ鹿児島にまかり越すべし」

義久からの火急の使者が、宮之城に着いたのは、七月十六日の真夜中であった。なにごとかは、使者も知らなかった。歳久は、ただちに支度にかかり、あくる十七日、まだ暗いうちに宮之城を出立した。供は、本田四郎左衛門、木脇民部、成合城之介、そのほか合わせて百余名である。みな平服であった。ただし、いずれも、具足櫃、弓、鉄砲をたずさえた。万一、朝鮮渡海と

申し渡された場合、そのまま出発できるようにとの心がまえからであった。

歳久は、馬に乗ることができない。やむを得ず、駕を用いた。歳久もお供の者も、まだ秀吉の命を知らなかった。

「もしかすれば、多少のおしかりを受けるかもしれぬ」

考えたとしても、その程度のことだったに違いない。ただ、真夜中の使者というのが、なんとなく気にはなった。宮之城から鹿児島までは、およそ十二里である。ふつうなら、一日ではつらい行程だが、急ぎに急いで、一行が鹿児島の城下に到着したのは、日暮れにはいくらか間のあるころだった。まっすぐ城には向かわず、ひとまず、とある寺に立ち寄って休息した。

駕から出た歳久は、家臣たちに助けられて、本堂の縁に腰をおろした。茶菓の接待を受けているところへ、人目を忍ぶようにして、一人の男がやってくると、

「祁答院さまに、お目通りつかまつりとうございもす」

と供の者にいった。年は五十をすぎているらしい。

「何者じゃ」

「その儀はお許しを」

見たところ、あやしいふしはない。至って実直そうな男であった。ひどく思いつめたものが見られる。よほど急いできたものか、汗まみれであった。本田四郎左衛門が、歳久に告げた。

「会おう」

やや不自由なことばで、歳久は答えた。男は、歳久の前に出ると、額を地にすりつけんばかり

にして、

「ご登城の儀は、なにとぞお見合わせのほどを……」

ただそれだけいった。

「どうしてじゃ。わけを申せ」

歳久にかわって、四郎左衛門がきいたが、男は答えず、無言で顔を上げた。目に涙がたまっている。

四郎左衛門には、とっさにひらめくものがあった。

「あのことでございもすな」

国兼の件であろう。それも、予想外に重大ななりゆきになっているらしいことに、初めて思いあたった。顔色を変えた四郎左衛門を見返して、歳久はうなずいた。そういえば、城下にはいってからおかしかった。歳久の行列に出会った人々が、いたましそうに顔をそむけたのである。中には、つめたいまなざしを送る者もないではなかった。どちらの意味するものも、四郎左衛門には読めた。歳久も察したらしい。

「これか」

いくらか自由のきく右手で、歳久が腹を切るまねをした。男はなにもいえず、唇をふるわせただけだった。

逃げるように男が去ると、入れちがいにまた人がきた。老臣の一人、町田出羽守久倍であった。供もつれず、単身である。

「お人ばらいを……」

いわれるまま、本堂の周辺から一同を遠ざけて、

「てまえは動きませんぞ」

と四郎左衛門だけが残った。それにはかまわず、歳久を見上げて、

「おそれながら、朝鮮へお渡りを願えませぬか」

と久倍はいった。

「それよりほかに、あなたさまをお助け申す道はございませぬ」

その一言で、すべてが明らかになった。歳久は、久倍のことばの奥にある、もう一つの意味をすぐ悟ったようである。歳久が朝鮮へ渡れば、歳久自身は助かるであろう。が、そのためには、かわりの首がいる。家臣たちの首である。

国兼の謀反に与した者の中には、歳久の家臣が、たしかに何人もまじっていた。だがその者たちは、すでに佐敷城において、城兵の策略にかかり、国兼とともに討たれていた。また佐敷城から逃げ帰った者も、新納忠元の指揮する大口衆によって誅されている。差し出すべき首はもうなかった。たって差し出すとすれば、罪もない者に腹を切らせる以外にない。

「首はいくついる」

「まず二十でございもそ」

久倍は、秀吉の朱印状の内容を、手短かに告げた。

「竜伯さまは、お受けなされたのじゃな」

「……」

「朝鮮へいけとも、竜伯さま仰せか」

「いえ、久倍の一存にございもす」

とっさの嘘であった。義久自身に命ぜられたわけではないが、義久は、歳久を助けたがっている。ありのままにそれをいえば、かえって歳久が苦しむ。歳久の心の中にある義久は、弟を助けるために、家臣を死なせるような人物であってはならないのだ。

「まことにそちの一存じゃな」

「さようでございもす」

歳久の顔が明るくなった。

「竜伯さまにお伝えせよ。わしは、朝鮮へはいかぬ。いまさらそれができるからだなら、とっくに渡海しているわ」

「しかし……」

「もうよい」

有無いわさぬ鋭い語気に、久倍はひれ伏した。歳久の心が、久倍にはよくわかる。半身不随のからだとはいっても、無理に渡海しようとすれば、かならずしも不可能ではない。それをしないのは、渡海すれば、結果において、家臣たちを殺すはめになるからである。単なる意地ではなかった。歳久自身の首なら一つですむのだ。それでいて、歳久は意地立てと見せようとしている。

「朝鮮へは、死んでもいかぬぞ」

かさねて歳久がいった。

「命惜しさに、おめおめ朝鮮へなどいけるものか。はっきり、竜伯さまにそう申せ」

「かしこまりました。その旨、しかと申し伝えもす」

承知するほかはなかった。

「四郎左」

さがりしなに久倍はめくばせした。四郎左衛門は、山門のところまでついていった。あたりは暗くなりかけていた。

「首が二十いる」

久倍はずばっといった。それ以上、いい足すまでもなく、四郎左衛門は、久倍のことばの重さを、即座にわかってくれたようである。

ほんのわずか思案しただけで、

「そろえもそ」

こともなげに、四郎左衛門は答えた。むろん、その中に、四郎左衛門自身もふくめるつもりだった。二十人が死ねば、その死をむだにせぬために、歳久は不本意ながらも、朝鮮へ渡ってくれるであろう。

「頼んだぞ」

久倍は去った。

四郎左衛門が引き返すと、歳久はもう悟っていた。待ちかまえていたように、

「ならぬぞ。わしの意にそむけば、主従の縁も今日かぎりじゃ」
「殿……」
「帰りは道を変える。船を用意せよ。船で帖佐(ちょうさ)までいき、帖佐から、吉田、蒲生と通って宮之城へもどる」
「では、殿には……」
「うん」
とだけ歳久はいった。どうせ死ぬなら、宮之城で腹を切ろう。歳久は、そう考えたのである。宮之城にたてこもって、一戦をまじえるつもりはさらさらなかった。

七

「朝鮮渡海の儀、お聞き届けくださるはずにございます」
町田久倍は、城にもどって、義久にそう報告した。四郎左衛門が、かならず歳久を説得してくれる。久倍はそれを信じた。
ところが、一刻ほどして、思いもよらぬ知らせがあった。
「祁答院さまご一行、船にて帖佐に向かわれました」
久倍は蒼白になった。義久は、すぐにおもだった老臣を集めた。久倍、比志島紀伊、白浜次郎左衛門、本田右衛門佐、鎌田出雲、川上三河などである。それに、義久の帰国以来、鹿児島にきている新納忠元も加わった。

「祁答院さまを、宮之城へやってはなりますまい」
老臣たちの意見は一致した。歳久が、討手を迎えて一戦するために、宮之城へ引き返したものと、みな思いこんだのである。さすがの義久も例外ではなかった。
「依怙地(いこじ)なやつが……」
嘆息して、
「やむを得ぬ。ただちに兵を配して帰途をはばめ」
義久は下知した。
「久倍、その方、歳久を討て」
「心得ました」
久倍は承知した。こうなっては、討つ以外にない。万一、歳久が宮之城に立てこもってしまえば、一大事である。島津家の存亡にかかわる。
秀吉の激怒が目に見えた。
「ぬかるな」
一言残して、義久は奥へ去った。その後姿が、ひどくさびしかった。
そのころ、歳久の一行百余名は、数艘の船に分乗して、鹿児島湾を帖佐に向かっていた。七月十六日の月はすでに高い。波間に月光が砕けた。
帖佐は、源を蒲生の西に発する、別府川の下流にある。別府川をさかのぼって、帖佐で船を捨て、そこから、陸路宮之城へ帰るつもりなのだ。初めは、帖佐に泊るはずだったが、船の用意に

てまどったため、竜ケ水を過ぎ、鹿児島の北四里の脇本にさしかかったとき、夜半になってしまった。

月が明るいので、帖佐までいけないこともないが、本田四郎左衛門の意見で、脇本泊りに変更された。寺の本堂を宿舎に借りた。寺の扱いは鄭重であった。太守の弟、祁答院さまの泊りなのである。秀吉の勘気にふれた身であることなど、寺ではまだ知ってはいなかった。

物見をかねて、先発した数名が、血相を変えてもどってきたのは、翌十八日の夜明け前であった。

「退路はすべて断たれております」

という。

吉田、蒲生、西蒲、漆村、清敷、新留、三重山の土瀬戸峠、みな武装した兵が、ものものしく固めていた。

歳久は、その報告を聞いても、きわめて平静であった。

「竜ケ水へ船をもどせ」

その意味が、本田四郎左衛門にはすぐわかった。宮之城への退路を断たれた以上、死ぬほかはない。死場所としては、帖佐よりも竜ケ水をと考えたに違いなかった。

礼をのべて寺を辞し、粛然として船を返した。口をきく者はほとんどいない。歳久の心を思ってか、みな黙々としていた。

刻々と、海の色が変わった。暗い波が、あかね色に染まり、そのあかね色がうすれて、きらきらしはじめたころ、船は竜ケ水に着いた。

岩をかむ白波に、足もとをぬらしながら、一同上陸した。竜ケ水は、古くから絶勝の地として知られている。背後は、吉野台地の切り立った断崖がせまり、前面には、海をへだてて桜島が望まれる。このあたり、道らしい道はなかった。ただ一筋、北から南へ、木こりの通るせまい山路があるだけである。近くに、清らかな湧き水が出るところから、竜ケ水の名が生じたという。

歳久はここで、心静かに、首をはねさせるつもりだった。一人死ねばよかった。

「家臣の中から、国兼に与した者がありはした。だがこの歳久に、謀反の心はつゆいささかもない。太閤さまを恨もうとも、竜伯さまを恨もうとも思わぬ。こうなったのは天命じゃ。不肖の主に、今日まで仕えてくれたその方たちの志、泉下にあって忘れることではない。一同、このところを去り、歳久のために、生を全うしてくれよ」

歳久はしみじみと説いた。一つには、町田久倍にすすめられた朝鮮渡海を、きっぱり断わった歳久の心情を、本田四郎左衛門に聞かされたからである。

「ここを去っては人ではない」

みな、いちずに思いつめて、口々に死戦を主張した。一人も去る者はなかった。一同、甲冑に身を固め、水ぎわには、石や立木の枝を積み重ねて討手を待った。

もとより、義久に恨みはない。義久の命を受けた、討手の人々にも恨みはない。歳久に殉ずるために戦うだけであった。

「相手を斬るな。ただ討たれよ」

本田四郎左衛門が一同にいい渡した。

歳久は、木脇民部、成合城之介らに手伝わせて、鎧直垂に着替えた。鎧は、わざと着けず、かたわらにすえさせた。着背長である。

前面の海に、軍船をつらねて、町田出羽守久倍の率いる討手が姿を見せたのは、十時ごろであった。人数はおよそ三、四百と思われた。

指揮船の矢倉に立って、町田久倍は息をのんだ。歳久の兵百余名は、鉄砲の筒口と、矢先をそろえて、波うちぎわ近くに、ずらりと居ならんでいる。

これでは、いかに数倍の人数とはいえ、一気に上陸はむずかしい。

「撃て」

鉄砲組、弓組に合図した。いっせいに放った。歳久がわも応戦する。しばらくして久倍は、奇妙なことに気がついた。歳久がたは、わざとねらいをはずしていた。ほどなく、部下たちも気づいた。

たがいに親疎の違いはあれ、大半は顔見知りの仲である。同じ戦場で、助け合って戦ったことさえある。初めから、多少のためらいがあった。その上に、相手がわざとねらいをそらしているとわかったのだ。しかも、顔見知りというだけで、そうしているのではなかった。歳久の部下たちの思いは、さらに深いところにあった。

久倍にはそれが読めた。歳久の兵は、ただ主に殉ずることのみを願っている。手向かっているのではなかった。

船上に動揺がひろがった。久倍の船だけではない。どの船もそうであった。鉄砲組も弓組も、相手を見ず、顔をそむけて引金を引き、矢を放ちはじめた。鉄砲を撃つ間隔も、しだいに間遠になった。中には、泣いている者もあった。

「いやじゃ。おれには撃てん」

鉄砲をほうり出し、甲板にすわりこんでしまう者さえいた。

八

城の奥であった。もう夜になっていた。

目の前に首がある。入道首である。ひげやびん髪に、白いもののまじった歳久の首である。恨みの形相はどこにもない。さわやかなほどの死顔だった。それが、義久にはかえってつらかった。

町田久倍は、顔を上げようともしない。うつむいたままで、あらましを報告した。久倍のいうには、鉄砲の撃ち合いと、矢いくさだけで、二時ごろまでかかったという。歳久がたに、矢玉の用意が十分あったわけではない。討手がたにしても同様だった。上陸までに、それほどの時間を要したのは、いわば双方のなげきの深さと、ためらいの長さによるものだった。

たまも矢もつき、船をおりてからも、進み出る者はなかった。みな、ほかの者の様子をうかがい、波に足を洗わせながら、岩かげにひそんでいるばかりだった。実際に斬り結んだのは、おそらく半刻（一時間）もかかってはいまい。久倍たちの船が、竜ケ水に着いたのは、十時ごろだっ

た。戦いが終わったのは、夕方の五時近くである。それほどの時間を要しながら、最後の戦闘はつかの間だった。

歳久の臣は、一人も残らず死を期していた。それが死物狂いで戦ったとすれば、上陸後の戦いが、いかに討手の人数が優勢だったにもせよ、半刻足らずで終わるわけがない。

「そうでございもそ」

久倍は訴えるように顔を上げた。義久は、無言でうなずいた。義久のかたわらには、細川幽斎がひかえている。

歳久の臣は、ことごとく死んだ。本田四郎左衛門も、木脇民部も、伊東雅楽助も、成合城之介も。

「城之介もか……」

義久は首をたれた。城之介はまだ十五歳、薩摩随一であろうとうわさされた、歳久お気に入りの美少年である。

「余の首をうて」

味方が残りすくなに討たれたころ、歳久は討手に向かって叫んだ。進み出る者はなかった。なんといっても、太守義久の弟である。しかも、無実の罪によって、死に追いつめられたのである。

「腹を切ろうにも、みずから切ることかなわんのじゃ。この首うて……」

ややもつれる声でいい、歳久は二度三度、不自由な手でさし招いた。

「おそれながら……」

原田甚次という者が、討手の中から、意を決して進み出た。何遍か、打ち寄せる波の音がしたあと、いっせいに、男泣きの声が起こった。

「これは着背長の御鎧の引き合わせにございもした」

久倍は一通の書状を差し出した。義久にあてた歳久の遺書である。いくらか自由のきく右手に、矢立ての筆をとり、家臣のだれかに紙を持たせて、矢いくさの間にしたためたものであろう。五体健全だったころの筆跡とはやや違う、ところどころ、微妙なふるえのある筆のあとだが、歳久のものにまぎれもなかった。

抑も我れは当家の枝葉に生れ乍ら、病みて手足を悩まされ、身健なく、了簡の及ぶ所たらず、故に殿下（秀吉）に候する能はず。太守（義久）慈恩の扶けを得て安閑を楽しむ、何ぞ豈殿下に対し奉り讐を為すべけんや。然り而して浮世は不意の憤を為すに依り、御不審を蒙り、只今切腹す。願くは累代の御家の為に、我が一身は自害すべし。再び往きて臣より向って、伸避すと雖も、彼等聊か承諾する能はず、詮方無き次第なり。倩ら之を案ずるに、臣下の所存の為に黙止し難し。然らば則ち太守公に対して矢を放つに非ず、君臣武勇の本文（分）を以て、暫時の戦を励むものなり。

文面は以上であった。

「君臣武勇の本分をもって、暫時の戦いをはげむものなり……」

最後を義久は声に出した。そのとき、町田久倍がにじり出た。いまにも、涙のあふれそうな目

であった。

「討手のうち、死者何名とおぼされもす」

「何名じゃ」

義久は問い返した。町田久倍は、細川幽斎の方へ目を向けてから、また義久の方へもどすと、

「三名でございもす。あとはすべて、軽い手傷にとどまりもした」

幽斎に聞かせるために、はっきりといった。幽斎の眉がわずかに動いた。歳久の兵は、薩摩随一の精強を誇っていた。それが、百余名ことごとく死んだのだ。

「にもかかわらず、討手の死者は、ただの三名でございもす……」

久倍は、両手をついてむせび上げた。久倍のことばの意味、ことばの重さを、幽斎は悟ったのであろう。顔はまっ青であった。義久は、幽斎の方へ向き直った。

「歳久が首、ごろうぜられよ。いささかも、恨みを宿してはおりますまい」

悲痛な声であった。

歳久の死顔に、ほんのすこしでも恨みが影をさしてでもいれば、秀吉の心に、なにを与えるかわかったものではない。

「首になっても、この兄を守ってくれるのか……」

義久の目から、涙がほとばしった。だが、いまは夏である。たとえ塩漬けにしても、歳久の首が秀吉と対面するころは、このさわやかさもくずれてしまうに違いない。

「幽斎どの、この死顔、しかと見おぼえてお帰りいただきたい」

義久のことばの終わらぬうちに、久倍ののどから、けもののような声がもれた。

九

歳久の首は、肥前名護屋へ送られた。しかし、首が到着したのは、生母大政所危篤の知らせに接して、秀吉が京都に帰ったあとであった。首は、さらに京へ送られた。

祁答院一類、早々成敗を加へ、注文相添へ、首共到来、神妙之至に候。

という、八月十四日付け朱印の書が、義久のもとへ届いたのは、九月なかばである。それを追いかけるように、証人（人質）として京にいる娘の亀寿からも手紙がきた。

「せめて歳久の心を、わかってくだされば……」

という、義久の祈りもむなしかった。亀寿からの知らせによると、歳久の首はやはり、梅北の乱の張本人として、一条戻り橋にさらされたという。

細川幽斎の書状によって、秀吉はおそらく、歳久に謀反の心などなかったことを、十分知っていたに違いない。それでいて、なおかつ歳久の首はさらされた。

亀寿の手紙の着いた日は、朝から雨が降った。陰暦九月のなかばといえば、秋ももう深い。庭の落葉の上に首がある。

縁に立ちつくして、義久はその首に見入っていた。ひげや、びんのあたりに、白いものがまじった歳久の首である。つゆほどの恨みも宿していないさわやかな首である。その首に、雨が降っている。

背後に人が立った。老臣の一人、町田久倍である。朝鮮から届いたばかりの、兵庫頭義弘の手紙を手にしていた。義久の肩が、こまかにゆれている。久倍は声をかけかねた。久倍には、首は見えない。秋雨にうたれている落葉が見えるばかりである。

義久の胸に、秀吉のおもかげが浮かんだ。川内の太平寺で、初めて会った折の秀吉の顔である。

「腰がさびしかろう」

にこやかに笑って、無造作に投げ与えてくれた、備前包平と三条宗近。とりかわしたからの杯……。

「さすがは天下さま」

秀吉を敵としたことを、心から悔いた義久だった。だが、いまにして思う。あれは、秀吉の真実の姿ではなかった。いったん人質にとった亀寿を、すぐに返してくれた秀吉。あれも真実とはほど遠い。無実と知りつつ、歳久の首を、一条戻り橋に、謀反の張本人としてさらした秀吉。

「これがほんとうの天下さまよ。これでなければ、天下さまにはなれんのよ……」

義久は、庭の落葉に目を投げた。その落葉の上に首がある。

「歳久……」

首がぬれている。首に雨が降っている。

仲秋十五日

一

とせにとって、八月十七日という日は、忘れてはならぬものになった。その二日前、慶長七年八月十五日の午後、平馬はどこかへ出かけていった。いつものくせで、どこへともいわない。

「ちょっと出かけてくる」

平馬はただそれだけとせにいい、門口を出る時、そこに立っていた五つになる平次郎の頭を軽くなでた。つれ添って六年、平馬の無口に、とせはもうなれている。だから、格別気にもとめなかった。

行先を聞いたりすれば、とたんに平馬はきげんが悪くなる。とついできたばかりのころは、そんな平馬にとまどったものだが、いまはあたりまえになっていた。

淵脇平馬は、島津領――日向穆佐の郷士であった。もっとも、薩摩藩では郷士とは呼ばず、外城衆中という。あるいは土地の名をつけて、穆佐衆中とか高岡衆中とかいった。鹿児島の城下に住んでいる家臣は、鹿児島衆中と称される。

六十一万石余の島津家は、薩摩、大隅二ヵ国と、日向諸県郡に、合わせて百を越す外城を置い

ていた。外城とは、数ヵ村からなる郷のことで、その中心を麓と呼び、多くの郷士が住んでいる。すべてに城郭があるわけではないが、外城という名が示す通り、いざという場合は郷はたちまち出城にかわる。穆佐もその一つであった。

「川田さまのお屋敷で、きっとあさっての打ち合わせをなさるのに違いない」

とせはそう思った。

「八月十七日、野尻において鹿狩りを催される。よってその心組みでいるように」

という布令が、十日も前に出されており、当日の奉行として、すでにこの穆佐の地頭川田大膳亮、野尻の地頭敷根仲兵衛、須木の地頭村尾源左衛門入道がえらばれていた。

穆佐からおよそ六里の野尻には、数日前、薩摩の大守島津少将忠恒が到着していた。供には、北郷加賀守、伊勢兵部、川上源三郎らのほかに、帖佐二万石を領する伊集院源次郎忠真が加わっている。

二年前の関ヶ原の合戦の際、島津家は西軍に味方した。だが徳川家康は、これをとがめず、つい先ごろ、島津家に対して本領安堵を申し渡した。そのお礼言上のために、病中の龍伯（島津義久）にかわって、忠恒が上洛することになったのである。忠恒は、野尻で狩りを催したあと、高岡をへて細島の港に出、そこから船で大坂に向う予定であった。忠恒の父で、義久の弟にあたる惟新入道義弘は、関ヶ原の責めをとって、桜島の草屋に謹慎していた。

日が暮れてから、平馬はもどってきた。とせの判断はあたっていた。平馬は、ほかの郷士たちといっしょに、川田大膳亮から、十七日の狩場における心得を申し渡され、

「伊集院源次郎どのに無礼あるべからず」

と、ことに念を押されたという。そのことについては、十日前の布令にも、島津忠恒の命として、特に明示してあった。これにはわけがある。

源次郎忠真の父伊集院幸侃は、都城七万石を領し、島津家の重臣筆頭として、陪臣ながら諸侯にまで名を知られていたが、慶長四年の春、謀反の志ありとして、伏見において忠恒に手討ちにされた。

これを怨んだ源次郎忠真は、庄内の都城に立てこもり、十二の外城に兵を配して、まっ向から主家に弓を引いた。庄内の変と呼ばれるこの戦いで、島津の大軍を相手に、源次郎は一年もの間一歩も譲らなかった。いくつかの外城は落ちたが、一方では、島津勢も手痛い敗北を喫した。忠恒は、力攻めは無理と見て、都城周辺の糧道を断ち、ようやく源次郎を窮地に追いつめた。この時、

「主従の争い、見るに忍びず」

と、和睦をすすめたのは徳川家康である。家康のとりなしによって、忠恒は、源次郎忠真の降伏を許し、忠真にあらためて帖佐二万石を与えた。それが、関ヶ原の合戦の、半年ほど前であった。その忠真を、こんどの上洛に際して、忠恒はわざわざ供に加えた。これはおそらく、徳川家康に目通りさせるためであろう。

「少将さまはお心がお広い」

家臣たちは、忠恒の度量に深く感じた。だがその反面、忠真を憎んでいる者も多く、

「お情けが過ぎる」

と、はっきり口に出す者もあった。穆佐、野尻、須木の郷士たちも、都城攻めに加わって、多くの討死を出していた。そのゆかりの者は、源次郎忠真に怨みを含んでいることはまぎれもない。

「そのために少将さまは、ことさら、伊集院源次郎どのに無礼あるべからずと、仰せ出されたに違いなか」

平馬はそういった。とせにもわかる。

「腹がへった」

急に平馬はいった。とせが、酒を用意しようとすると、めずらしく平馬は、

「今夜はやめておこう」

と、すぐめしをよそわせた。幼い平次郎さえけげんそうな顔をした。とせは、笑ってたずねた。

「なぜでございもす。今夜にかぎって」

「狩場で不覚をとらぬ用心じゃ」

「でも、狩りはあさってでございもそ」

「おいは心得をいうちょる」

平馬はびしっときめつけ、いつもより、めしもひかえめにした。平次郎は、おなかがくちくなったのであろう。すわったまま、こくりこくりはじめた。平馬は、平次郎を引き寄せて、ひざの上に眠らせた。とせが、あと片づけを終ったころ、思い出したように平馬がいった。

「さすがに秋だな。川田さまのお屋敷にいく途中、とんぼが群れとった」

そのことばでとせは、今日が仲秋十五日だということに気がついた。

「うっかりしていもした。今夜は名月でございもす」

とせは縁に出ていった。月はもう、山ぎわからかなり離れて、さえざえとした光を投げている。その光を浴びて、まだ青さの残った陸稲や黍の穂波が遠くまでつづいていた。

とせは、平馬を呼んだ。平馬は、ひざで眠っている平次郎の寝顔をのぞいてから、軽く手を振った。

みれんげに、とせはまた誘った。

「名月は、ことしだけとはかぎらん。また来年がある」

面倒くさそうに、平馬はいった。

二

その二日後——八月十七日に、野尻の狩場で平馬は死んだ。夜中に知らせが届き、あくる十八日、なきがらが運ばれてきた。死んだのは平馬だけではなく、平馬と仲のよかった押川治右衛門もいっしょだった。二人とも、鹿と間違えて人を殺し、その場で腹を切ったのだという。

平馬も治右衛門も、日ごろから鉄砲の名手として知られていたが、その日にかぎって、どうしてか山鳥一羽も射止めることができなかった。

「手ぶらでは面目丸つぶれじゃ」

二人は、日が傾き、引き上げの貝が鳴っても、定めの場所にもどらず、なおも獲物を求めて、山の斜面をかけめぐった。だが、野うさぎさえあらわれない。あきらめかけた時、足もとから七、八間下にある、せまい木の間がくれの坂道を、二頭の鹿がおりてくるのがちらっと見えた。人に追われている気配もない、ゆっくりした足どりだった。

「こんどこそ」

平馬と治右衛門は、秋草をふみしだき、灌木の茂みやいばらをかきわけて、追いすがりながら鉄砲を放った。どさっと鈍い物音がした。一気に斜面をかけおりた平馬と治右衛門は、狂ったように走り去る白馬と、葦毛の馬を見、足もとに倒れ伏している二人の狩装束の武士に気づいて色を失った。どちらもすでに絶命している。二人とも、鹿皮のむかばきをつけていた。

顔をたしかめて平馬はうめいた。一人は、重臣平田増宗の子平田新四郎、いま一人は少将忠恒が、

「無礼あるべからず」

と、わざわざ布令を出していた、伊集院源次郎忠真であった。取り返しのつかぬ失態に気づいた平馬は、とっさに覚悟をきめ、鉄砲を投げ捨てるが早いか、腹をくつろげ、ふかぶかと刀を突き立てた。ためらいもなく、治右衛門も平馬にならった。一瞬のできごとであった。

そこへ一足おくれて、川井田監物、野村新次郎ら、源次郎の近臣十名あまりがかけつけた。監物は、忠真を抱きおこして、

「はかったな忠恒」

と叫んだ。血まみれになって倒れていた平馬が、監物の足をつかんだ。

「違いもす。てまえは、穆佐衆中淵脇平馬、かねてより源次郎さまを、島津家随一の豪の者と、畏敬しておりもした。その源次郎さまを、なんでてまえが……。嘘ではごわはん……。鹿皮のむかばきを……」

「たわけ。そげんことを信じられるか」

監物は平馬を足げにした。野村新次郎も、二度、三度と、平馬の顔をふみにじった。こんどは、治右衛門が顔を上げた。

「嘘ではごわはん。平馬はいつも、てまえにいうておりもした。源次郎さまは、島津家随一のお人じゃと……。押川治右衛門、神かけて誓言しもす……」

いい終らぬうちに、一人が力まかせにその顔をけった。あおむけに倒れた治右衛門の腹は、大きく口があいて、はらわたがはみ出していた。

知らせを聞いた川田大膳亮が、部下を引きつれてやってきたのは、それから間もなくであった。大膳亮は、川井田監物の前に進み出て、平馬らのそこつを詫びた。

「詫びてすむことか。殿はもはや、生き返りはなさらんとじゃ」

「ごもっともでごわす。まことに、返すことばもごわはん……」

ただ頭をさげる大膳亮に、憎しみの目を向けて、監物はずばっといった。

「そこつではなかはず。初めから、忠恒がたくらんだことじゃ」

「めっそうもなか。そげんなことはごわはん。狩場において、伊集院源次郎どのに無礼あるべからずと、少将さまがわざわざお布令を出されたこと、かたがたもご承知のはず」

「見えすいたまねにだまされはせん」

「ことばが過ぎもすぞ。初めからたくらんだものなら、なんで罪もなか平田新四郎さまを殺そうか。新四郎さまは、お家の重臣平田増宗さまのご子息でごわす」

これには理がある。川井田監物は口をつぐんだ。あたりにはもう、たそがれの色がただよいはじめている。これでおさまったと、大膳亮はほっとしたが、その時、野村新次郎が叫んだ。

「川井田どの。問答は無用でごわす。たくらみであろうとあやまちであろうと、殿が死なれたことに違いはなか。この上はわれらも、一人も残らず死ぬまでごわす」

「おう、よくいうた。一同死ね。死んで七代までもたたってやるのじゃ」

監物以下十余名、いっせいに刀の鞘をはらった。もとより、大膳亮に油断はない。うしろを振り返って大きくあごをしゃくった。それに応じて、部下の者は、ずらりと鉄砲の筒ぐちをそろえた。あとは無残だった。源次郎忠真の近臣たちは、ひとたまりもなく、虫のようにのたうちまわり、今日の獲物の山鳥の羽根や野うさぎの毛が飛び散った。

平馬と治右衛門は、その時までかすかな息があった。

「うろたえ者が」

大膳亮は、部下に命じて、二人の首をはねさせた。——以上が、とせが聞かされたいきさつであった。

葬儀は許されなかった。平馬も、治右衛門も、身うちの者数名で、ひそかになきがらを埋めただけであった。数日後、とせはさらに痛ましいうわさを聞いた。忠真の一族が、ことごとく殺されたというのである。

源次郎忠真の三人の弟のうち、小伝次は、龍伯島津義久の召しを受けて、富の隈に行く途中、主命を帯びた猿渡新助、阿田神左衛門の手にかかって浜の市で殺された。一方、三郎五郎と千次郎は、惟新入道義弘の招きで鹿児島に向ったが、谷山で斬られた。

たとえあやまちにせよ、忠真が不慮の死をとげたと知れば、小伝次らが、島津家に対して、怨みをふくまぬはずはない。いっそこの際、非常手段に訴えて、後の憂いを絶った方が安全だと、臨機の処置がとられたのに違いなかった。

忠真と、小伝次、三郎五郎、千次郎の死を知った兄弟の母と祖母は、家臣のすすめで、屋敷に火を放って自害した。

とせは人知れず涙を流した。夫平馬の死が悲しかっただけではない。平馬が、あやまって人を殺した責めをとって、腹を切っただけなら、まだしも救いがあったであろう。だが平馬のあやまちは、罪もなかった二十名以上の人びとにまで、取り返しのつかぬ不幸な運命を分け与えてしまったのだ。

三

平馬が死んだ、八月十七日という日を心に刻んで、とせはひっそりと生きた。平次郎がただ一

つの生き甲斐だった。不幸な者同士、ときたま、治右衛門の妻のたもと往き来することも、ささやかななぐさめになった。

やがて、七年の歳月が流れた。慶長十四年である。とせは三十一、平次郎は十二であった。あと三年すれば、平次郎は十五になる。元服すれば、平馬と名乗らせよう。とせはそう思った。

仲秋八月が訪れた。平馬が死んで、七度目の八月である。八月の声を聞けば、やはり心の傷が痛まずにはいない。またしても、野尻の狩場の血を思った。

十五日の昼過ぎ、めずらしい客が見えた。穆佐の地頭、川田大膳亮である。平次郎は遊びに出ていた。平馬が死んだあと、大膳亮は一度もきたことがなかった。年に一度か二度は、道で顔を合わせることもある。そんな時、大膳亮は、ひややかな目でとせを見た。平馬の過失によほど立腹しているのであろうと、とせは寂しかった。

——その川田さまがなんで。

あやしみながらも座敷に通した。今日の大膳亮は、日ごろとは別人のようにやわらかな表情をたたえていた。供の者から、三方を受け取った大膳亮は、それを静かにとせの前にさし出した。三方には、ふくさに包んで、銀十枚が載せてある。

「殿様よりのくだされ物ゆえ、ありがたく頂戴すっがよか」

「殿様が……」

わけがわからなかった。おそるおそる、とせはたずねた。

「だれにくださるのでございもそ」

「むろん、そなたと平次郎にじゃ、いや、死んだ平馬へのごほうび、そげんいうたがよかかも知れん……」

なお、平次郎が元服すれば、治右衛門のせがれとともに、郷士ではなく城下士として召し出されることになっていると、大膳亮はいい添えた。あっと、声が出そうになった。とせの顔は見る間に青ざめ、胸が鳴った。くい入るような目で大膳亮を見つめた。

「やっと気づいたようだな。もう明かしても仔細あるまい。平馬と治右衛門は、伊集院源次郎を鹿と間違うて打ったとではなか。初めから殺すつもりでかかったとじゃ」

「まことでございもすか」

とせの声がかすれた。

「まことじゃ。それを申しつけたのは、ほかならぬこの川田大膳亮」

とせの唇が、わなわなとふるえはじめた。目は、大きく見ひらかれている。

「七年の間のつれない仕打ち、申しわけがなか。わしもつらかった……」

肩で深い息をしてから、大膳亮は、目をうるませながら、話が後先だがと前置きして、まず狩場のことを語った。

忠真がわの事情は、くわしくは知る由もないが、川井田監物以下ほとんどが、一瞬にして鉄砲のえじきとなった中に、ただ一人生き残った者があり、首をはねる前にその男の口を割らせたところでは、源次郎忠真も、川井田監物も、ほかの近臣たちも、初めは無心に獲物を追っていたらしい。引き上げの貝が鳴ったあと、帰り道にかかったとき、

「おかしい」

と川井田監物がいい出したという。野村新次郎もすぐうなずいた。帰り道にさしかかってから、木こりや炭焼きに一人も出会わなかった。それがあやしいと監物はいうのだ。いわれて見ると、はるか下のふもとを走っている街道にも、ほとんど人影がないようである。それに、あたりがあまりにも静か過ぎる。

「まさか少将さまが……。気のせいじゃ。疑えば目に鬼を見るということばもある……」

雪のような見事な白馬にまたがった源次郎忠真は、自分にいい聞かせるようにいった。が、不安は晴れず、ますます重苦しいものがのしかかってくる。

「殿、やはり危のうごわす。いっさんに馬を飛ばして球磨へお逃げなされい」

突然、白馬のくつわを左手でつかんだ監物は、右手で北西の方角を指さした。人吉の相良家を頼れというのである。

「新次郎、おはんが供せい。わしらもあとから追いかける」

「心得もした」

さすがに忠真も心が動いたらしい。だが、すぐに思い直した。

「相良家が、喜んで迎えてくれればそれもよい。逆の場合はなんとする」

大丈夫と、いい切る自信は監物にもなかった。

「死所をあやまって恥をさらすくらいなら、いっそここで死んだがよい。よし、運を天にまかせよう」

忠真のことばに、みな承服した。そこへ、二人の供をつれた狩装束の若者が、背後から姿をあらわした。島津家の重臣の一人、平田増宗の子新四郎であった。

「ごいっしょしてようごわそうか」

「願ってもなかこと」

忠真は軽く会釈した。平田新四郎は、気品のある顔だちで、感じのいい若者である。源次郎に劣らず、狩装束がよく似合う。重臣の子だと、肩ひじ張ったところもなかった。新四郎の馬は葦毛であった。

道は、馬二頭がやっと並ぶ広さである。忠真と新四郎は、肩をならべて馬を進めた。監物たちはほっとした。忠恒に、源次郎を襲う腹があれば、こんなところへ、新四郎がのこのこ出てくるはずがない。

道は、すこしずつ左にまがりながら、ゆるやかな勾配でつづいている。やがて、右手に見晴らしのきく場所に出た。馬をとめて、しばらく眺めていた新四郎は、忠真の白馬に目を移し、うらやましそうにいった。

「伊集院どの。見れば見るほど、りっぱなご乗馬でごわすな。おいも一度その馬に乗ってみとうごわす」

「安かことごわす」

源次郎はあっさり馬からおりて、

「しばらくかわりもそ」

と、新四郎に手綱を渡した。新四郎の顔にわらべのような喜びがあふれた。
「かたじけのうござる」
馬をのりかえた新四郎は、白馬の背に揺られながら、
「こりゃあよか。こりゃあよか」
と上きげんであった。
川井田監物や野村新次郎は、笑いながらあとにつづいた。さっきの暗い気持など、どこかへけし飛んでいた。いつの間にか、すこしずつおくれた。

四

平馬と治右衛門は、先まわりして、山の斜面の究竟な場所に身をひそめていた。下の道からは、ここは見えない。二人のそばには、岡原彦左衛門がついていた。
治右衛門は、伊集院源次郎の顔をまったく知らず、平馬は知ってはいるが、多少の見覚えがある程度に過ぎないので、念のため大膳亮が、よく見知っている彦左衛門を介添えにえらんだのだ。
ねらいをつけた坂道は、立ち木が並んでいて、木の間がくれになっている。鉄砲を使うには不利だが、獲物と間違えたといういいぶんを通すにはそこしかなかった。顔をたしかめるほどのすき間は十分ある。
「彦左。源次郎の狩装束のむかばきは、たしかに鹿皮だな」

平馬は念を押した。
「熊皮なら、鹿と間違えたといういいぶんは通らんぞ」
「心配はいらん。たしかに鹿皮じゃ」
彦左衛門は、源次郎の愛馬が、白馬ということも教えた。
「平馬。二人で一人をねらうとは、おもしろうなかの」
心外そうに治右衛門がいった。その気持は平馬にもわかる。絶対に打ち損じはしない自信があった。とはいえ、万が一をおそれて、あえて二人に命じた大膳亮の心もよくわかった。治右衛門は、なおも不服そうだった。
「万が一などなか。絶対に打ち損じはせん。それを大膳亮さまは、信用なさらんじゃったとじゃ。くそっ」
「ばか。いまさらなんばいう」
「じゃっどん……」
その時平馬は、大事なことを思いついた。うっかりするところだった。
「治右衛門。二人とも急所をねらってはまずかぞ」
「なんでじゃ」
「鹿と間違えたといういいわけがつかん」
狩装束のむかばきは、長さが普通三尺六寸ときまっていて、腰から脚部にかけて着用する。
「だから、おはんな腰かふとももをねらえ。おいがこめかみを打つ」

「ばかな。いい出したおはんこそ、腰をねらうがよか」
「そうはいかん」
「ならばいけんする？」
治右衛門の目の色がかわった。とても聞き入れそうにはない。平馬の方が折れた。
「すまん」
にこっと治右衛門は笑った。さすがに、多少こわばった笑いだった。
「そろそろくるぞ」
彦左衛門が、心持ち伸び上って右手の方を見た。平馬と治右衛門は、火縄を、鉄砲の火ばさみにはさんだ。治右衛門が平馬を振り返った。
「火縄のにおいを悟られはせんじゃろな」
「風向きが逆じゃ」
平馬はあっさり突っぱねた。日が傾いたらしい。あたりがすこしかげってきた。平馬は深く息を吸いこみ、もう一度、胸の中で計算をくり返した。的は静止してはいないのだ。相手は動く。こっちも、山の斜面を走りながら鉄砲を打たねばならない。
「見えた」
彦左衛門の声がかすれた。ぶるっと、治右衛門が身ぶるいした。
「あ、いかん。二人だぞ」
「あわてることはなか。源次郎は白馬だ」

彦左衛門が念を押した。まずいと平馬は思った。馬は源次郎だけと考えていたのに、二人とは計算外だった。しかし、ここでためらうわけにはいかない。
馬は、一頭は白馬、一頭は葦毛だった。しかも、せまい道を並んでくる。平馬は目をこらした。どちらも同じ狩装束だ。直垂の色も似ている。むかばきも双方とも鹿皮だった。笠をかぶっていて顔は見えない。からだつきもほとんどかわらなかった。
「同じ色の馬なら困るところじゃ……」
二人の武士は、相変らず並んでくる。供の者はすこしおくれているらしい。いま二人の姿は無防備にさらされている。絶好の的だが、まだ打つわけにはいかなかった。平馬はかさねて念を押した。
「彦左、たしかに白馬が源次郎だな」
「間違いなか」
彦左衛門は、はっきり断定した。
二頭の馬は、いよいよ木陰の道にはいって行く。悪いことに、白馬が向うがわだ。平馬はごくっとつばをのみこんで、斜面をおりはじめた。治右衛門もつづいた。つる草にでも足をとられれば一切は無になる。
木の間に見えがくれする、二頭の馬の足並みに合わせて動きながら、平馬は呼吸をはかった。つぎの瞬間、平馬ははっとした。
「違う……」

一種の勘だった。白馬の主は源次郎ではない。なにかにとりつかれたような、鋭いひらめきだった。

「治右衛門、源次郎は葦毛だぞ」

それより早く、治右衛門の鉄砲が火を吐いた。一瞬おくれて、とっさにねらいを変えた平馬の鉄砲も火を吐いた。どさっと、鈍い音が二度聞え、つづいて、狂ったような馬のいななきと、ひづめの音がした。

「いまいったことが真相だ。彦左衛門が委細を語ってくれた……」

大膳亮は、額の汗を手でぬぐった。前にとせが聞いたこととは、まったく違っている。ただ、そのあとのことは、ほとんど同じであった。いや、一個所違っていた。

「ことばが過ぎもすぞ。初めからたくらんだものなら、なんで罪とがもなか平田新四郎さまを殺そうか」

大膳亮のことばに、川井田監物がぐっとつまった時、

「川井田どの、だまされてはなりもはんぞ。大膳亮、わが殿と平田どののなきがら、とくと見るがよか。二人とも、打ちぬかれているのはこめかみじゃ。これでも鹿と間違うたといいはるのか」

目をつり上げて、野村新次郎が即座にいい返し、その声に応じて、監物以下十余名、いっせいに刀の鞘をはらったのだという。

五

七年前、死ぬ二日前のあの日、日が暮れてからもどってきた平馬は、とせに、ほかの郷士たちといっしょに、大膳亮に呼ばれて、狩場における心得をいい渡されたといった。事実はそうではなかった。

あの日の午後、大膳亮が呼んだのは、平馬一人であった。

島津少将忠恒が、鹿児島を立ったのは、八月初めである。野尻にしばらくとどまって、十七日に狩りを催すことは、前もって供の者にいい渡しており、伊集院源次郎に対しても例外ではなかった。同時に、穆佐の地頭川田大膳亮、須木の地頭村尾源左衛門入道、野尻の地頭敷根仲兵衛に、

「当日は奉行をつとめよ」

と命がくだった。その時大膳亮は、思いがけない秘命をさずけられた。

「狩場において源次郎を殺せ」

というのである。それも、正面から討ってはならぬ。あくまで事故死と見せかけよというのであった。それをふくんだ上での、

「伊集院源次郎どのに無礼あるべからず」

こういう布令であった。

忠恒は大膳亮に、

「仕手はその方の手の者からえらべ。命は二日前にさずけよ」

ともいった。はやばやと命ずれば、どこから秘密がもれるかわからない。それを危ぶんだのに違いなかった。

主命とはいえ、ことはあまりにも重大である。だれをえらぶか。大膳亮は迷った。やってのけそうな男は何人もいる。鉄砲の名手もそろっていた。が、やりとげたあとは死が待っている。しかもことを命ずるのは二日前である。二日前に、それほどの秘命を与えられて、動転せぬ者があるか。的はその一点にしぼられた。

「すくなくとも五人はいる」

大膳亮に属する、穆佐の郷士の数はそれほど多くはない。それでいて、即座に死んでくれそうな男が五人もいるというのは、誇ってもよかった。その五人の中から、大膳亮は、治右衛門と平馬に白羽の矢を立てた。

治右衛門も平馬も二十八歳、鉄砲の腕といい、根性といい、申し分がなかった。しかも二人は仲がよかった。ただ、大膳亮をためらわせるものが一つある。二人の若さだった。思慮の足りなさを危ぶんだのではない。

「死なせるには若過ぎる……」

そんな意味のためらいであった。二人とも妻があり子もある。しかし、大膳亮はあえて目をつぶった。忠真一人をねらうのに、二人をえらんだのも、むろん理由がある。一人でも、おそらく仕損じはなかろう。だが、万が一ということがある。絶対にやりそこないは許されないのだ。

その日、朝のうちに、まず押川治右衛門を呼んだ。使いの者に、

「さりげなくきてくれるように」

といわせてあった。平馬には、午後きてもらうことにし、同じ意向を伝えた。治右衛門は、大膳亮の意中を知ると、さすがに顔色を変えた。

「さりげなくきてくれとは、そげん意味でごわしたか」

あとしばらく、腕を組んだまま口をつぐんでいた。大膳亮はにじり出て、どうする、引き受けてくれるかというふうに、治右衛門の目を見た。治右衛門は、それには答えず別な返事をした。

「あと二日の命でごわすな」

「そうじゃ」

無意識であろう、治右衛門の両ひざにおいた手が、いつの間にか握りこぶしに変っている。それに大膳亮は気がついた。ここだと思った。

「承知か」

無言で、治右衛門はうなずいた。さほど暑くもないのに、大膳亮の額には汗が吹き出していた。

午後、淵脇平馬がきた。大膳亮が、平馬をあとにしたのは、治右衛門の方が、説得に骨が折れそうだと思ったからである。が、逆であった。

「できもはん。淵脇平馬、そげんことはできもはん」

「命令じゃぞ。少将さまの思召しを体し、日向穆佐の地頭として、この川田大膳亮が命ずっと

じゃ」
「だれの命であろうと、できんものはできもはん」
平馬の声が大きくなった。大膳亮はおだやかにいった。
「平馬、治右衛門は、即座に承知してくれたぞ」
「治右衛門は治右衛門、平馬は平馬でごわす」
「どうあってもでけんちゅうとか」
平馬は返事をせず天井を見た。気に入らぬ時のこの男のくせである。
「平馬、かさねていう。これは少将忠恒さまの思召しじゃぞ」
「少将さまも卑怯なことをなさる」
「なにをいう。伊集院源次郎は謀反人のせがれじゃ」
大膳亮の声も高くなった。しかし、平馬はひるまない。
「そげんこと、わざわざおっしゃるまでもごわはん。源次郎さまの父伊集院幸侃どの、太閤さまの覚えめでたいことを笠にきて、家臣の分をわきまえず、ご主君たる龍伯さま、惟新入道さま、少将さまを、しばしばないがしろにされたばかりか、ついには、島津六十二万石をわがものにせんと企てられたこと、太閤の死後、その企てがもれて、伏見のお屋敷において少将さまのお手討ちに合われたこと、平馬も知っておりもす」
「ならばわしの命、聞かれぬ筈はあるまい」
「それとこれとは話が別でごわす」

「別とはいわさん。幸侃がお手討ちに合うたのは、いわば自業自得、にもかかわらず源次郎は、逆怨みして都城に立てこもり、主家に弓を引きおったわ」
それでも平馬は屈しない。屈するどころかずばっといった。
「侍ならばあたりまえでごわそう。平馬が源次郎さまでもそうしもす。たとえ相手がご主君でも、男の面目は立てねばなりもはん」

六

平馬の気持はわからぬではない。大膳亮も乱世を生きぬいてきた男だった。同じ立場にあれば、自分も源次郎忠真と同じであろうと思った。いかにも源次郎は、見事に男の面目を立て、意地をつらぬいた。飫肥の伊東家、高鍋の秋月家、県の高橋家からの援軍をまじえた島津の大軍を向うにまわして、忠真は一歩も譲らず戦いぬいたのである。
一度は忠恒を支持して、伊東、秋月、高橋の三家に、援軍を命じたほどの徳川家康が、後日、主従の争いを見るに忍びずとして、和睦をとりなしたのも、源次郎のあっぱれな戦いぶりに感銘したからであった。
「大膳亮さま、そうでごわそう」
「わかっておる。だからこそ少将さまも、源次郎に名誉ある降服を許し、一切を水に流して、あらためて帖佐の地に二万石を賜わったのではなかか」
「その源次郎さまを、いまになって、なぜ殺そうとなさっとでごわす。源次郎さまは、男の中の

男、それを、狩りにこと寄せて殺そうとは、少将さまも卑怯でごわす」
「黙れ。殺すには殺すべき理由がある」
源次郎は再度謀反をはかった。大膳亮はそういう。平馬は信じられなかった。
「源次郎さまは、そげんお人ではごわはん。きっと、なにかの間違いでごわそう。だれかが源次郎さまをおとしいれようとして、よからぬうわさをふりまいたとでごわす」
「わしも初めはそう思うた。だが、動かぬ証拠があがったのだ」
源次郎はひそかに肥後の加藤家へ、
「いざという場合には、ご加勢の人数を賜わりたい」
と、使者を送って申し入れた。使者にえらばれたのは、源次郎のいとこ——伊集院甚吉であった。それから間もなく、
「あるじ忠真に謀反の志あり」
と、忠恒に密告した者がある。
「だれでごわす」
「使者に立った当の伊集院甚吉じゃ。平馬、これほどたしかな証拠はあるまい」
平馬はうなずいて口をつぐんだが、すぐまた顔を上げた。
「いまおっしゃったことが事実なら、狩場でだまし討ちにする必要はごわすまい」
「まっ正面から、堂々と討手をさし向けよちゅうとじゃな」
「そん通りでごわす。それならば、この淵脇平馬、自分からでもその役目、買って出もす」

平馬らしいいいぶんであった。
「そげんことができるくらいなら、苦労はいらん。わざわざおはんに頼むこともなか」
「正面から討手をさし向けては、せっかくおとりなしくだされた、家康公の手前まずいことになる。そうでごわすな」
「いかにも」
平馬はひざに目を落した。どうするか、心の中で自問自答しているらしい。大膳亮はにじり出た。
「引き受けてくれるな」
「……」
「どうなんじゃ」
平馬は顔を上げた。
「いやでごわす。やっぱりいやでごわす。だまし討ちは性に合いもはん」
「まだそげんことを……」
「たとえ謀反のうわさが事実にもせよ、源次郎さまは、男の中の男でごわす」
平馬はよそでいう郷士、とるにも足らぬ外城衆中に過ぎない。それに引きかえ伊集院源次郎は二万石の大身である。したがって、口をきいたこともなく、遠くから顔を見たことが、何度かあるだけであった。
「なれどこの平馬は、源次郎さまが好きでごわす。尊敬しておりもす。その源次郎さまをだまし

討ちなどできもはん。討ち取るなら、正面からぶっつかりとうごわす」
「できん相談じゃ。おはんの気持はようわかるが、ここは目をつぶって、鉄砲でやってもらいたか」
「いやでごわす」
「あくまでもいやか」
「念には及びもはん。――ただし、秘密は守りもす。一切、胸にたたんでおきもす」
こうなれば、てこでも動く男ではない。
「失礼いたしもした」
平馬は立ち上った。その時、次の間のふすまがあいた。
「待ってくれ、平馬」
押川治右衛門であった。治右衛門は、まかせてほしいと、大膳亮に目でいった。大膳亮は、うなずいて席をはずした。平馬は立ったままである。
「まずすわってくれ」
「そげん必要はなか」
「相変らずだな」
苦笑した治右衛門は、平馬の前に立ち、まともに向き合った。
「平馬。おはん、このおいば、どげん男じゃと思う」
「男の中の男と思うとった」

平馬の声には、初めからとげがあった。
「思うとった……」
「いまは思うとらんということじゃ」
「無礼な。いうてよかことと悪かことがあっぞ」
「何度でもいうてやる」
たたきつけるように平馬がいった。
「平馬。おいこそ、おはんを見そこのうとったごたる」
「なにっ」
「この押川治右衛門が、大膳亮さまのお指図を、黙って引き受けた。それを聞いただけで、おはんも、なんにもいわず承知してくれると思うとった」
平馬は、治右衛門の目を見た。悲しみともなんともつかぬ、深いものが宿っている。治右衛門はつづけた。
「おいとおはんは、子供のころから仲がよかった。まって影と形のごとあると、うらやましがられもし、笑われもした。じゃから、おいの心は平馬の心、平馬の心はおいの心、そげん思うちょったが、違うたらしい」
急に、治右衛門の目が強くなった。
「もういっぺんいう。おいはおはんを見そこのうちょった。おはんな卑怯者じゃ」
「おいが卑怯だと」

顔色を変えた平馬は、右手にさげていた大刀を、手早く左に持ちかえた。いつでも鯉ぐちが切れるよう、親指はすでにつばにかかっている。

「外へ出ろ。刀にかけて決着をつけてやる」

治右衛門はあわてなかった。

「せくな。もうちょっと、おいのいうことを聞け。心を澄まして聞いてくれ」

ゆっくりと、一語々々かみしめるようにいった。それでも、抜きうちを避けるだけの用意はして、平馬の左がわに寄った。

「いうてみろ」

「おいには、おはんの気持はようわかる。このおいとて、伊集院源次郎さまほどのお人、鉄砲で打ったりはしとうなか。できるなら、まっ正面から、名乗りをあげてぶっつかりたか。だが、それができんのだ」

「できんなら、断わればよか」

平馬は、刀のつばから、左の親指を離した。治右衛門は首を横にふった。

「そうはいかん。おいが断わっても、ほかの者が引き受ける。しょせん、源次郎さまの命はなかとじゃ」

源次郎だけではない。源次郎の母も、祖母も、弟の小伝次、千次郎、三郎五郎も、それぞれ別なところで、人知れず討ち果す手筈がついていた。

「そうか。もうそこまで……」

「おはんな、大膳亮さまが、そこまでおっしゃらんうちに、腹を立ててしもうた」

治右衛門は笑った。つられて、つい平馬も笑ったが、どちらの笑いも、どこか暗くこわばっていた。治右衛門はいった。

「平馬。いずれ助からぬ源次郎さまなら、いっそこのおいが……。おいは、そげん思うたとじゃ……」

平馬は目で答えた。

「そんかわり、こんどのお役目、見事しとげても生きてはおれん。おいの命も捨ててねばならん。鹿と間違えて源次郎さまを殺した責めをとり、腹を切らねばならん……。でなければ、お家にわざわいがかかる……」

「わかった。わかったぞ治右衛門。おいを卑怯者というたわけが……」

「すまん。ああでもいわねば、おはんは帰ってしまうと思った……」

平馬は、治右衛門の額に汗を見た。平馬の額もぬれている。

「平馬、いっしょに死んでくれるな」

答えはなかった。

「どうなんじゃ」

「口でいわねばわからんか」

それが返事であった。

「平馬……」

治右衛門は、ごつごつした右手をさし出した。それを、平馬の右手がつかんだ。ふすまのかげで、大膳亮は、二人よりもなお汗まみれになっていた。

大膳亮は、そこで話を切った。あとをいうつもりはなかった。

「初めてうかがいもした……。いまがいままで、平馬は、あやまって源次郎さまを殺したとばかり思うていもした……」

あの日のことを、とせは語った。

「平馬は、名月はことしだけとはかぎらん。また来年もある。そうもいいもした……」

平馬は、あくまで平静だった。なに一つ、とせに悟られなかった。いまさらのように、見事とも、おそろしいとも思う。

「この七年のあいだ、わたくしは、夢にも知らずにいもした……」

とせはうなだれた。その姿を見て、急に大膳亮の気持がゆらいだ。かくすべきではない。かくさず、なにもかもいおうと思った。救いにまではならなくても、せめて多少の安らぎを与えてやりたいと思った。

七

平次郎はもう、軽い寝息を立てている。とせは、縁先に出た。ついさっき、そこまで届いていたはずの月の光が、いつの間にか遠のいていた。すわると、軒の板びさしの先にまるい月が見えた。仲秋十五日の月である。青いほど冴えている。

以前は、こんなに青いと感じたことはなかった。もっと明るく、暖かい色だったと思う。青く冷たく感じるのは、きっと平馬の死の真相を知ったせいに違いない。

とせはいま、昼間、大膳亮が最後に語ったことを思い出していた。

平馬と治右衛門は、狩場での手筈をさずけられたあと、二人つれだって、土塀に沿った道を北に向った。家ははなれているが、方角は同じだった。大膳亮は、門の外に立って二人を見送った。あたりには、すでにたそがれが迫っていた。

見ていると、二人は途中で立ちどまって、二言三言なにかいったあと、まっすぐ家の方に歩き出さず、右がわに折れた。右がわには畑がつづいている。

大膳亮は、二人に気づかれぬようあとを追った。二人を疑うとか、危ぶむとか、そんな気持ではなかった。二日後の死を、いさぎよく覚悟してくれた二人の若さが、ふと哀れに思われたからである。

しばらく後、大膳亮は、豊かにみのった黍畑の中に隠れていた。そこから、さほどはなれぬあぜ道に、平馬と治右衛門は、背を見せて立っている。向うには、心もち色づきかけた陸稲の波がつづき、その先に、いつも見なれた低くてなだらかな山並みが見えた。紫がかった山ぎわに、いま昇ったばかりのまるい月があった。大膳亮は、今日が中秋ということを思い出した。

中天の月とくらべると、山ぎわの月は、ひどく大きく見える。黍畑の中から見ると、なおさら大きい。大きいが光はまだ弱かった。といっても、昼の月のように、そんなに白くはない。

平馬の声がした。
「中秋の名月じゃ」
すぐには返事がなく、かなり間をおいてから、治右衛門の声がした。
「ことしが見おさめか……」
「いうな治右衛門」
「あすは、野尻の狩場へ行かねばならん。あさっては鹿を打つ。うちに寝るのも今夜かぎりじゃ」
しみじみした声だった。大膳亮に大事を告げられて、さほどためらいもせず、
「あと二日の命でごわすな」
といってのけた時のさわやかさは、どこにもなかった。平馬の声がした。
「治右衛門、おはんらしゅうなかぞ。先に道をえらんだのはおはんじゃなかか」
「平馬。おいはまだ二十八じゃ。そして、おはんと同じように、女房もあれば子もある」
「いうな。そいはいうな」
はげしい平馬の声がした。それは、治右衛門をたしなめるよりも、自分自身をしかっているようであった。
「ほかの者にはいいはせん。おはんにじゃからいうとる……」
「治右衛門……」
あと、声が跡絶えた。声が絶えると、虫の声が、にわかにあたりに満ちた。月の位置がすこし高くなっている。

治右衛門がいった。
「平馬、今夜はのもう。二人っきりで、心ゆくまで……」
大膳亮の耳から、虫の声が消えた。平馬の声を待った。虫は相変らずあたりに満ちている。ただ大膳亮の耳が、虫の音を失っているだけであった。平馬の声がした。
「いや、やめておこう」
「なぜじゃ」
「今夜とあす、たった二晩だ。この期に及んで、酒の力は借るまい。歯をくいしばっても正気で過ごそう」
「そげんつもりではいうとらん」
「わかっとる。とにかく、酒はのまんことにしよう」
やや間をおいて、治右衛門がいった。
「おはんな、強かなあ」
「強かもんか。人間はいっしょじゃ……」
また、声が絶えた。しかし、そう長くはなかった。
「平馬……」
答えはない。答えず、平馬は大きな息をした。その顔をのぞきこんで治右衛門が、
「おはん、なんば考えちょる」
「殿様のことじゃ」

と、平馬は答えた。妙に投げやりなひびきがあった。

「殿様のこと……」

治右衛門は、まじまじと、平馬を見返したらしい。はっきりわからぬが、そんな感じであった。大膳亮は、思わず身をこわばらせた。平馬の声が、大膳亮の心の中にまで飛びこんできた。

「おいどんたちが死んだことを、あとで聞かれても殿様は、おいとおはんが死ぬ二日前の晩に、こげんことを話し合うたては、思いもなさらんじゃろう。主君の命であれば島津家の侍は、薩摩隼人は、迷わず黙って死んでいくものと、それがあたりまえじゃと、お考えなさるじゃろ……」

時と場所をたがえて、このようなことばを聞けば、大膳亮は黙ってはいなかったであろう。だが、いまは責める気にはなれない。まっかに熱した焼け火箸が、胸の中でじじっと音を立てた。

「治右衛門、帰ろう」

「うん」

「もういっぺん念ばおす。治右衛門、どげん苦しかっても杯はとるなよ」

「わかった、平馬」

その時の声は、もういつもの治右衛門であり、平馬であった。足音が遠ざかった。その足音が、まったく聞えなくなってから大膳亮は身をおこした。

八

とせは、治右衛門の妻のたもを思った。今日、川田大膳亮は、たもにも会ったはずであった。

たもはやっぱり、黍畑のことを聞かされたのだろうか。

いつだったか、たもが、打明け話をしてくれたことがある。それは、平馬と治右衛門が死んで何年か過ぎ、夫のいない寂しさにもいくらかなれて、貧しくみじめな後家ぐらしの中にも、それなりの、ささやかな平安を見つけ出したころであった。

たもは、死ぬ二日前の治右衛門のことを語った。あの夜、治右衛門は杯を手にしなかった。そのかわり、二度も三度も、むさぼるようにたものからだを求めたのだという。

やさしく、はげしく、そしてひどく執拗だった。さまざまな形を強いられてたもは、

「人形ではございもはん」

といったほどだった。もっとも、こばむ意味ではなかった。その証拠に、あとではずかしいほどたもは乱れ、声をあげ、身をくねらせた。一度果てても、治右衛門はたもを離さず、しばらくして、ふたたび責めはじめた。たもも応じた。そのあと、どのくらいたっただろう。治右衛門は、またもたもの肩を強くゆすぶった。

「またでございもすか」

さすがにたもはあきれ、こんどはすこしじゃけんにした。たもは、その時のことを、顔を赤らめて、しかし真剣に告げ、

「別れになることを、きっと虫が知らせたのでございもそ」

こんなことなら、じゃけんにするのではなかった、なんで最後まで、女の命を燃やしてやらなかったのかと、目に涙をたたえたものだった。今日、大膳亮の口から真相を聞いたとすれば、そ

の思いは、さらに深まったに違いない。枕をぬらして身もだえするたもの姿が、まざまざとせの目に浮んだ。

とせは、平馬のことを思った。あの夜、平馬は冷静だった。ふだんと、まったくかわったところはなかった。二日後の、のがれようのない死をみじんも感じさせなかった。

男とは、侍とはこうも強いものか。誇らしいような、悲しいような、うらめしいような、なんともいえないものが、とせの胸を満たした。月の位置がまた動いたらしい。光のさしかたが、さっきと違っている。

あの夜、平馬は一人で寝た。身分の低い郷士とはいっても、侍は侍である。ふしどをともにすることはない。とせを抱く時は、

「ここへこい」

と呼ぶのが常だった。とせは、満ち足りたあと、しばらく添い寝することはあったが、からだのほてりが静まると、そっと自分の床にもどる。そうせよと、実家の母にしつけられていた。

あの夜、一足先に寝た平馬は、すぐ軽い寝息を立てはじめた。やがて、とせも隣室の床にはいった。平次郎はぐっすり眠りこけている。

平馬は、こっちに背を見せていた。とせはなぜか眠れなかった。からだのしんが燃えはじめた。こんなことはめったにない。けれども、自分から求めるわけにはいかなかった。目をつぶったが、やはり眠れない。

とせは、いいわけを用意して、平馬のそばにいった。その夜は、あまり暑くなかった。いや、

いまの季節にはめずらしく、涼しいほどだった。とせは、夜着をかけ直すふりをして、平馬の肩に手をふれた。相変らず平馬は、軽い寝息を立てて動かない。

ふと、憎かった。強く肩をゆすった。笑われてもよい。人に知られるわけではなしと自分にいい聞かせた。

「ねえ……」

平馬の耳に口を近づけた。平馬は、なにかもごもごといった。夢を見ているのかも知れない。とせは、もう一度平馬をゆすった。平馬はまたなにかいった。

「野尻の狩場から帰ってからじゃ」

多分、そういったようであった。その時のことを、とせはいま思い出していた。戸じまりをしようとして立ちあがったとせは、雨戸に手をかけて外を見た。月に照らされて、陸稲や黍畑がしろじろと見える。

不意に、黍畑にひそんで大膳亮が聞いたという、平馬と治右衛門のやりとりが、現実感を持ってとせの胸によみがえった。

「おはんな、強かなあ」

「強かもんか。人間はいっしょじゃ……」

その声をはっきり聞いたと思った時、とせは、あっと小さく叫んだ。おそろしいことが胸の中になだれこんできた。

「あの時、平馬どのは眠ってなどいなかった」

迷いではない。気のせいでもない。夫は、決して眠ってなどいなかった。わたしに背を向けて、必死になにかに耐えていた。もちろん、いまとなってはたしかめるすべもない。だが確信を持ってとせはそう思った。

雨戸から手を離し、とせは地面におりた。そこは、庭というほどのものではなく、粗末な垣根の先は畑になっている。

とせは、はだしで黍畑の中へはいった。むろん、大膳亮がひそんだ場所から四、五町も離れている。しかし、ほんの目の前に、治右衛門と平馬が立っていそうな気がしてならなかった。

「殿様は、なんにもご存じない……。侍の悲しみも……、その妻の悲しみも……、ほんとうのことはなんにも……」

平馬の位牌の前に供えてある、殿様のくだされたという銀十枚が、とせの手の中で、羽毛のように重みを失った。のけぞるように、とせは中天の月を仰いだ。まるい、冴えざえとした中秋の月である。

平馬は、七年前の八月十七日に死んだ。昨日まで、とせにとって、忘れてならない日は十七日だった。でも、いまは違う。ほんとうに忘れてならないのは、八月十五日なのだ。今夜なのだ。

とせは、いつまでも、影絵のように立ちつくしていた。目にはなにも見えない。ただ、霞のような白さがあった。

白梅月夜

一

関ヶ原の戦いに敗れて、薩摩へのがれた宇喜多中納言秀家は、島津家のはからいで、肝属郡の牛根にひっそりした明け暮れを営んでいた。生き残りの旧臣たちはそれを知ると、灯を慕う虫のように、つぎつぎに秀家のもとに集まってきた。玉川伊予もその一人であった。伊予は、正しくは本郷伊予守義則、在所の名をとって、いつからともなく玉川どのと呼ばれたが、日置流寿徳派の弓をよくし、また馬術にも抜群なところから、ことに秀家の覚えもめでたかった。

伊予をはじめ、薩摩へ下ってきた宇喜多の旧臣は、一時は百名を越したといわれる。彼らは、失意の主君をなぐさめ、朝夕まめまめしく仕えた。南国の自然の中に、誠実な家臣たちにかこまれた秀家の、わびしくとも平穏な生活がしばらく続いたが、しかし、それも長くはなかった。慶長八年の秋、助命を条件として秀家の身柄が、島津家から徳川幕府へ引き渡されることになったのである。

「頼み甲斐のない。今になって幕府に引き渡すとは」

余儀ないこととは知りつつも、色を変えていきりたつ伊予たちを、秀家はおだやかに制した。

「責めるべき筋あいはない。だれなれば今日まで、余をかくまってくれたであろう。島津どのにこの上の迷惑はかけられぬ」

まだ三十を越したばかりの秀家だが、かつての覇気はそのどこにも見られず、悟りすましたかのような静かなあきらめがおもてに宿っていた。とはいえ、年老いておのずと身についたものではない。なまなましい血のにじんでいるあきらめであった。

秀家が伏見へ護送されるとともに、宇喜多の家臣たちは、思い思いに薩摩を去った。あとにとどまったのは、玉川伊予と山田半助の二名のみであった。以後は島津家に奉公せよと、秀家に命ぜられたのである。

「この両名は、他日かならず御用に立つ者ども、これまでの数々のお心づくしに、なにひとつお酬いすることもかなわぬ秀家がせめてもの志、なにとぞお受け下さるよう」

そういう秀家の申し出を、島津家久は喜んで受け入れた。伊予ははじめ、それを夢にも知らずにいた。

主従が、ふたたびちりぢりに別れるに先だって、ささやかな別離の宴が催されたが、さすがにだれも酔う者はなかった。だれもが、酔って酔って、正体ないまでに酔いつぶれたいと願っていたし、そうでもせねば、憂悶の晴らしようもないことを、知り過ぎるほど知っていた。それでいて、やはりだれ一人酔えなかった。宴が果てて、最後まで残っていた玉川伊予は、この時秀家の口から、

「伊予、そちはこのまま薩摩にとどまって、島津どのに仕えてくれい」

と、思いもよらぬ命を受けたのである。わが耳を疑う思いであった。同じ命を、山田半助は、すでに謹んでお受けしたという。そうと知っても、もとよりおいそれと聞き入れる伊予ではない。涙を流さんばかりに、あくまでもお供をといい張った。

「そのようなことが許されよう筈はない。余は天下の大罪人なのじゃ」

「許されねば、見えがくれに乞食になってもお供いたしとう存じます」

秀家が流罪となれば、おのれもまた流罪にと、いちずに思いつめている伊予だった。はては、

「それがかなわねば、伊予はこのところにおいて切腹つかまつります」

とまで迫った。

「聞きわけのないことを申す。そちは余に恥をかかす気か。もはや島津どのにはそちを進ぜると約束ずみじゃ」

秀家はめずらしく声を荒だてた。だが、それもつかの間、秀家はすぐまた寂しいかげをただよわせた。目がきらきらとうるんだ。

「伊予、この秀家とて、好きこのんでそちを薩摩にとどめるわけではない。敗残の身にとって、いまはその方がただ一つの誇りじゃ。島津家に人多しといえども、そちほどの侍、そう数多くはいまい。それを、あえて島津どのに進ぜるのは……」

あとは聞くまでもなかった。伊予はまだ若い。あるじ秀家とほぼ同年、色が白く目が澄んで、いかにも雅びた柔和な顔だちだが、弓をとらせては、宇喜多の家中に並ぶ者もなかった。その伊予を薩摩に残すというのは、多年の島津家の厚誼に酬いる意味だけではなく、今の秀家に与えら

れた唯一の晴れがましさでもあったに違いない。それが、じいんと伊予の胸に通じた。

「殿……」

ぐっと、熱いものがこみあげてきて、あとはなにもいえず、額を畳にすりつけるばかりであった。

秀家が薩摩を去る日、伊予は、山田半助とともに国境まで見送りに出た。別れしなに、乗物から身を乗り出して、

「こののちは、島津どのを余と思え」

ぽつんと一言もらした秀家の、やつれた白い顔が、ぼおっとかすんで、いつまでも伊予の目に残った。

二

この時、薩摩にとどまった両名のうち、山田半助については、のち、故あって島津家を去ったと伝えられるばかりで、別に話らしい話も残っていないが、伊予は生涯を薩摩で終った。

だが、秀家と別れたあとの伊予の日々は、決して楽しいものではなかった。たとえ宇喜多の家では武名をほしいままにしたとしても、島津家にあっては新参者である。常に白い目で見られた。島津の家中の人々とて、玉川伊予の名をまったく知らぬわけではない。知っていてもつめたく無視した。きわめて排他的なお国ぶりがそうさせたのでもあろうし、伊予の、武士に似合わしからぬ姿かたちのやさしさにも、必要以上に反感をそそられるものらしかった。彼らは、路上で

伊予とすれ違う折など、それとわかるほど、故意に肩をそびやかした。

「殿も少々物好きじゃよ。あげな色のなまっ白い柔弱者をもらい受けて、いったいなんとなさっ気じゃ」

「なに、せっかくの宇喜多どのの申し出とあっては、断りもならず、しようことなしに、おもらいなされたにきまっておる」

聞えよがしの陰口も何度か耳にした。伊予はさらりと聞き流したが、それがまた新たな悪口の種にされた。中には、人でなしと極言する者もある。

「そうではないか。宇喜多中納言どのは、鳥も通わぬ八丈島に流されて、気の毒な流人ぐらしをなされておるというのに、おのればかりがぬくぬくと……」

伊予が、あるじ秀家の命で、やむなく島津家に仕えるに至ったいきさつを、承知しつつもそう毒づくのである。そして、なにかといえば、新参者の分際でと、ことごとにつらくあたった。

二、三年の間は、式日にお目見に出ることさえ、周囲が許そうとはしないのであった。

もっとも、当の伊予にとっては、それがかえって望むところだったかもしれない。伊予は折にふれ、遠い空のかなたに思いをはせ、秀家のおもかげをなつかしんだ。時としてそんな伊予に、弓を持たせて手並をこころみようとする者もないではなかったが、伊予はその都度、なにかと口実をもうけて断った。

「ふん、宇喜多家切っての弓の手だれということだが、どこまで信用できるやら」

いきおい、待っていたとばかりに、よしないうわさが伊予をとり巻いた。伊予に対する風あた

りの強さを、島津家久はほどなく気がついた。しかし家久は、そ知らぬふりで見守るにとどめた。表だって伊予をかばいだてすれば、かえって伊予自身を苦しめる結果となりそうだったからである。

こうして、何年かが過ぎた。その間に伊予は、家久のすすめもあって妻をめとった。三度まではかたく辞退したものの、ついには断りかねたのである。

「だれなりとそちの気に入った女を」

家久はそういったのだが、伊予は意外な相手を選んだ。伊集院東馬の妹で名を由美といい、一度不縁になって戻された女であった。顔だちはととのっていたが、一目で病身と知れるほっそりしたからだつきだし、肌の色も透き通るように青かった。不縁になった理由は、石女だからというわさもあった。そんな女を、わざわざ妻に迎えたわけを家久に問われた時、伊予は微笑して、

「由美という名が気に入りました」

と答えた。家久は軽くうなずいた。伊予が日置流の弓をよくすると、以前宇喜多中納言秀家に聞かされたことを、あらためて思いおこしたからであった。だが、伊予が由美を選んだ理由は別にあった。伊予は、それをだれにも明かさず、相変らず目だたぬよう、ひっそりと日を送った。

そうしたある日、夜空を赤くいろどって城山が燃えた。火の手を最初に発見したのは、城外の屋敷にいた、家老の伊勢兵部貞昌であった。貞昌は、手早く火事装束をつけると、馬を引き出して飛び乗り、供もつれずただ一騎、まっしぐらに城内へはせ向った。

まだ宵のうちであった。火はどこから出たのか、途中までいくと、もう炎が城山のなかばをおおい、さかんな火の粉が高く舞いあがっていた。本丸や二の丸の甍や白壁が赤く染まって、焼けただれているように見えた。道筋は、右往左往する人々で大さわぎだった。

「お城が危いぞ」

「御城内に火を入れるな」

そこかしこで、かん高い叫び声があがっていた。混乱の中を縫って、伊勢貞昌はいっさんに城門へ駆けつけた。と、早くも城門の守りについている者がある。具足に身を固め箙を背に負い、弓を手にして馬上にまたがった武者姿が、赤い影絵となって貞昌の目に映った。

「何者じゃ」

「玉川伊予にございます」

「なぜ城内へ入らぬ」

「おそれながら、てまえはお家に仕えることいまだ日浅き新参者、さわぎの際に城内に入るもいかがやと存じ、門外にあって非常の変に備えているしだいにございます」

伊勢貞昌は、大きくうなずいて城門をくぐった。必死の消火作業が功を奏し、火は幸いにして城内には及ばずようやく鎮火した。貞昌は後日、伊予のことを家久の耳に入れた。伊予が城中に召されたのは、それから幾日もたたぬある日であった。

三

その日、久々のお目見ののち、伊予は家久の命により、城内の馬場で馬を責めた。近習の面々が、待ち受けていたように家久に進言したのである。

「玉川伊予は、弓のみならず馬術にも堪能と聞いておりまする。一度おこころみ遊ばされては」

好意から出たのでは決してない。彼らにははじめから、ある魂胆があった。伊予もそれを承知している。城山が火を発した夜の伊予の行動をさえ、きざなまねをすると、多くの人々があざけったことも聞いていた。衆人の注視の中で、伊予に思い切り恥をかかせてやれと彼らは、心の中でしめしあわせているに違いなかった。

島津家久に、馬を責めよと命ぜられた時、ほんの一瞬ではあったが、伊予の顔色がわずかにかげった。当惑のていとも見えた。

「まやかし者め」

近習の面々はほくそ笑み、たがいに顔を見合わせた。伊予が狼狽したと見たのに違いなかった。もっとも、彼らとて、伊予に対してさほど怨みがあったわけではない。悪意はいわば、ごく単純なものから発していた。よそものというのが、ことごとく気に入らないのである。それに、いかにも武士らしくない、柔和な伊予の顔かたちがきらいであった。

伊予は唇を噛んだ。

弓にしろ、馬にしろ、伊予は秀家と別れて以来、まだ一度も島津家久の上覧に供したことがない。そうしたいとも願わなかった。秀家の命でやむなく薩摩にとどまるはめとなったとはいえ、仕えるべき主君はただ一人と、今なお信じて疑わぬ伊予である。

柔弱者と見なされ、武士の風上にも置けぬとそしられることは、よしんばそれが、旧主秀家の意にそむく結果になるにしても、むしろ望むところですらあった。城山から火が出た折、箙を背負って第一番に馬を乗りつけ、城門を守った心意気とは、また、おのずから別なのである。

――わざと落馬してやれ。

とっさに伊予は心をきめた。手もつけられぬ荒馬が引き出されてくるであろうことは、はじめからわかっている。さっき、なにやらしきりに目くばせし合った近習の様子が、明らかにそれを語っていたし、馬を引き出してくるのに、ひどく手間がかかり過ぎるのでも察しがついた。

もちろん、どのような荒馬であろうと、乗りこなせる自信は十分にあった。が、見事に乗りこなしたとてなんとしよう。伊予はふたたび心にきめた。

ところが、ようやく馬場へ引き出されてきたその馬を見て、伊予は思わず息をのんだ。目もさめるばかりの、美しい月毛の駒である。一目で魅せられた。ぐらりと決心がゆらぐのが自分でもすぐわかった。

真っ白なたてがみ、のびやかな四肢、これまで数多くの名馬に接してきた筈の伊予が、はっと我を忘れるほどの逸物であった。

「上様の御乗馬、小沢でござる」

下士の一人が告げた。さてこそとうなずける。覚えず、つと手を伸ばして轡をとった。ほれぼ

れと見守る伊予の目と、やさしく賢そうな小沢の目がひとりでに結びついた。

「御免」

鞭を受けとると、伊予は床几にかけた家久に一礼し、肩衣姿のまま、ひらりと小沢にまたがった。

——殿。

伊予の瞼を一瞬かすめ去ったのは、今は八丈島に、むなしい無為の日々を送っているであろう旧主秀家のおもかげである。

——だれに見せるのでもない。宇喜多の殿にお見せ申すのだ。

伊予はぴしりと一鞭あてた。その伊予の心をたちまち読みとったかのように、小沢は、伊予の思いのままに、あるいは速く、あるいはゆるく、広い馬場を自在に駆けた。

家久も、かたわらの伊勢貞昌も、ただ酔わされたように、人馬一体の妙技をじっと見守っていたが、近習の面々は、いずれも苦虫を噛みつぶしたように、むすっと押し黙っていた。かと思うと、

「賞めるほどのことはない」

「まあまあというところじゃ」

「小沢ほどの名馬に乗れば、子供でもあれくらいのことはするわい」

などと、ときどき勝手なことをいい合った。そのくせ、思わず知らず見とれる顔になっては、くそっと、またいまいましげに舌うちするのであった。

四

玉川伊予に小沢を与えたのは、ほかならぬ島津家久のはからいであった。その事情を、伊予は後日知らされた。ある日、妻の由美の兄、伊集院東馬が行きずりに立ち寄って、

「あのとき、なにか気がついたことはなかったかな」

と笑いながらいった。その瞬間、はっとひらめくことがあった。そういえば、あの日、小沢が引き出されてくるのに、ひどく手間どったのを覚えている。それに、家久がいったん席を外したのも思い出された。伊集院東馬は、手短かに語った。

「はじめは、ほかの馬が三頭、お厩から引き出された」

いずれも、一癖も二癖もある悍の強い馬ばかりであった。厩中間が総がかりで、ようやく引き出し、馬場へつれて行こうとしているところへ、思いがけなく家久がやってきた。眉がぴくりと動いた。

「だれの下知じゃ」

「三原左衛門佐どのの指図にございます」

馬についていた近習の一人が答えた。

「この馬はならぬ。かわりに、余が乗馬、小沢を引かせい」

「は、しかし……」

当惑して顔を見合わせるのへ、

「なにをぐずぐずしているのじゃ。小沢を引かせいというに」

家久は声あららかに命じた。

さらに家久は、後刻、三原左衛門佐はじめ、近習の面々を呼びつけて、

「伊予は他国者、月日よりほかに、この薩摩には知辺とてもない身ぞ。ことさらに悍馬を与えて辱かしめようとは、武士の情けをわきまえぬいたしかた」

と、したたかにたしなめたという。

――そうだったのか。

仔細を聞いて、伊予は愕然となった。

兄の東馬が去ったあと、由美は、夫の部屋に入ろうとして思わず立ちすくんだ。床柱近くに、伊予は腕を組み、黙然と坐していた。おもては青ざめて、血ばしった目は、宙の一点にすえられている。その時、由美のきれ長の目に、見る見る涙があふれた。伊予はふと、由美の涙に気がついたが、その涙の意味するものをはっきり知ったのは、はるかに後日のことであった。

伊予に対する周囲の風当たりは依然として続いた。ある時、弓を上覧に入れるよう、伊勢貞昌に命ぜられた。断る口実がなかった。伊予の胸には、いつぞや、みずからの乗馬小沢を与えてくれた、家久の情けが焼きついている。

その日伊予は愛用の重籐の弓をとり、定めの距離をおいて的に向った。色白の端正なおもてに朱がさした。一の矢は的の真中に命中した。伊予はその矢を引きぬかせたが、それがなにを意味したかはすぐわかった。二の矢は、あやまたず一の矢のあとに突き立ったのである。まるで矢が

吸いこまれるように見えた。三の矢もその通りであった。と、この時、

「あいや、こたびは、これなる弓にておためし願いたい」

と、近習の一人で、示現流の使い手、中馬孫之丞が伊予に近づいて、同じ重籐の弓をさし出した。つくりは美々しいが、癖弓と一目で知れた。が、伊予は色も変えず、無造作にそれをとりあげて矢をつがえた。

こんどは、一の矢はわずかに左へそれた。二の矢もやはり左にそれた。近習たちは、にやりと顔を見合わせた。彼らの企らみをようやく悟った家久の面上に、むらむらと怒りがみなぎった。

「殿、お待ち遊ばせ」

かたわらの伊勢貞昌が静かに制した。水のような伊予の態度に気づいたからであった。玉川伊予は、動じたさまもなく三の矢を放った。しかし、三の矢は、かろうじて、黒星の左上端に立ったに過ぎなかった。

ましんをはずしたとはいえ、見事なあたりには違いない。が、この場合の伊予にとっては、はずれも同様であった。孫之丞はじめ近習の面々は、伊予に目をやった。伊予は相変わらずゆうゆうとしている。

はてと、不審の念が彼らの脳裏をかすめた時、伊予は新たに十本の矢を用意すると、作法を無視して矢つぎばやに射放った。一同が、あっと声をあげたのは、家久に向って伊予が静かに一礼した時であった。見ればなんと、三の矢をふくめて、十一本の矢が、的の黒星を、ふちどったようにまるくかこんでいる。つまり、ましんをそれて、黒星の左上端に立った三の矢を、あとの十

本の矢が、見事に生かしていたのである。三の矢までにして、伊予は早くも、孫之丞に手渡された弓の癖を、あやまりなく見抜いてしまったのだった。

「ふん、曲芸のようなまねをするわ」

だれかが憎々しげに吐き捨てるのを、

「ひかえい」

と家久が一喝した。後日家久は、その時のことを思い出して伊予にたずねた。

「伊予、あの癖弓を使うた折の三の矢は、はじめから黒星の左上端をねらったのか」

「いいえ、やはりまんなかをねらってそれたのでございます」

微笑をたたえて、伊予は答えた。

五

同じ年の冬のことである。南国薩摩にはめずらしく寒いとある朝、島津家久は、供まわりの者十数名をつれて、菩提寺の福昌寺に詣でたが、その折、伊予もお供をした。伊予をのぞけば、あとはほとんど血の気の多い二才衆ばかりである。中でも樺山忠八郎は、名題の乱暴者だったが、住持と話しこんでいる家久を待っているうちに、鳥居のそばの石灯籠を指さして、

「玉川どの、これを抱えてみせて下され」

と難題を吹っかけた。石灯籠は、大の男が三人がかりでなら、どうにか持てようと思える重さであった。わたしは非力だからと、伊予はおだやかに断った。それで素直に引きさがる相手ではない。何度もしつこく迫った。ほかの二才衆も、忠八郎といっしょになって、やいやい責めたてた。彼らもまた、よそものの伊予に、いつか赤恥をかかせてやれと、かねてから折を待っていたのである。

「さ、この石灯籠、抱えて見せなされ」

軽く受け流そうとする伊予に、忠八郎はやっきとなった。はては、

「これほどいわれて断るというのは、敵にうしろを見せるも同様でござわすぞ」

とまでいう。伊予はさすがにむっとした。

「やむを得ぬ。それほど望みとあれば」

両刀をくるりと背にまわし、二、三度からだを揺すると、つかつかと歩み寄って、石灯籠に両手をかけた。履物はぬいではだしである。しばらく呼吸をはかって、

「おうりゃあっ」

と渾身の力をこめた。伊予の白い顔が、みるみる火のついたようになり、さしもの石灯籠がぐーっと持ちあがった。

「見たかおぬしら」

二才衆は真っ青になった。大地にめりこんだ伊予の足指の間から、さっと鮮血がほとばしったのである。石灯籠をもとにかえし、乱れた衣服をととのえると、伊予は樺山忠八郎はじめ、二才衆一同をにらみすえてきびしくたしなめた。

「よいか。以後このような軽率なことをいい出すではないぞ。首尾よく石灯籠を動かせたからよ

いものの、もし仕損じておれば、おぬしら一同、残らずぶった斬って、腹かっさばく覚悟でかかったのだ」

さしも乱暴者ぞろいの二才衆が、しゅんとなってしまった。以来、もはや伊予を軽んずる者は一人もなくなった。伊予のもとには、やがて日置流の弓を志す者が殺到した。かつて彼を白眼視した者までが、あらそって教えを乞うた。島津家久みずからも、伊予を師と仰ぎ、後日奥儀を授けられた。家久につづいて相伝を受けた者に、東郷長左衛門重尚がある。

伊予の指南は懇切をきわめた。だが、なぜかみずから弓を射ることは、ふたたびしなかった。多くの弟子たちにとっては、やはりそれがいささか不満だったらしい。あるとき、東郷長左衛門が、門弟一同を代表して願い出たが、伊予はただ、いずれ折を見てと答えただけであった。理由はなにも告げようとはしなかった。

しかし、遠からずして機会がおとずれた。鹿児島の城下で、夜中しばしば辻斬りを働いたことが発覚して、切腹をいい渡された、示現流の使い手、中馬孫之丞が、死出の思い出に玉川伊予と立ち合わせていただきたいと、島津家久に願い出たのである。願いは聞き届けられた。その際、家久は、

「伊予が弓を、三の矢まで防ぎうれば、助命してつかわせ」

と、家老の伊勢兵部貞昌に命じた。貞昌はただちにこの旨を伝えたが、

「御無用でござる」

と、孫之丞はにべもなくいい放った。

その日、伊予は、門弟一同が見守る中に、孫之丞と相対した。伊勢貞昌以下、家臣のおもだった者をしたがえて、島津家久がその場に臨んだことはいうまでもなかった。

いつぞや伊予に恥をかかせようとはかって、逆に名をなさしめた口惜しさを、孫之丞はいまだに忘れてはいない。孫之丞の双の眸には、はじめからめらめらと殺気が燃えていた。伊予を斬る気だなと、だれにも読めた。怨みというほどのものではない。にもかかわらず、孫之丞は執念の鬼となっていた。

伊予と孫之丞、両者の距離はおよそ二十間あった。これは孫之丞からいい出したことである。袴のももだちを高くとり十字にたすきをかけた孫之丞は、自慢の業物の鯉ぐちをくつろげて、

「矢は十本まで使われい」

と叫んだ。とたんに、

「それには及ばぬ。一の矢が勝負」

伊予がずばりと切りかえした。怒りに青ざめた孫之丞は、長剣を八双に構えた。伊予は五人張りの強弓（ごうきゅう）をとる。そして、かたわらの東郷長左衛門に、

「雁股（かりまた）の矢を」

と命じた。雁股の矢とは、内がわが鋭い刃となった、二股のやじりをつけたものである。長左衛門から大雁股の矢を受けとると、伊予は家久の近習たちに一瞥をくれて、

「いつぞや、曲芸のごとき弓と申された方がありましたな」

といって弓に矢をつがえ、きりきりと引きしぼる。日ごろの柔和な顔はすでに一変していた。

島津家久も、伊勢兵部貞昌も、近習の面々も、東郷長左衛門以下の門弟一同も、思わず息をとめた。

一切の物音が、杜絶えたかと感ぜられた。一瞬、はげしい弓弦の音、そのせつな、八双に構えた中馬孫之丞の長剣が、きらりと陽の光をはじいた。その長剣はしかし、むなしく空を切ったに過ぎなかった。孫之丞のからだは地ひびきを立てて倒れたのである。そして、その首は、はるかかなたに飛んでいた。

「見られたか御一同、弓とは、このようなものだ」

伊予の目には、つゆも、勝利の色はなかった。彼の目に宿されていたものは、深いかなしみなのであった。

六

玉川伊予の名は、いよいよ高まった。それから数年の後、伊予は家久の許しを得て加治木に移り、妻の由美とともに、ひそやかな日を送った。二人の間には子はなかった。そのせいであろうか、由美はもう三十五、六というのに、二十四、五にしか見えなかった。

高弟の東郷長左衛門が、谷山からめずらしく馬でやってきたのは、とある早春の昼過ぎであった。このころ、長左衛門は、家老にしてまた谷山の地頭である、伊勢貞昌の地頭代をつとめていた。伊予は久々の長左衛門のおとずれを心から喜んで、しばらくはよもやまの話に時のたつのを忘れていたが、急に膝を進めて、

「そうじゃ。よい折だから、今日はそなたに相伝をいたそう」

といい出した。門下随一の精励ぶりはかねてからみとめていたところである。思いがけない師の言葉に、長左衛門は喜びをつつみかねて、すぐ身支度にかかった。伊予はおのれの秘蔵の弓をとり出して長左衛門に与え、先に立って、庭にしつらえた的場に案内した。陽はすでに傾いていて、冷えびえとする。埒的に向った長左衛門は、じっと見守る伊予の目を感じ、気負い立って一の矢を放った。矢は快音を発して的のましんをつらぬいた。覚えず長左衛門の唇に会心の笑みが浮かぶ。二の矢もまたあやまたなかった。ところが伊予はにこりともしない。それのみか、かつてないほど目をけわしくした。

三の矢が吸いこまれるように的に突き立った時、なに思ったか伊予は、無言のままくるりときびすをかえした。とりつく島もないふきげんさであった。不審のおももちの長左衛門が、部屋にもどってくるのを待ちかまえて、伊予は吐き出すようにいった。

「思いのほかに未熟だな」

「は……」

「わしはそなたを買いかぶっていたようだ」

なにが未熟なのか、一向に納得がいかなかった。われながら見事に射たと、満足さえ覚えていたのである。

「どこが未熟と申されるのでございましょうか……」

「たわけ。それがまだわからんのか。相伝などとはもってのほかだ」

「……」

「かえれ。弓を学ぶ資格など、その方にはない」

あまりの暴言であった。師とはいえ、年もそんなには違わない。さすがに長左衛門もまっかになった。こめかみに、むくむくと血管がふくれあがった。それでも、言葉だけはていねいに、

「わかりました。いかにも今日かぎり、もはや弓の稽古はいたしますまい。そのかわり、入門の際にさしあげました誓紙は、おかえし願います」

「むろんのことだ」

突きかえされた誓紙を、わしづかみにふところへねじこみ、足音荒く立ち去る長左衛門のうしろ姿を、由美はおろおろして見送った。伊予は凝然と腕を組んでいる。言葉のかけようもなかった。いったいどうしたのか、由美にはさっぱりわからなかった。

「長左衛門は、もう白金坂のあたりにさしかかっただろうな……」

伊予がぽつんとそういいだしたのは、半刻ほどもたってからだった。そして、

「馬だから早い。すぐ風呂をたてろ。めしもたいておけ」

と、由美に命じた。わけがわからず、まじまじと見かえす由美に、伊予はいらいらしてまたいった。

「早くせぬか。長左衛門がもどってくる」

由美はまるで、きつねにつままれたようであった。なにがなにやらわからなかった。引ったくるように誓紙をとりもどして、足音荒く立ち去った東郷長左衛門が、またもどってくるなどとはとうてい考えられない。さっきの、しらけきった空気が、まだ部屋いっぱいに残っているような気がした。

「すぐ風呂をたてろ。めしもたいておけ。長左衛門がもどってくる」

伊予は同じことをまたくりかえした。どこまでもまじめなのである。由美は、わけがわからぬまま、夫にいわれる通りにした。

めしがたけ、風呂がわいたころ、表に馬のとまる気配がした。

伊予はすっと立ちあがった。客はまぎれもなく長左衛門であった。

「待っておった。まず風呂に入れ。めしもたけている」

伊予の声は嬉々としていた。長左衛門は無言のままである。黙々として風呂に入り、黙々としてめしをくった。そのあと、小半刻ほどして、また身支度にかかった。口は一切きかない。弓を持って庭におりた。空には、十二日くらいの月が出ていた。

伊予は、こんどは部屋に残り、目をつぶっていた。ややあって、庭で、弓弦の音が三度した。ほどなくもどってきた長左衛門は、伊予の顔を仰いで、はじめてにこりと白い歯を見せた。童べの表情に似ていた。

「うん」

と、伊予はうなずいたきりである。目が、かすかに笑っていた。

七

「まことにかたじけのうございました」

極意の秘巻を授けられた長左衛門は、しばらくして辞去した。かつかつと遠ざかっていく蹄の音に、伊予はじっと耳を澄ましていた。柔和な表情である。かつて、一本の雁股矢で、中馬孫之丞の首を飛ばせたはげしさは、どこにも見られなかった。満ち足りた顔である。だが、仔細に見ると、なんとなく暗いかげがきざしていた。

夜が更けて、すこし風が出ているらしい。裏手にある孟宗竹のさやぎが伝ってくる。ふと気づくと、目の前に由美の顔があった。

「わたくしには、ちっともわかりませぬ」

「二、三日のうちに、また長左衛門がくる。その時たずねてみるがよい」

「今教えて下さればよいのに」

伊予は笑って答えない。果たしてそれから四日目に、長左衛門がやってきた。あらためて相伝の礼を述べるためである。その時、待ちかねたように由美はわけをきいた。

「ははは、そのことでしたか」

さわやかに笑ってから長左衛門は、手短かに説明した。弓を学ぶ資格はないとののしられた時、一度は、腹の中がにえかえる思いをしたのである。わからなかった。どこが未熟といわれたのか、かいもく見当がつかなかった。

だれが二度と弓など手にするものか。人を愚弄するにもほどがある。腹だちまぎれに、誓紙をとりもどして帰途についたが、なんとしても、気になって仕方がない。

「いまいましいとは思いながら、なぜだろうと、みちみち思案いたしました」

長左衛門がそこまで語った時、かたわらから伊予が言葉をはさんだ。

「気がついたのは、白金坂にさしかかったあたりかな」

「その通りでございます。とたんに、顔から火が出る思いをしました」

思いがけなく相伝をいたそうといわれたせつな、長左衛門は虚心を失っていたのである。

「見事に射て賞められようと、気負い立ったよこしまな心を、たちまち見破られたのでございます」

由美には、ようやくわけがのみこめた。

この東郷長左衛門重尚は、伊予の死後、かわって日置流の指南にあたった。その子孫もまた、代々衣鉢を継いだ。

長左衛門が辞去したのは、夜になってからであった。今夜もまた、しきりに竹の葉ずれの音がしている。伊予は、妻と二人きりになると、急にいずまいを直して、

「由美、今夜はそなたに、折入って頼みがある」

といった。ひどく思いつめた表情である。その伊予のおもてをひたと見て、由美は静かに答えた。

「わたくし、覚悟いたしております」

伊予がなにをいおうとしているか、由美は早くも悟っていたらしい。さすがにいくぶんか、声がふるえた。

「嫁いできて二年目に、わたくしは気がつきました。病身で、一度不縁となってもどされたばかりか、石女とさえうわさのあった、わたくしのような女を、わざわざ妻としておえらびになったわけに……」

伊予はおどろいてなにかいおうとしたが、それをいわせず、由美は言葉を続けた。

「あなたは、子供を持つまいと考えておいでございました。と申すことは、はじめから薩摩に骨を埋めるおつもりはなかったのでございます。あなたは、いつの日にか、八丈島の宇喜多中納言さまのもとへおいでになるお覚悟でございました。それゆえ、子というきずなに身をしばられることを、なによりもおそれていらっしゃったのでございます」

まさにその通りであった。伊予はかえす言葉もなかった。由美はなおもいう。

「でも、わたくし、決してあなたをお怨みに存じてはおりません。いいえ、怨むどころか、お別れ申す日のくることを、ひそかにお待ちしていたのでございます。どんなにかつらく、悲しいことかと承知の上で……」

みなまで聞かず、伊予は、ほそい由美のからだを引き寄せた。そうだったのかと、なんども心でうなずいた。そして伊予は、遠い日の由美の涙を思い出した。由美の兄、伊集院東馬から、近習の面々を叱りつけて、みずからの乗馬小沢を与えてくれた、島津家久の情けを知らせられた時のことである。

「あの時、そなたは泣いた。うかつにもわたしは、今日まで気づかずにいたが、そなたは、このわたしが、島津の殿への義理にしばられてしまう、そう思って泣いてくれたのだ」

今はじめて、それがわかった。こんなにも心やさしい由美を、おれは、情け容赦もなく捨てようとしている。だが、捨てねばならぬ。心を鬼に、捨て去らねばならぬ。伊予は、われとわが胸にいい聞かせた。

八

あくる日伊予は、馬で鹿児島の城下へいった。

伊集院東馬の屋敷へ立ち寄って衣服をあらためると、ただちに登城して、島津家久のもとへ伺候した。

「殿ッ、玉川伊予、一生のお願いにございまする」

「なにごとだな」

「数々の御厚情を、無につかまつるに似て、心苦しいことながら、なにとぞお暇を賜わりたく……」

「宇喜多中納言どののもとへ参ると申すのか」

「御意」

秀家と別れて、もはや十余年の歳月が流れ去っている。この間に、つくすべきはすべてつくした。日置流の弓の奥儀は、家久と東郷長左衛門重尚に伝えたのである。

ただ、心苦しさは残った。近習の面々を叱りつけて、おのれの乗馬小沢を、惜しみなく与えてくれた島津家久の情けを知ったとき、この君のためならばと、一度は薩摩の土に骨を埋める決心はした。しかし、やはり旧主秀家のことを忘れ去るには忍びない。島津の殿は、よき家来あまた持っておわすが、宇喜多の殿はと、迷いに迷い、苦しんだこの年月であった。

「殿、お願いにございます」

伊予は、額を畳にすりつけた。島津家久は無言であった。

家久への義理はもとよりながら、妻の由美にも心は残った。哀れと思う。だが、由美は、はじめから、捨てられる覚悟であったといってくれた。それ故にこそ、なおさら不憫とは思うが、しかし去らねばならぬ。今、伊予の瞼には、渺々たる海の果ての八丈島にあって、絶望と無聊に責めさいなまれているであろう宇喜多中納言秀家の、いたましい姿がにじんでいる。

「殿、この通りお願いにございまする」

おもてをあげぬ伊予に、島津家久は、しばらく目をそそいでいたが、ややあって、大きくうなずいた。

「伊予、心のままにするがよい」

「かたじけのうございまする」

礼を述べて、いそいそと退出する伊予のうしろ姿を、家久は黙って見送った。

下城した伊予は、馬に鞭をあてて、いっさんに宙を駆けた。途中で日が暮れ、白金坂にさしかかったころ月が出た。

この前長左衛門は、どのあたりで気がついたのだろう。ひとりでに微笑がこみあげて、伊予は駒をとどめた。坂の右手の藪かげに、白い梅がひっそりと匂っている。由美に似ている。そう思った。

由美の、青みを帯びてほっそりしたからだと、いつも憂いをたたえたほの白いおもざしが、ぼおっと目に浮かんだ。昨夜由美は、女の命を燃やした。伊予との別れを、思い定めた故であったろうか。つれ添ってはじめてだったといってもよい。昨夜の由美は、緋牡丹のようであった。

由美との来し方が、つぎつぎに胸によみがえった。遅い月に照らし出されて、白金坂の一帯が海のように見えた。白い渦が巻いている。その渦の中から由美の声が聞えた。忍び泣きに似ていた。藪かげの白梅が、不意に由美の顔になり、またもとにもどった。

おれが薩摩を去ったにしても、あとにせめてややなといてくれたら、由美もいくぶん寂しさをまぎらすことができるだろうのに。

そう思った時、おーいと、遠くで覚えのある声がした。空耳ではなかった。蹄の音がしだいに近づいてくる。おーいとまた声がした。伊集院東馬であった。東馬は馬をとめ、汗みずくの顔を伊予の方に向けた。伊予は、本心をまだ東馬に打ち明けてはいなかった。東馬の方が先に口をきいた。

「火急の用と殿に呼ばれた」

「それであとを追ってこられたのか」

「いや、殿はただ、伊予が薩摩を去ると仰せられただけだ。呼びもどせと仰せられたわけではな

い」

「では、なんで追ってこられた」

東馬は、思いがけないことをいった。

「伊予、おぬしは知るまいが、由美は一度、ややを持った。むろんおぬしの子だ。だのにあいつは、せっかく授かった宝を、医者に頼んで、おぬしに悟られぬよう……」

五年前のことだと、呻くように東馬はいい足した。伊予は真っ青になった。いわれてみると、たしかに思いあたる。一月ほど、気分がすぐれぬからと、由美が床に臥し、伊予の愛をこばんだことがあった。ひどく顔が青かったのを覚えている。今思えば、あの青さはただごとではなかった。そうだったのか。

――あなたは、子というきずなに身をしばられることを、なによりもおそれていらっしゃいました。

昨夜の由美の声が耳をうった。

「そのような由美を、おぬしは捨てることができるのか。いいたいのはそれだけだ。おれはこれでかえる」

伊集院東馬は、くるりと馬の向きを変えた。伊予のからだから、音を立てるように、がくっと力がぬけた。強い匂いを放っている藪かげの白梅が、急にかすんで、また由美の顔になった。

鶴姫

一

「途中でしけに会って、平左衛門の船など沈んでしまえばよい」

鶴姫はそう思った。一生にただ一度のわがままなのに、一途な鶴姫の願いを、家老の伊勢平左衛門が頑として聞き入れなかったのである。

「聞いてくれないなら死んでやります」

口惜し涙を流して鶴姫がいっても、あわてるどころか、

「死にたければ、勝手に死ぬがようごわそう。決してとめだてはいたしもはん」

と平気な顔をしていた。憎いといったらない。よくひびく太い声がまだ耳にこびりついている。その平左衛門は今、肥前唐津へ向う船の中だった。

慶長十二年秋の末である。

鶴姫はことし十七、島津惟新入道の妾腹の子で、当主島津家久にとっては異腹の妹にあたった。この夏鶴姫は、肥前唐津の寺沢家から、志摩守広高の嫡子式部の室にと懇望されたが、その時の使者は天草城代高畑新蔵で、こちらからはおもに、家老伊勢平左衛門貞成が応対にあたっ

た。

大身の島津家と比べて寺沢家は十二万石、そのため家中には、あまり不釣合に過ぎるという声も聞かれぬではなかったが、島津家としては断りかねる義理があった。

というのは、関ケ原の役に西軍に与した諸侯の多くが、改易あるいは減封のうきめを見た中に、島津家が格別の咎めを受けず本領を安堵することができたかげには、寺沢志摩守広高の並々ならぬ骨折りがあったからである。それに当の鶴姫にも異存がなかったので、島津家では内諾を与えて使者をかえした。

婚礼はだいたい明春早々の予定だったが、秋になると、鶴姫に従う家臣や侍女の顔ぶれはほぼ内定した。それと前後して、正式の使者が寺沢家につかわされることになった。ところが、いよいよ使者を立てるまぎわになって、突然鶴姫が心がわりしてしまったのである。

「十二万石の寺沢家では不服です。死んでも輿入れはしません」

といいだした。ほかにもいろいろと理由にならぬ理由を鶴姫は並べたてた。単なる口実に過ぎないことははっきりしていたが、ほんとうの理由がなんであるかは、全然見当がつかなかった。老臣たちや、おつきの者が、さまざまになだめすかしても鶴姫はいっこうに聞かぬ。同じことをくりかえすばかりだった。

「寺沢家が十二万石なることははじめからわかっております。それを承知で一度は御承諾なさった筈、今になっていやになったでは通りませぬ」

「いいえ、あのときはあのとき、今は今です。それに、わたしはこの薩摩を離れたくありませ

ん――」

鶴姫はあどけなく笑って見せた。童女の表情に似ていた。まるで冗談としかとれないようである。けれど、その笑いは、テコでも動かぬ強固な意志で支えられていた。

「姫、ちとわがままが過ぎもすぞ」

「どうして」

「たとえ内諾にもせよ大名と大名の約束、いまさら反故にはできませぬ」

すると鶴姫は急に、ひどくいたずらっぽい顔になった。

「いつからそうなったのでしょう。ついこの間までは、大名同士の約束ごとほどあてにならないものはなかった筈なのに」

「は……」

なんのことか、とっさにはわからずけげんなおももちでいると、

「そらとぼけるのはおよしなさい。そうではありませんか。わたしが生まれる少し前、元亀天正のころまでは、神文とりかわした誓約さえも平気で踏みにじりました」

この世に合戦の絶え間もなかったのはみなそのためではなかったかと、鶴姫はいった。

「困ったことを申します」

島津家久は、あとで父の惟新入道と顔を見合わせて微苦笑した。渋い顔で委細を告げる老臣のてまえは、さすがに眉をけわしくして見せたものの、その実さして立腹しているわけではなかったのである。惟新入道も同じであった。

今でこそ剃髪して隠居の身であるが、惟新入道は前名島津義弘、朝鮮役や関ヶ原の合戦に勇名をとどろかせたかくれもない武将である。その子家久もまた、父譲りの剛直な薩摩気質の持主であった。ほかの姫であったら、ただちに呼びつけ、頭ごなしに叱りとばしたことだろう。しかし、鶴姫にだけは不思議に腹が立てられなかった。

物ごころつくやつかずで、生みの母に死別するという薄幸なおいたちだったが、それが天性なのか鶴姫は、小さい時から素直でまた快活だった。暗いかげなどどこにもとどめていなかった。いつでも、ふりあげたこぶしのやり場に困るような顔をしていた。十七になった今でも、童女のように天真爛漫なところがある。

そのかわり時としては、人をあっといわせるようなこともしでかした。十四の春だったろうか、愛甲新七という若侍に、恋歌らしいものを届けたりしたことなど一例といえる。ほかの者に悟られぬようにといったかけひきは少しもなかったから、すぐ人々の知るところとなった。叱るに叱られず、大笑いですませたことを惟新入道は今も覚えている。

そんな鶴姫だったから父はむろんのこと、異腹の兄である家久までが、他のどの姫よりも深くいつくしんできたものだった。

「おそらく鶴姫にとっては、一生にただ一度の無理でございましょう」

できれば、無理と承知で聞きとどけてやりたい家久だった。とはいえ、容易ならぬことではある。子供の約束ではない。内諾を与えたに過ぎないとはいうものの、大名と大名がとりかわした約束なのであった。

替玉をやるわけにもいかぬ。はじめから鶴姫という寺沢家の申し出だった。しかも使者の高畑新蔵が、鶴姫にはそれとなく一度会ってもいるのである。かりにも、主君に一城を預かるくらいの男であれば、姑息な手段を弄しても、一目でそれと見破らずにはいないだろう。

「今になって鶴姫が、急に心がわりしたのはなぜだろうな」

つぶやくようにぽつんと惟新入道はもらした。

「それがわたくしにもとんと解せないのでございます」

何度問いただしても鶴姫のこたえはきまっていた。理由にならぬ理由をくりかえすばかりなのである。

「さて、なんとしたものか」

惟新入道は、とつおいつ思案のていであったが、ややあってまた老臣の一人を召し寄せると、いくらか浮かぬ顔で、

「もはや変改はならぬ。――さよう鶴姫に伝えい」

と命じた。

二

さすがに鶴姫の胸は重い。家中の人々の目は、いずれも鶴姫に冷たくよそよそしかった。

「御鍾愛をよいことに、あまりにわがまま過ぎる」

一同の者が、そうとしか考えていないらしいのである。鶴姫に仕えている人々でさえ、何人か

をのぞけば、あからさまに口にこそ出さないものの、例外ではなかった。無理ないとはいえる。だれの目にも、しようのないわがままとしか映らぬであろうことは、鶴姫自身知り過ぎるほど知っていた。

最初から無理強いの縁談ではなかった。鶴姫の承諾をまってのち、はじめて寺沢家の使者に内諾が与えられたことである。

それを、今になっていやだなどといいだしても、通るものではない。しかも、納得のいく理由などなにもなく、気まぐれから出たこととしか考えられなかった。

だが、鶴姫にすれば理由はある。だれにももらさぬだけである。鶴姫のほんとうの心を知っているのは、多くの侍女の中でいちばんお気に入りの、志野がただ一人であった。

——わたしのために、姫さまは心にもないわがままを遊ばす。

そう思えば、心苦しさにいたたまれぬ。鶴姫のわがままは、決して鶴姫みずからのためになされたものではなかった。すべて志野のためのはからいなのである。志野は十九、薬丸伊平太の娘であった。

半年あたり前に縁談がととのっていた。相手は家老伊勢平左衛門の家来で、瀬戸口主税という若侍だった。もともと他国者だが、故あって主家を浪人し、先年いささかのしるべだった平左衛門を頼って、この薩摩へやってきたのである。

陪臣とはいえ、文武ともに抜群の若者だったから、他国者ということも構わず、伊平太の方からぞっこん惚れこんで、ようやく話をとりきめたものだった。

宿さがりもままならぬ身とあって、これまで主税とは、ゆきずりに一、二度目を見かわしたことがあるきり、そのあとは、言葉をかわすなどむろんのこと、顔を合わせる折さえめったにない志野だったが、その胸には、いつからとなく、やがては夫となる人というだけではない、男への強い思慕の情が芽ぐんでいた。またそれが、主税の心にも十分通じているらしいことを、鶴姫はそれとなく気がついていた。

そこへ鶴姫自身の縁談だった。そうなれば鶴姫のお気に入りとだれからもみとめられている志野が、唐津への供に加えられるであろうことはいうまでもない。それ故鶴姫は、寺沢家の使者が鹿児島の城下を去ると同時に、なにかの口実をもうけて、志野に暇を出すことにしたのである。

しかし伊平太は、なんとしても志野を引きとろうとはしなかった。

「鶴姫さまお輿入れがきまる以前ならばともかく、今となっては絶対に引きとるわけには参りませぬ」

と、頑として聞き入れぬ。はては、

「いまさらお暇を下さるというのは、志野になんぞ落度あってのことと思われます。いいや、そうとしかとれませぬ」

たってお暇を下さるならば、ただちに娘を成敗するとまでいい切った。頑固だし、一徹だし、伊平太はそれをしかねぬ男である。ほんとうのことを明かせば、なおさら聞く筈がなかった。

もとより、だれの耳に入れてよいことでもない。うかつにもらせば、伊平太はますます依怙地になるに違いなかった。三年も前の鶴姫だったら、おそらくなんのためらいもなく、

「志野がかわいそうですから」

とはっきり言ったことだろう。だが、今の鶴姫にはそれができなかった。童女のような世なれぬ鶴姫にも、だれに教わったともない世間の知恵が身についている。かりそめの一言が、どのような波紋を起こし、またどのような結果を招くか、はかり知られぬ武家の世界のおそろしさを何度となく、目にし耳にしてきてもいる。

伊平太とて、わが子がかわいくないわけではないだろう。志野の幸せを願っていない筈はあるまい。しかし、素直にそうさせない何かがあることを鶴姫は察していた。

——本心をあざむいて、偽りの心に生きること。それが侍の道なのか。

ふと、そう思う。本心をあざむいているのではない。それを二つない真実と信じているのだと人はいうかもしれないが、もしそうだとしたら、なんとかなしいことだろうとも鶴姫は思う。

——伊平太のバカバカ、バカ。

鶴姫は叫びたかった。どうやら志野も、一切をひそかにあきらめているらしい。主税への思慕を断って、鶴姫のお供をと思い定めているのが、じいんと痛いほどこちらの心に伝わってくる。

——あきらめさせてはいけない。

鶴姫は一途に思いつめた。寺沢家との縁談さえこわれたら、志野は女の幸せを手にすることができるだろう。志野から幸せを奪いとってはならない。ひたむきに思いつめた。

だからこそ鶴姫は、自分一人のわがままと見せかけて、寺沢家への輿入れをにわかに拒む気になったのである。

「いけませぬ。志野のために、そのようなわがままをおっしゃってはなりませぬ。志野の心はとうにきまりました」

鶴姫のやさしい思いやりを知った時、志野は涙さえ浮かべて訴えたが、

「いいえ、そなたは何も心配することはありません。わたしが、きっとうまくやってみせます」

と、鶴姫の決心は変らなかった。

「女にとって、いとしい方と別れることが、どんなにかなしいか、どんなに苦しいか、鶴姫はよく知っています」

ともつけ加えた。その言葉が何を意味しているか、志野にはすぐわかった。

鶴姫は、愛甲新七のことを思い出していたのであった。新七は小姓組に属し、身分は高くないが文武に秀でた若侍として知られていた。その新七に、鶴姫がほのかな思慕の情を寄せたのは十四の春のことである。

本丸の広庭で武芸の仕合が催された時、入れかわり立ちかわりかかってくる腕自慢の若侍たちを、つぎつぎに苦もなく打ちすえる愛甲新七の、見るからにりりしい姿をかいま見たのがはじまりだった。

一月とはせぬうちに新七の姿は、鶴姫の胸の中で大きくふくらんでいった。相手が一門か、もしくは一所持の者でもあったら、あるいは鶴姫の思いも実を結んだかもしれないが、不幸にして新七は、文武に秀れてこそいたが、鶴姫とははるかな身分違いだった。

しかし鶴姫は、それを承知で、ある時宿さがりの侍女を使って、恋歌めいた稚拙な一首を、愛

甲新七のもとへ届けさせたのである。返事のあろう道理はない。鶴姫はさらに歌を贈った。都合三度に及んだ時、ぱっと城下のうわさになった。

大胆といえば大胆だし、無知といえば無知だが、ありようは鶴姫の天衣無縫さがさせたことだった。いくぶんのいたずら気がなかったものでもない。それが思いも寄らぬ波瀾を呼んだ。いかにも鶴姫らしいことよと、惟新入道も兄の家久も、大笑いですませてくれたが、鶴姫はあとでおつきの老女に、

「はしたないことを遊ばしてはなりませぬ」

と、したたか叱責された。しかもその夜のうちに、老女は責めをおって自害してしまったのである。使いをつとめた侍女は親もとへもどされた。

そればかりか、愛甲新七もまた非業の死をとげた。表むきは急病と披露され、惟新入道や家久はいまだにそう思っているが、実は血気の二才衆が新七に呼び出しをかけ、

「おはんがたるんどるから、つけ文などされるとでごわすぞ」

と面罵し、寄ってたかって詰め腹切らせたものであった。

「よし、たるんどるかたるんどらんか、よう見ちょれ」

叫ぶが早いか愛甲新七は、いきなり前をくつろげ、きりきりと立ち腹切ったという。鶴姫は後日それを知った。その時の驚愕と悲歎が、いえがたい傷となって、鶴姫の胸に今も残っている。自分が招いたことだけになお切なかった。

年もわずか十四だったし、恋などと呼ぶには、あまりにもたわいないつかの間の夢ではあった。

――それでいてさえ、どんなにかかなしかったのに。

つぶらな鶴姫の目が、しっとりうるんでいた。

三

――一生にたった一度のわがままだもの、きっと聞き届けて下さる。

鶴姫は、疑いらしい疑いを持たずそう信じていた。父や兄がいかに鶴姫を愛しているかを、鶴姫自身よく知っているからである。なるほど惟新入道にせよ、家久にせよ、一徹ではあった。しかし、火の出るようなその一徹さは、鶴姫に対する場合にかぎって、かえってどこかで、盲目じみた強い愛情とすりかえられているもののようであった。

それに、父や兄にどれほど愛されているかを、ひそかにためすような思いも、もちろん鶴姫の胸に宿されていたに違いない。

が、鶴姫の願いはしりぞけられた。

「もはやなんともならぬ」

そういう惟新入道と家久の意向がほどなく鶴姫に伝えられたのである。

それでも鶴姫は納得せず、二度、三度と押しかえした。もともと女の意志など、路傍の石ほどにも認められぬ時代だった。鶴姫とてわきまえている。わきまえていながらなお引きさがらなかった。はたのものがはらはらさせられた。

数日後、こんどは家老の伊勢平左衛門貞成が、足音も荒々しくやってくると、噛みつきそうな顔で鶴姫をにらみつけ、

「この期に及んで、わがままもほどほどになされい。たとえ大殿様、殿様が御承知遊ばしても、この平左が絶対に許しもはんぞ」

と高飛車にきめつけた。よくよく腹が立っていたものだろう。にこりともしなかった。とりつく島もないのである。鶴姫は今まで、平左衛門をおそろしいなどと感じたことは一度もなかったが、今日ばかりは口もきけない気がした。

平左衛門はことし三十九の男ざかり、ひげの剃りあと青々として、見るからに精悍な風貌の持主である。驍勇を謳われた新納武蔵守忠元の外孫にあたり、弟伊勢兵部貞昌とともに、島津家柱石の臣の一人であった。兄は武をもって聞え、弟は文に秀れ、伊勢兄弟の名は他国にまで知れ渡っていた。

とはいえ平左衛門は、あながち武勇一辺倒でもない。政治的手腕も決して凡庸ではなく、あらゆる物事を、てきぱきと遅滞なく処理した。そんな平左衛門を、実をいえば鶴姫は、好もしいとさえ感じていたのである。もちろん、いとしいとか恋しいとかいう思いとはほど遠いが、たのもしい男であった。

その平左衛門が、今日ばかりは鬼のように見える。いかつい顔だちながら、いつもは笑いを忘れたことのない男なのに、今はまるで全身を甲冑に固めてでもいるように、にこりともせず、なにかいいかえしでもすれば、だれかれの容赦なく、いきなりなぐりかかってきそうであった。

あまりの見幕に、志野はもとより、ほかの女たちもすっかり色を失っていた。とりなすことも忘れていた。

「では平左衛門は、どうあっても聞いてくれないのですね」

勇気を出して、鶴姫はやっとそれだけいった。平左衛門さえ動かせば、あとはなんでもない。父の惟新入道も兄の家久も、きっと平左衛門の強引な主張に押し切られたのに違いない——鶴姫はそう思った。

平左衛門は相変らずむすりとしている。鶴姫の存在など無視してかかっていた。鶴姫がなんといっても、てんでとり合ってくれようともしない。

——いっそ、ほんとうのことをいってやろうか。

新参ながら瀬戸口主税は、平左衛門がもっとも信頼している家来だった。志野との縁談がととのっていることだって、平左衛門は知っているだろう。

けれど、やはりそらおそろしかった。頑固な薬丸伊平太のことを考えると、そうすることで、思いもかけぬ不幸が、志野にふりかかってきそうだった。

——あくまでわたしが、悪者になるより仕方がない。

鶴姫はふたたび心をきめて、さまざまに平左衛門をかきくどいた。平左衛門は耳をかそうともしない。まるで壁に向っているようなものだった。鶴姫の目には、口惜し涙がにじんだ。

「どうしても聞いてくれないなら、死んでやります」

いくら平左衛門でも、こういえばきっと少しはあわてるだろう。鶴姫はぬれた目で、じっと平

左衛門を見つめた。こんどいやといえば、ほんとうに死にもかねない目の色だった。

平左衛門は眉も動かさぬ。ずばりといってのけた。

「死にたければ、勝手に死ぬがようごわそうな。決してとめだてはいたしもはん」

まったくにべもなかった。そして、

「唐津への使者には、この平左衛門が立ちもすぞ」

と太い声でいい残すと、唇を噛みしめ、うらめしそうに見送る鶴姫をしりめに、ゆっくりと去っていった。

寺沢家への正式の使者として、伊勢平左衛門貞成が、特別に船をしつらえ供の人数をそろえて、海路肥前唐津へ向ったのは、それから三日目のことであった。

四

「雨も降れ、風も吹け。わからずやの平左衛門など、船もろとも海の藻屑となってしまうがいい」

船が出た日の夕方、縁に立って、次第に暮れていく空を見あげながら、鶴姫は本気でそう思った。平左衛門が、島津の家にとって、どんなにかけがえのない存在であるかなどということは、少しも考えなかった。ただ憎らしかった。

空はいつもより早めに暗くなった。雲が出ている。雨をふくんでいるらしい、黒く重い雲だった。まるで鶴姫の心の中を見すかしでもしたかのような空模様であった。その夜鶴姫は、暴風雨

に翻弄されて、平左衛門の船が波に呑まれる夢を見た。夢がほんとうになればよい、正夢であればよい——夜明け近く目をさました鶴姫はひそかに祈った。同じその船に、瀬戸口主税が乗りこんでいることさえ、すっかり忘れていた。

「船が沈めば困りますのに」

あとで志野にそういわれて、ようやくそれと気がつき、一夜で持ち直した青い空に思わず胸をなでたことだった。

日がたつにつれて、鶴姫はひどく無口になった。おおらかに美しいおもてに、暗いかげが宿されている。が、あきらめたわけではなかった。勝手に話をきめてくるならくるでもいい。平左衛門をどこまでも困らせてやる。たとえ死んだって唐津へはいくものか。ひたすら思いつめている風だった。

そんな鶴姫を、さすがに志野は見るにしのびない。これまで、もって生まれた素直さを、だれにも愛されてきた鶴姫が、自分故に、家中の侍どもはもとよりおつきの老女やほかの侍女たちにまで、あまりに気ままをなさると非難の的にされることを思うと、胸がちぎれるばかりだった。だからといって、志野がちょっとでもそれを口にすると、鶴姫はなおさら顔をくもらせた。

とかくするうち、予定より一、二日遅れ、船がかえった。船は信じられぬような意外な知らせを城下にもたらした。みずから使者に立った伊勢平左衛門が、乱酔して、唐津の城中でとりかえしのつかぬ失態をしでかしたあげく、縁談はたちまち破約となり、平左衛門自身は、帰途天草において、高畑新蔵のため討ち果たされたという。

さてこそ——人々は顔を見合わせた。使者に平左衛門みずから立ったと聞いた時、期せずして胸をかすめた危惧を思い出したのである。平左衛門は酒癖が悪かった。島津の家を背負う知勇かねそなえた男にして、唯一の短所であった。

もっとも、おのれ自身そのことをよくわきまえてはいた。それ故、かねて身をつつしむことときびしく、ここ久しく酒に乱れたことはなかった筈だった。だから人々は、ふっと胸をかすめた危惧の思いを、まさかと打ち消したくらいである。今では酒乱というわささえ、にわかには信じられないまでになっていた。それでも万一をおもんぱかり、

「兄は酒が入れば別人になる。ぬかりはないと思うが、くれぐれも気をつけるように」

伊勢兵部貞昌から、供の者には再度にわたって念を押していたというのにこの始末であった。供の者一同は、平左衛門の遺骸を守って鹿児島につくと、ただちに閉門を命ぜられた。

平左衛門がみずから使者に立ったことが、鶴姫にとってはかえって幸いになった。皮肉といえば皮肉である。

城下にはいろんなうわさがつぎつぎに流れた。それらはいずれも、平左衛門にとって香んばしいものではなかった。

「したたか酒をくらって伊勢どのは、大藩をかさに、聞くにもたえぬ暴言を吐かれたそうな」

「大事なお使者をつとめながら、一国の家老ともあろう者がなんたること」

「しかも天草で、高畑新蔵に斬り立てられた際には、あわてふためいて逃げまどい、見られたざまではなかったというではないか」

うわさは容赦なく死者に鞭うった。供に従った人々は沈黙を守った。使者の無礼を陳謝する書状が、唐津へ発せられた。それらのうわさを耳にして、志野は人知れず胸をいためた。口々に平左衛門を責める声にまじって、

「供の者はいったい何をしておったのだ」

「あれほど酒には気をつけいと、念を押されておりながら」

と、供の者の油断をなじる声が聞かれたからである。それに悪いことには、船中に酒を持ちこんだのが瀬戸口主税だという、このところもっぱらの取沙汰だった。

酒はたしかに主税が持ちこんだのである。船が坊の岬の沖を通るころ、それに気がついた人々は、眉をけわしくして、

「軽率なことをしては困る。御舎弟さまから厳重に申し渡されたこと、おぬしも知っている筈だ」

と主税に詰寄ったが、

「許してやれ。主税に罪はない。わしが無理にいいつけたのだ。それに、心配はいらぬ。めったなことで、酒に性根を奪われはせぬつもりだわ。酒乱酒乱とその方らはいうが、このところ乱れた覚えはとんとないぞ」

平左衛門にそういわれると、それ以上責めるわけにもいかなかった。なるほどその通りではある。平左衛門自身、おのれの酒癖をよくわきまえて、酒の席でもつとめてひかえ、ここ数年来、一度も乱れたうわさは聞かれなかった。結局、せっかく持ちこんだもの、いまさら海に捨てるに

も及ぶまいということになった。それがわざわいを招いた。

「いかん」

供の者が色を失って顔を見合わせたのは、いよいよ今日唐津につくという日、船が波戸岬の沖合いを過ぎるころだった。それまで胴の間で瀬戸口主税を相手に、ちびりちびり小さな杯の底をなめるようにしていた平左衛門が、いつの間にとり出したのか、大杯を傾けてぐいぐい酒をあおりはじめたからである。

「なに、兵部が酒をつつしめというた？　たわけめ、ならば兵部をこれへつれて参れ、ぶった斬ってくれるわ」

気がついた時はもう遅い。ふだんでも鋭い目がぶきみにすわり、顔は死人のように真っ青になっていた。こうなれば意見を加えるどころか、供の者はおそれて寄りつこうともしなかった。なりゆきにまかせるばかりである。平左衛門の荒れようが、どのようにすさまじいか、一同が骨身にしみて知っているからであった。

船の前方に、別名を舞鶴城とも呼ばれる唐津城が、十二万石の小大名には過ぎた、壮麗優美な姿を見せはじめたのは、それから間もなくのことであった。秋の陽が大きく傾きかけていた。

五

「遠路はるばるのお越し、まことに大儀に存じます」

寺沢家の家老高畑新蔵は、あわただしく衣服をあらため、薩摩の使者伊勢平左衛門貞成を、唐津城使者の間に迎えた。船が着いたのはすぐ番所から知らせがあったが、もう日も暮れかかっていたし、多分城中へ入るのは明朝のことだろうと思っているところへ、雄藩の家老としての格式も堂々と、使者の一行が乗りこんできたのである。

平左衛門は傲然としていた。鄭重な高畑新蔵の挨拶を受けても、ろくに会釈もかえそうとはしない。この夏薩摩へおもむいた折の重厚さとは、うってかわったその態度に唖然となり、これはと内心に眉をひそめる新蔵の顔へ、ぷうんと酒のにおいがふりかかった。

「あるじはいささか酒を過ごしております。なにとぞよしなに」

さっき気をきかせた供の者に、こっそり耳うちされていたから、当惑はしながらも新蔵は、つとめて笑顔をつくり、

「いつぞやはお国にて、いかいお世話に相成りました」

と、この夏の礼を述べた。なお平左衛門はこたえない。眼中にもおかぬていだった。供の者はらはらした。

船が港についた時、平左衛門はすでに足もとも定まらぬまで酔いつぶれていた。だからそのまま船にとどめて、一切は明日のことにとはかったのだが、なんとしても平左衛門は聞き入れぬ。はては大剣をふりまわす始末にやむなく城中へ乗りこんだことである。お気に入りの瀬戸口主税にさえ、どうにもならぬ様子であった。

「今日は定めしお疲れでもございましょう。まずゆるゆるとお休みあって、志摩守には明朝にでも」

新蔵が気を使い使いそういうと、平左衛門ははじめて口をひらいた。
「さような暇はない。今日ただ今らちをあけていただこう」
「しかし……」
「みどもは島津家にとってはなくてはならぬ人間、一日たりとも、のんべんだらりとしているわけには参らぬのだ」
「御家老……」
「ええい、その方らはひかえておれ」
供の者を叱りつけておいて、また新蔵に向き直り、
「さ、即刻らちをあけてかえりたい。案内さっしゃい。それとも志州公は、明朝でなければ会いとうないとでも申されるのか」
とネチネチからみだした。扱いかねて困惑する新蔵へ、供の者は、
「よしなに」
「なにとぞよしなに」
と目で訴えるだけであった。新蔵は委細を広高に告げてはかった。広高はかまわず通せという。
供の者はみな控えの間に残し、平左衛門は単身大広間へ通ったが、広高の前に出ても、挨拶の言葉一つ述べるでなく、相も変らずそらうそぶいているばかりである。あたりはにわかに殺気だった。

「使者にいかなる無礼な振舞があろうとも、かならず短慮はつつしめ」
前もってそう申し渡されてはいるものの、広間につめている、おもだった寺沢家の家臣たちの目もいちようにけわしくなっている。傍若無人の使者の態度に、
「伊勢平左衛門と申すか、遠路の使者大儀であった」
仕方なく広高の方から、苦い顔をしながら言葉をかけた。と平左衛門は、しばらく酔眼をすえて広高を見つめていたが、
「わざわざ薩摩より参ったのは余の儀にあらず、ちとおたずね申したきことがごわして」
じりりと膝を進めた。
「はて……、何事であろうな」
「されば」
酒くさい息をぷうっと吐き、
「御当家とわが島津家のあいだに、縁組相ととのいたりとの取沙汰このところ世上にしきりでごわすが、これは御当家にて吹聴なされたものにごわそうか」
ずばりといってのけた。
「なんと申される」
高畑新蔵もさすがに気色ばんだ。
「もしさようならば近ごろもって迷惑至極」
「黙らっしゃい」

新蔵の端正なおもてに勃然と朱がみなぎった。いかに酒の上であろうとも聞き捨てにできることではない。広高の世子式部と鶴姫の縁組は、新蔵みずから薩摩へおもむいてとりきめてきたことである。応対にあたったのはまぎれもない伊勢平左衛門その人であった。にえかえるような腹の中を押さえながら、高畑新蔵はそれをなじった。

「さような筈はない」

「これは異なこと。みどもはおてまえの口からしかとうけたまわった」

「聞き違いであろう」

「いうな。子供の使いではないわ」

「結果においては子供の使いと相違ない。そのうちに考慮いたそうとみどもはこたえた。考慮いたそうとは、お断り申すということじゃ。島津家にとって、義理ある志州公よりの申し出とあっては、あからさまにお断りするともこたえかねたまで」

「いいや、たしかに承知とうけたまわった。やせても枯れても、天草一城をあずかる高畑新蔵、聞き違いなど絶対にせぬ」

「ではうかがいたい。志州さま御知行はいかほどかな」

「む――」

「島津家は七十二万九千余石、寺沢家はわずかに十と二万石、それを釣合う縁と考えていられるものならば、聞き違いもまた無理からぬことではある」

「……」

新蔵はわなわなと身をふるわせた。覚えず脇差の柄に手がかかる。が、新蔵はかろうじて屈辱に耐えた。ここで平左衛門を討ち果たせばことの破れ――島津家と紛争をかもせば主家の大変となる。ただ唇を噛みしめた。その新蔵に、何もいうなと目くばせして、志摩守広高はおだやかにいった。

「使者のおもむき、委細相わかった。いかにも当家重々の不調法」

その夜、平左衛門は泥のようになって眠った。目をさましたのは、あくる日、陽も高くなってからである。

「御家老、われら一同、控えの間にあり、生きたそらもござりませなんだ」

前日大広間での酔態のあらましを、供の者に聞かせられ、平左衛門はぴくりと眉を動かした。それが供の者には、酒の酔いもさめはてた顔に見えた。

「主税を責めるでないぞ」

平左衛門はぽつんともらした。

高畑新蔵がやってきたのは、しばらくたってからであった。できるものなら、なんとか今一度話をもとにかえしたいと、前夜の怒りを押さえて顔を出したのである。酔うて覚えがないといえば、そのままにすます腹だった。なにげないていに新蔵はたずねた。

「昨夜はよくおやすみになりましたろうか」

「おかげをもって」

平左衛門は軽く会釈をした。この分ならうまくいくかもしれないと、新蔵はいくぶんほっとし

た。

「昨夜は少々、酒がお過ぎのていに見えましたが」

微笑を浮かべてさぐりを入れた。

「いかにもひどく酔っておりもした」

――すんだ。これでよい。

新蔵はとっさにそう感じたのだが、いけなかった。平左衛門はきらりと目を光らせると、

「酔うてはいたが、性根まで失うてはおりもはんぞ」

といい放った。その一言で一切ががらがらと崩れ去ったのである。新蔵はそれでも怒りを見せなかった。

「このたびのこと、みども重々の不調法、なにとぞ、惟新入道さまならびに中将さま御前体、よしなにおとりなし下さるよう」

ていねいに詫びたあと、

「この夏、お国で御厄介になった返礼、お茶なと差しあげとう存じます。おかえりの節、なにとぞ天草にお立ち寄り下されば、この上もなき幸いにございます」

といった。新蔵は、一船早く唐津をたった。胸に一物あったのである。

六

「天草に立ち寄るのは無用になされよ」

志摩守広高はしきりにとどめたという。平左衛門は聞かず帰途船をつけて天草に立ち寄った。そして、高畑新蔵とその家臣大津喜右衛門に斬られた。大津喜右衛門は、即刻瀬戸口主税が討ち果たした。高畑新蔵もまた、ただちに割腹して果てたのである。

その折平左衛門が、あわてふためいて逃げまどい、見られたざまではなかったらしいという、もっぱらな城下のうわさであった。

「さようなことはない」

立腹した惟新入道は、いったん知行地の加治木へ送られた平左衛門の遺骸を、わざわざ帖佐の平松城まで運び寄せた上、伊勢兵部貞昌立会のもとに、みずから検分したのである。

棺の蓋がとられると、見苦しく逃げたというわさが、根もない中傷に過ぎないことがすぐ判明した。

平左衛門の全身はなますのごとく、しかもことごとく向う傷であった。両手の指のまたはほとんど切り裂かれ、彼が真っ向から素手で立ち向ったことを、あますところなく物語っていた。

「平左……」

惟新入道はぼろぼろと涙をこぼした。

高畑新蔵の腹のうちは承知の上で、平左衛門はわざわざ船を天草にとどめたのである。供には瀬戸口主税一人をつれ、天草の富岡城に入った。

ただちに書院に案内され、主税は次の間にひかえていた。あたりはひっそりと静まっている。点前の気配がうかがわれた。

そのうち急に主客の声が高くなり、つづいて、新蔵の声がはっきり聞えた。

「唐津城中の雑言覚えたか」

と、同時に、ダ、ダ、ダ——と、二つの足音が乱れた。主税は動かなかった。動くなと命ぜられていた。

平左衛門は無腰であった。最初の脇差の一撃で額を割られた。素手で防いだ。見る見る全身は血だるまとなったが、それでもひるまずあくまで素手で立ち向い、ついに新蔵の脇差を奪いとった。

大刀をとりに引きかえす新蔵を、追いかけようとして、平左衛門は何かにつまずいた。起きあがろうとするところを、異変を悟って駆けつけた新蔵の家来、大津喜右衛門が真っ向から斬りさげた。

主税ははじめて書院に躍りこみ、一太刀に喜右衛門を斬り伏せたのである。そして高畑新蔵に、

「平左衛門にとどめを」

といった。

「うっ」

新蔵は悲痛な呻き声をもらした。この時、ようやく伊勢平左衛門の心中を悟り得たのである。

——不覚、不覚、不覚。

新蔵は真っ青になっていた。

時をおかず手早く衣服をあらためると、薩摩の船の碇泊している浜辺にいき、そこで、見事に腹をかっさばいた。むろん、志摩守広高に累を及ぼさぬためである。また一つには平左衛門への義理であった。

船の中に酒を持ちこんだ主税に対して、はげしい憎悪を燃やしていた供の者はここに至って、一切を悟ったのだった。

鶴姫はくちなしのように青ざめ、庭の隅に立ちつくしていた。足もとに乱れている萩の花を、うつつもなくむしり散らしていた。父の惟新入道にさっき、思いも寄らぬことを知らせられたからである。

庭に出て鶴姫が、秋の陽ざしの中につくねんと立っているところへ、木戸が静かにあいて、十徳を羽織った惟新入道がそっと入ってきた。鶴姫はにこっと笑って見せた。が、その笑いはすぐに消されてしまった。

惟新入道の顔に、なにやら暗いかげがさしていたからである。

「どうかなさいまして……」

「鶴姫よ」

「……」

「わしはなにもいわなかったが、平左はわしの腹の中を見ぬいていたらしい……」

なんのことか、鶴姫にははじめよくわからなかった。あ——と、小さな叫びをもらしたのはしばらくたってからだった。

「わかってくれたか。そうじゃ。平左は、はじめから命を捨てるつもりで、みずから唐津へ使者に立ったのじゃよ……」

鶴姫はわなわなとふるえ出した。

「だが、瀬戸口主税をはじめ、供についた者一同、あくまで酒乱といい張りおった」

平左衛門の命に違いない。主家の名に傷をつけぬためのおもんばかりである。あくまでおのれの一身に、責めを負おうとしていたのであった。

平左衛門の死をめぐって、いろいろのうわさが飛んだことを鶴姫は思い出した。そして、平左衛門の遺骸を守って城下に帰った供の人々が、どんなうわさにもかたく沈黙を守ったことを切なく思い出した。

「わしはそなたがいとしかった。そなたの一生に一度のわがまま故、なんとか聞き届けてやりたいと思った。だが、わしは平左に何もいわなかった。侍の世界のおそろしさがよくわかっているからだ。縁組一つにも、あたら侍の命がかかっている——そのおそろしさを知っているからだ。しかし、平左はなにももらさぬわしの腹の中を見破りおった」

——縁組一つにも侍の命がかかっている。

その言葉は鶴姫の胸をぐいとえぐった。

鶴姫は力なくうなだれてしまった。ひげの剃りあとも青々とした、ありし日の平左衛門の精悍な風貌が瞼によみがえった。

平左衛門には二人の男の子がある。兄を美濃といい弟を左近といった。左近はことし生まれたばかりである。

——どんな思いで、平左衛門は死んでいっただろう。みれんがない筈はない。平左衛門だって人間だもの。

悪夢のような今一つの思い出が、鶴姫の胸をひたした。愛甲新七の死であった。稚拙な鶴姫の恋歌が、さきには春秋に富む若者の命を奪い、今は志野への思いやりが、平左衛門を、そして高畑新蔵を、無残な死の淵へ追いこんでしまった。

くらくらと鶴姫は倒れそうになった。むしりとられた萩の花が手からこぼれた。

七

「ほんとうのことを、決して人にもらしてはいけません」

鶴姫はきびしく志野にいい渡した。どこまでも、鶴姫自身のわがままとして押し通さねばならなかった。

平左衛門が死んで、もう一月近くにもなっている。この間、鶴姫に対する家中の者の風あたりはいよいよはげしかった。平左衛門の死の真相が、いつともなく城下にひろまってしまったからである。

「ほんとうのことがわかれば、志野がどんなに責められるかわかりません」

どんなことになるか目に見えていた。わたし一人が耐えればそれですむ。鶴姫は決心していた。

そんな鶴姫にたった一つの救いがあった。瀬戸口主税が、近く家久のもとへ召し出されるらしいことがわかったのである。平左衛門が、弟の伊勢兵部貞昌にいい残していたのだという。

そうなればもう一介の陪臣ではない。そして、いずれは晴れて、相思の志野とも結ばれることだろう。その日のくるのが、待ち遠しいくらいであった。幸せな一対の夫婦が生まれる——それが平左衛門の死に酬いる最良のことだと鶴姫は思った。

このころから、鶴姫はことさらわがままに振舞った。そう見せる必要があった。鶴姫のわがままが平左衛門を殺したと、いつまでも信じさせるために。

日に日に気ままがつのっていった。おつきのものもあきれるくらいだった。まるで人間がかわってしまったかのようである。

「鶴姫さま、もうお忘れでございますか。そのようなわがままが、あたら平左衛門さまを死なせたことを」

老女のいさめも何も聞かなかった。だれからも愛されていた鶴姫が、今はいちばんのきらわれものになってしまった。それでも鶴姫は満足だった。

主税と志野の婚礼の日が、鶴姫は待ち遠しくてならなかった。はなやかな祝言の模様を折さえあれば目に描いた。花婿花嫁の顔が、いつの間にか鶴姫の想像の中で、死んだ愛甲新七と鶴姫自身のものに入れかわっていたりした。

けれど、鶴姫の唯一の夢は、ついにかなえられなかった。家久へ、はじめてのお目見も間近になったある日、瀬戸口主税が、突如鹿児島の城下を出奔してしまったのである。理由はだれにもわからなかった。まるっきり見当がつかなかった。

志野さえ思いあたりがないといった。

——なぜだろう?

むろん鶴姫にはわからない。

しかし、志野はやはりそれを知っていた。ほんとうのことを、志野が鶴姫にうちあけたのは、瀬戸口主税が出奔して、半年以上もたってからである。

「志野、なぜです。なぜ主税はそなたを捨てて、薩摩を去ってしまったのです」

「わたくし、ほんとうのことを、主税さまに知らせました。くわしくふみに書いて……」

耐えられなかった。非難の渦の中にいる鶴姫を、見るにしのびなかったのである。せめて主税になりとも、鶴姫の真実の心を知ってもらいたかった。

が、それが、瀬戸口主税をして、薩摩を去らしめる結果を招いた。

——バカ、バカ、バカ。平左衛門もバカ、主税もバカ、伊平太もバカ、みんなバカ、侍はみんなバカ、みんな嘘つき。

その夜、鶴姫はまんじりともせず、床の中でみもだえした。のたうった。

平左衛門の顔、主税の顔、伊平太の顔、たった一度だけ会ったことのある、高畑新蔵の顔——いくつもの顔が、鶴姫の目の前で、くるくる舞った。

鶴姫はまた、いつか平左衛門の妻の、のぶと会った時のことを思い出した。父に似た、りりしい顔だちの美濃をそばにすえ、乳呑み子の左近を胸に抱き、のぶは青い顔をしていた。すっかり

やつれていた。しかし、悲しそうな色はどこにもなく毅然としていた。

鶴姫が、心から平左衛門の死を悼み、真実をこめて詫びると、のぶはきっぱりとこたえたのだった。

「いいえ、姫さまのわがままが平左衛門を殺したのではありません。平左衛門は、ただただ殿様のために死んだのです。寺沢家は切支丹というわさがあります。切支丹のうわさがあると知っては、姫をつかわすわけにもならぬ。その方が唐津へおもむき、これまでの話うちこわして参れ。そういう殿様の御命令故、平左衛門は喜んで命を捨てました」

これも嘘であった。

胸をいためている鶴姫へのいたわりから出たことでもない。はかないみえに似ていた。

——侍の妻。

鶴姫は泣きたかった。

その後、鶴姫のわがままは、いよいよつのる一方だった。なぜ鶴姫がかわってしまったのか、志野をのぞけば、だれ一人として知らなかった。

いつか人々は、素直で、快活で、童女のように天真爛漫だった、昔の鶴姫のことを忘れてしまった。

——しようのない姫さまじゃ。

だれもが、目に憎しみの色さえ浮かべて、吐き捨てるようにいった。

志野の父の薬丸伊平太もむろん例外ではなかった。

かげろう記

一

どうけりをつけたのか、それにはふれず、ともかく話はついた、男同士膝つきあわせて談じこみ、はっきり結着をつけたというのである。一方はお船手方の有川伊織、一方は小納戸方の帖佐喜八郎、そして、有川伊織の方が国分源右衛門の屋敷にやってきた。天保十二年八月、中秋の名月が過ぎて間もないある日のことであった。

たしかに結着はつけた。もう問題はない。かさねてそう念を押してから、有川伊織はややぎくしゃくしたいいかたで、

「だから、千鶴どのをいただきとうござる」

と切り出した。しかも、まだくれるともくれないとも返事をしないのに、半月以内に祝言をすませたいとまでいう。いくら好意を寄せている相手でも、こんな一方的なことばを聞けば、国分源右衛門の性格として、一も二もなく拒絶してしまうところだが、彼は意外に平静であった。伊織の態度から、思いあがりというよりも、むしろひたむきさを感じたからに違いない。思いあがっているのではないことは、仲人も立てずに失礼だがと、あわてていい足したのでも、すぐ察

しがついた。源右衛門はおだやかに聞いた。
「おはん、どう話をつけたというんじゃ」
「それはいえもはん。ともかくきっぱり結着はつけもした」
無意識だろう、青々としたひげの剃りあとを伊織はなでた。源右衛門は、ぴくりと眉を動かして、別のことをいった。
「茶が冷える」
「はっ」
伊織は手を伸ばして茶碗を口へ運んだ。落ち着いているように見えたが、実際はそうでもなかったのか、伊織はむせた。
千鶴は青ざめて茶の間にすわっていた。さっき座敷へ茶を運んでいったとき、ひどくかたくなっていたのが自分でもわかった。顔もほてっていたように思う。父がどう答えるか気になってのどがかわいた。
実は昨日の夕方、父の使いに出てその帰り道、千鶴は伊織と会った。どうやら、待ち伏せしていたらしい。薩摩の若者は、絶対にそんなことはしないのだが、伊織があえてそれをしたというのは、よくよくと思われた。
「結着はつけもした。明日うかがいもす」
それだけいうと、伊織はすぐ背を向けて去った。言外に、父上はなんといわれるかしらないが、あなたはぜひ承知していただきたい、そんな響きがあった。この春一度伊織は、しかるべき

仲人を立てて、千鶴を妻にと望んだことがある。ところがその一日前に、帖佐喜八郎の家から、話が持ち出されていた。どちらを受けいれても悪い話ではない。二人とも有為な青年としてだれからもみとめられていた。事実、源右衛門は、あと一人娘が欲しいと笑っていったものだった。
源右衛門としては、どちらかといえば、有川伊織を選びたかった。第一伊織の父の頼母とは、まるっきり性格は違うが、若いころからうまが合ったし、早く妻を死なせて、男手一つで子を育てた者同士という親しさもある。伜の久之進も伊織と仲がよかった。直接伊織とまじわる機会を持たなかった千鶴にしても、父や兄を通じて語られる、伊織の風貌なり人がらなりに、ほのかな好意を抱くほどの心のつながりはあった。
しかし、帖佐喜八郎の申出が一日早かったということに、妙にひっかかって、源右衛門は、直情径行の彼らしくもなく、まだ早過ぎる、来年の春ごろまたあらためて申出ていただきたいと、両方にそんな断りかたをしたのである。千鶴は十八になる。決して早過ぎはしなかった。源右衛門には、一年たてば、どちらかは他家から、嫁をもらっているかもしれない、そういうおもわくがないでもなかった。それが、半年もせぬうちに、自分たちで結着をつけたというのだった。
「話をつけたというのは結構だが、なんでそげん祝言を急ぐとじゃ。それに、藩庁の許しがすぐ出るかどうかもわからん」
源右衛門はこう聞いた。
「独身では都合の悪かことができもした。近く幕府から差遣される役人衆を、琉球へ案内する大役を仰せつかったのでごわす」

絶対に支障をきたすというわけではないが、公儀を大切にする意味あいから、ぜひとも妻帯したい。いや、妻帯すべきであると思うと伊織は強調した。

「なお、藩庁の許可のことでごわすが、それは案ずることはごわはん。調所どのがよきにはからうとのことでごわした」

「調所が……」

急に源右衛門の顔がけわしくなった。

調所笑左衛門は、川崎家の次男として生れ、良八と名づけられたが、十三歳の時調所清悦の養子となり、二年後、表坊主として出仕、豪邁な先々代薩摩藩主、島津重豪にみとめられて、御小納戸頭取、御用取次見習、町奉行、御使番、御側御用人と累進して、ついには家老にまでのしあがった出頭第一の男である。ことし六十六歳、当主斉興にも信頼篤く、島津七十七万石を寝せ起しするとまでいわれているが、源右衛門は調所がきらいであった。

いま島津の家中は、かなり複雑な様相を呈していた。老藩主斉興の意を含んで、その愛妾お由良が生んだ久光を、次代の藩主にと志す一派、英明な世子斉彬を奉じようとする一派、まっ二つにわかれて、後日高崎崩れと称される一大抗争を惹起せしめた禍因が、すでに、しだいに醸されつつあったのである。そして調所は、お由良派の大立物として、斉彬を奉ずるいわゆる正義派の人々から、姦物と見なされていた。

根は深いところにあった。当主斉興の祖父重豪は、暴君的資質の持主ではあったが、反面、きわめて進歩的であり、進取の気象に富んで、西洋の文物にも大きな関心を寄せるという、当時としてはめずらしくけたはずれの人物であった。見ようによっては、非常な英君といってもよい。藩学造士館、演武館などの創設、オランダ商館付きドイツ人医師シーボルトとの交遊、成形図説の編纂などからもそれはうかがうことができよう。しかも十一代将軍家斉の岳父ということもあって、天下におそれる者なしの感があった。

その重豪の、積極的放漫政策によって、藩費は湯水のように浪費され、借財はふえる一方で、財政は困窮をきわめた。家督をついだ斉宣は、藩財政の立て直しをはかって、秩父太郎、樺山主税を起用し、父の意に背く政策をつぎつぎに打ち出した。激怒した重豪は、秩父、樺山に死を命じた。世にいう秩父崩れである。近思録崩れともいう。重豪はさらに、斉宣を隠居させて、孫の斉興を藩主の座につかせ、自分は背後にあって、天保四年、八十九歳で死ぬまで実権をふるった。

斉興の世子斉彬は、この曽祖父重豪にかわいがられて成育した。それだけに曽祖父の影響をすくなからず受けている。そんな斉彬を藩主として、またぞろ重豪のように、藩費を濫費する積極政策を打ち出されてはというのが、庶子久光を擁しようとする調所らの考えであった。斉彬の英明を信じ、彼に存分の経綸を行わせたいと期待する、正義派の人々に憎悪されるゆえんである。源右衛門もまた、正義派に近い考えを持っていた。調所の名が出て、源右衛門の色が変ったのを見ると、

「それはそれ、これはこれ、てまえは調所どのではありもはん。あくまでも、有川伊織でごわす」

むきになって伊織はいった。

「わかった。明日の夕刻までに返事する」

伊織を帰すと、そのあと源右衛門は、帖佐喜八郎の屋敷へ行った。喜八郎はさばさばした口調で、

「いかにも結着はつけもした。てまえは引きさがりもす。これまでの話はなかったことにしていただきもそ」

と伊織のことばを裏づけした。

「どう結着をつけたのじゃ」

「それはいえもはん。ともかく話はつきもした」

これまた、申しあわせたような返事であった。

二

江戸屋敷から、公儀役人の差遣を伝え、万遺漏なきを期せと指示してきたのは、八日ばかり前のことであった。いよいよくるべきものがきたかと、藩政の要路にある者は、たちまち色めきたった。

隠居島津重豪、ならびに当主斉興の命によって、調所が財政改革に着手したのは、文政の末であったが、そのころ薩藩は、窮乏の極に達していた。藩主の手もとに二分金がたった一枚しかないこともあったという話は有名で、邸内の草は茂るにまかせ、江戸詰めの藩士たちに対する手当

は、一年以上もとどこおる悲惨なありさまであった。

それを調所は、非常手段を用いて、またたく間に立て直した。一つは、奄美大島、喜界島、徳之島、いわゆる奄美三島の砂糖総買入れ――今日でいう専売制であり、一つは、琉球における密貿易である。琉球は、慶長十四年以来薩摩の支配下にあったから、単なる琉球貿易ならば別に問題はない。だが、事実は琉球を仲介とした唐人との密貿易が、おびただしい高にのぼっていた。

買入れる唐物のおもなものは、鬱金、琥珀、人蔘、絹織物などだった。広東人蔘は朝鮮人蔘として通用し、高値がついたし、他の品も「唐一倍」といって、倍にも三倍にもなり、藩財政をうるおした。

もっとも、小規模には、内々で早くから取引きを行っていた。それを調所が、天保のはじめ、幕府に運動して公許を得たのだが、これとて年間銀一千七百二十貫目、すなわち金子にして二万八千余両までときびしく制限されている。しかし、実情はそんなまやさしいものではなく、公許の額をはるかに上まわっていた。薩摩の密貿易は、公然の秘密であり、天下周知といってもよかった。長崎奉行所から、密貿易の被疑者の引渡しを求められて、

「その者はすでに死亡つかまつり候」

と突っぱねたこともある。だが、昔日の威信はすでに失われているとはいえ、幕府がいつまでもこのまま放置する筈はなかった。ことに、大御所家斉の岳父として、幕閣に対し、隠然たるにらみをきかせていた重豪が、世を去ってからはなおさらである。大御所家斉もまた、ことしの正

月西の丸に薨じた。

もはや幕閣にとって、遠慮すべきものはなかった。のっぴきならぬ証拠をつかめば、ただちに強硬な態度でのぞむであろうことは目に見えている。げんに、隠密がまぎれこんだ形跡はしばしばあった。もちろん隠密とわかれば、容赦なくこれを斬った。いや、疑わしいふしがある、ただそれだけでも抹殺してきた。

こんどはそうはいかない。公式の達しがあった上で、真正面から堂々と乗りこんでくるのである。将軍の代がわりごとに、諸国へつかわされる巡見使以外に、幕閣がこうして人を派遣することは、かならずしもめずらしくはないが、琉球まで足を伸ばすというのは異例であった。とすれば、相当辣腕の人物が選ばれてくるであろうことは、およそ想像にかたくない。

帳簿の上でだけなら、いつなんどき、どこから切りこまれても、びくともしないだけの用意が調所にはあった。だが、幕吏がみずから琉球まで足を運ぶとすれば、ことは容易ではなかった。

連日会議がひらかれた。正義派も、お由良派もない。一切の行きがかりを捨てて、老職たちは鳩首談合をかさねた。席上、幕吏の琉球入りを、口実をもうけて断ってはという意見も出たが、できぬ相談である。幕閣は、去年の三月、薩摩に対して、琉球産物の売りさばきを停止せよと命じてきた。そのかわり向う三年間、毎年五千両ずつ下げ渡すという条件つきであった。薩摩ではそれを辞退して、売りさばき停止の延期を願い出ている。そんないきさつのあとだけに、幕吏の琉球視察を断っては、こちらの腹を見すかされるおそれがある。ともかくも、案内をせぬわけにはいくまいということになった。

ところが、幕吏を琉球へ案内する大役を、だれに命ずるかという段になって、議論百出してまとまらない。調所は出頭第一とはいえ、老職としては末輩である。はじめは控えていたが、これではらちあかずと、

「てまえにお任せ願いもす」

たまりかねてにじり出た。調所の手腕は、だれしもみとめている。一任することにきまった。

そこまでは、国分源右衛門もうわさを聞いていた。その白羽の矢が、なんと有川伊織に……。帖佐喜八郎の屋敷からもどって、源右衛門が腕を組んでいるところへ、倅の久之進が下城してきた。源右衛門は、伊織がたずねてきたいきさつを、手短かに語った。久之進は、伊織が大役を命ぜられたことをすでに知っていた。源右衛門は久之進にたずねた。

「ほかの者はどげんいいよる」

「伊織どんでは若過ぎる。そげんいう者もだいぶんおるようでごわす」

伊織は、幕吏案内の大役とともに、それに用いる藩船おもろ丸の宰領も、同時に命ぜられたという。お船手方である以上、不思議はない。しかし、こんな場合、船の宰領には、通例として、船奉行がみずからあたることになっている。伊織はかねてから俊才として知られ、遠からずして奉行に昇進することは確実と見られていたが、現在はまだ、船奉行心得ともいうべきもので、年も二十七歳、なんとしても若過ぎた。藩内から、その若さを危ぶむ声が出たのも当然といえよう。手腕に多少の不安があるだけではない。伊織のような若者に大任を与えては、公儀をないがしろにすることになりはしまいか。端的にいえば、幕吏の心証をそこのうおそれもあった。

それに伊織は、琉球貿易について、さほどくわしく知っている筈はない。いわば素人であった。ただこれまで、なんどか琉球へ渡ったことがあるだけである。

「だが調所どのは、心配はいらぬといい切られたとのことでござった」

久之進はそういった。

三

人選を一任された調所は、そのあくる晩、これはと目をつけた者五名を、自分の屋敷へ招いた。有川伊織もその一人である。五名の中では伊織がもっとも若かった。

「相手が隠密ならば、手のうちようはいくらもある。が、こんどは隠密じゃなか。正面から堂々と鹿児島へ乗りこんでくるとじゃ。されば、人知れずこれを葬り去るちゅうわけにはいかん」

公儀の役人を琉球へ案内して、絶対に密貿易の証拠をつかまれることなくもどってくることができるか。調所に問われて五名はうむとうなった。ほとんど不可能である。みな黙ってしまった。

「不可能ではすまされんとじゃ」

幕吏の到着まで、約一ヵ月、その間に、万全の手を打たねばならぬ。調所はむろん、琉球に駐在している唐物方にも、早舟で事情を知らせている。薩摩領内の山川、指宿、阿久根、坊の津、その他の港へもしかるべき指示を与えた。だが、それだけでは十分といえない。調所は身を乗り出した。

「しっぽをつかまれては、ぬきさしならんことになる」

調所が財政立直しを命ぜられたとき、藩の歳入は十四万余両であった。これに対して、大坂、京都、江戸、三都の商人からの借財は、つもりつもって五百万両に達していた。年五分の利と見ても二十五万両、歳入をはるかに上まわっている。この借財がガンであった。これを調所は、利息は一切ご破算、元金五百万両を、年二万両ずつ、すなわち二百五十ヵ年賦払いという、踏み倒しに近い条件の荒療治をやってのけた。そして、奄美三島の砂糖の買い占めと、密貿易で、着々と歳入の増加をはかったのである。家中の武士にはもとより、町人、百姓の末に至るまで、むごいほどの節倹を強いた。

「その甲斐あって、藩財政はようやく持ち直し、今や藩庫にあわせて二百五十万両の貯えを有するに至った」

いま密貿易の証拠を握られては、これまでの苦心は一切無になる。島津七十七万石をとり潰すようなことはまさかあるまいが、考えようでは、それ以上にきびしい手を幕府はうつに違いない。では、どんな制裁を加えてくるか。

「まず考えられるのは、お手伝い普請じゃ」

調所は例として、宝暦の木曽川治水工事をあげた。もう九十年近くも昔になるが、その時の辛酸を、島津家中の者は、親から子へ、子から孫へと、つぎつぎに語り継いでいまだに忘れてはいない。宝暦四年から、あくる宝暦五年にかけての幕命による木曽川治水工事で、薩摩藩は、ただでさえ苦しい上に、四十万両以上の借財を背負いこみ、総奉行の平田靱負が、工事費超過の責め

を負って自刃したのをはじめ、監督にあたった幕吏の横暴をいきどおっての憤死、悪疫による病死、あるいは疲労死、あわせて八十余名の犠牲者を出した。またこの時の借財が、後日における薩藩窮乏の遠因にもなっている。調所はそれをいった。

杞憂とのみは決して思えない。老中は、大御所家斉の死を待ち受けていたかのように、辣腕をふるいはじめた水野忠邦である。去る五月には、幕政改革の大方針を打ち出してきている。世上は騒然としていた。凶作、飢饉が相つぎ、大塩平八郎の乱、生田万の柏崎代官所襲撃、辺境をうかがう異国船の出没、さらにはアヘン戦争の風聞も流れてくる。こういう時世だけに、揺らぎはじめた幕府の威信を一挙に回復させるため、水野が激越な処置をもってのぞむであろうことは、十分に考えられた。

「不可能ではすまされんとじゃ」

同じことをくりかえして、調所は一人一人の顔をなめるように見まわした。難題であった。重苦しい空気が部屋を満たして、燭台の火はまたたきもしない。息がつまりそうであった。息苦しさをはらいのけるように、横山佐太夫という男がやっと口をきいた。

「相手が薩摩領へ足を踏み入れる前に、刺客を放ってはいかがでごわしょう」

「ばかな。そげなことですむぐらいなら、わざわざその方どもを招きはせぬ。殺せとはだれもいうてはおらんのだ」

調所はにべもなく一蹴した。佐太夫は赤面してうつむいた。あとの者も、多少の意見は持っているようであったが、調所の態度に気押されてか、あわてて口をとざした。伊織は終始無言で

あった。しばらくして調所は、ややふきげんにいった。

「もう引き取ってよか。じっくり思案した上でまたきてもらおう」

「御家老、どうあっても、殺してはならんとでごわすな」

伊織が、はじめて口をひらいた。調所の返事はむろんきまっていた。五名がふたたび調所に招かれたのは、それから三日目の夜であった。

「どうじゃ、思案がついたか」

伊織をのぞいた四名は、最初から目を伏せていた。それが、なによりも明らかな調所への答えであった。

「結局、伊織どんだけが、調所どののめがねに叶うたちゅうことでごわす」

久之進が語り終ると、源右衛門は、腕をくんだまま、かなり長い間黙っていたが、やがてぽつんともらした。

「忙しいことになるのう。女親がおらんと、こういうとき困る」

「ではお父上、千鶴を伊織どんに……」

「理由が理由じゃ、断るわけにもいくまい」

ふすまのきわまできて、千鶴はどきっとした。手にした盆の上で茶がこぼれた。

四

九月のはじめに、祝言は無事にすんで、千鶴は有川家の嫁になった。有川家は二の丸そとにあ

る。屋敷はかなり広いのに、人数はすくなく、家士や奉公人をのぞけば、伊織とその父頼母、それに千鶴の三人きりであった。伊織には采女という弟があるが、これは去年の春から長崎へ遊学している。

祝言に二日おくれて、幕吏が鹿児島に到着した。巡見使とほとんど変りない格式で、正使は使番三上彦四郎、副使として小姓番秋月主膳、書院番布施勘之丞、それにかなりな供の人数が加わっていた。

祝言から八日目の朝、伊織は、幕吏の案内役としておもろ丸に乗りこみ、鹿児島を出港した。介添は鎌田八弥太であった。幕吏のしたがえてきた供のうち、約半数は鹿児島にとどまった。おもろ丸は、いったんは鹿児島湾口にある山川港で風待ちし、順風に恵まれしだい琉球に向うのだという。

その夜、灯りのとどかぬ部屋の暗がりで虫が鳴いた。こおろぎとわかるのにしばらくかかった。なぜともなく、伊織が残していったような気がして、いとしさがこみあげ、そのこおろぎを驚かすまいと、千鶴は息をひそめていた。

ふすまがあいて、頼母が顔を出した。あまり静かなので、ふとのぞいて見たらしい。敷居ぎわでちょっと間をおいてから、頼母は部屋に入ってきた。

「千鶴、そなたには、とんだ迷惑をかけてしもうたの。まるで鳥が飛び立つようなあわただしい祝言、さぞ面くらったであろう」

いつかはいおうと思っていたことを、いまやっと切り出す、そんな口ぶりだった。

「いいえ、わたくし、かえって嬉しゅうございました」

素直に千鶴は答えた。つくりかざりなどではない。本心だった。頼母は、まじまじと千鶴を見つめた。千鶴はまたいった。

「わたくし、心にもないことは申しませぬ」

頼母の顔がはじめてゆるんだ。おだやかな風貌である。千鶴の父、国分源右衛門もむろんだが、たいていの薩摩人は、年老いてもその顔のどこかに、燃えさかる炎のはげしさを凝縮させている。頼母にはそれがなかった。

「今だからこそいうが、実は内心、気が気ではなかったとじゃ。そなたのおやじどのが、つむじを曲げはしまいかと思うてのう」

国分源右衛門は名題の硬骨、気にくわぬとなれば、日ごろじっこんの頼母に対してであれ、加減するような男ではなかった。だから頼母は、とても一度で話はまとまるまいと見ていたのである。ところが、案に相違して源右衛門は、あっさり承知してくれた。

「だが千鶴、そなたには定めし、なにか申したであろうな」

千鶴は黙っていた。

「なんと申した、おやじどの」

いおうかいうまいか迷ったが、頼母のにこやかな顔につりこまれて、千鶴は小さい声で答えた。

「有川の伜もせっかちじゃ。それにしても、うまいことを口実にしおった。父はこう申しました」

「ははは、そげなことを」

嬉しそうにうなずく頼母へ、でも父は、腹の中では案外、わたくし以上に喜んでいたのかもしれませんと、千鶴はつけ加えた。

「ともあれ、そなたには、気の毒なことをしてしもうた」

藩命とはいいながら、嫁いで半月もせぬうちに、留守居をせねばならぬ千鶴が、頼母は不憫でならない様子だった。

別れを告げる折、伊織は晴れ晴れとしていた。千鶴はすこし憎らしかった。めとったばかりの新妻を残して、遠い琉球へ渡るというのに、こうも晴れやかな顔ができるのか。とすれば男とはなんとさばさばしたものだろうと、不満めいた思いが胸をかすめた。さすがに伊織は、すぐそれと悟ったものだろう、

「そう長いことはかからん。琉球みやげ、楽しみに待っちょくがよか」

にこっと白い歯を見せた。さわやかな笑いだった。この人の妻になってよかった。ほのあたたかいものが胸をひたした。その時のことを思い出している千鶴へ、

「三上彦四郎というのは、なかなかの人物らしいな」

と案じ顔に頼母がいった。

「はい、とても一筋縄ではいきそうもないとのことでございます」

出発に先だって琉球貿易関係の帳簿を三上彦四郎が調べた際、調所笑左衛門が立会ったが、質問が核心を衝いており、さしもの調所が胆を冷やしたと、千鶴は伊織から聞いていた。

「ここでくよくよ心配してもはじまらん。やりとげる覚えがなければ、大事のお役目、伊織も引き受けはすまい。では、ゆっくりやすむがよか」

なかば自分自身にいい聞かせるように、ことさら明るく笑って見せ、立ちあがった頼母は、部屋を出しなに振りかえって、

「ほう、あの鳥籠は」

と千鶴にたずねた。壁ぎわに、すすけた古い小さな鳥籠がかかっている。

「すずめでございます」

「すずめ……」

頬白かなにかならともかく、すずめというのが、よほど意外でもあり、またおかしかったものらしい。あきれたように頼母は、そうごうを崩した。

すずめは、おととい、下城の途中、伊織が拾ってきたものであった。どうして傷を負ったのか知らないが、はねのつけ根のあたりに血がにじんで、飛べないでいたという。伊織はまめまめしく手当を加えたあと、物置に久しく鳥籠が放ってあるのを思い出し、持ってきてすずめを移した。そして千鶴に、餌の与えかたなどこまごまと教えてから、

「飛べるようになったら、すぐ放してやっがよか」

といった。

千鶴は急に思い出し笑いをした。父の源右衛門に、いつだったか、伊織の幼いころの話を聞かされたことがある。伊織は、七つか八つだったそうだが、南国薩摩にはめずらしく大雪の降りし

きるある日、源右衛門が有川頼母の屋敷へいった。まっ先に顔を出す筈の伊織が、その時にかぎって見えない。

「どげんした伊織は」

と聞くと、頼母はあごで庭をさし、

「仕置をしているのだ」

といった。縁に出てみると、伊織は頭から真っ白になって雪の上に静坐していた。温厚な頼母が仕置をするくらいだから、よほどいたずらが過ぎたのに違いない。それでも、唇が土気色に変っているのを見ると、ついかわいそうになって源右衛門は声をかけた。

「わしがとりなしてやる。さあ、お父上に詫びをいうがよか」

とたんにかん高い返事がはねかえってきた。

「いやでごわす。詫びるくらいなら、凍え死んだがましでごわす。このつぎは、もっといたずらをしもすぞ」

これには二の句がつげなかった。

こんな伊織とすずめが、なかなかうまく結びつかず、千鶴は思わず笑ってしまったのだった。

五

おもろ丸は、山川港で四日風待ちしてからともづなを解いた。その知らせを聞いて、六日目の朝、千鶴は籠のすずめを放した。かたわらで、頼母も見ていた。すっかり傷の癒えた羽根をはばたかせて、すずめが空へ飛び立ったとき、千鶴はほのぼのとしたものに胸を満たされた。

伊織は、無事大役を果たしてもどってくる。そう確信することができた。調所さまほどのお方が見こまれたのだし、それだけでも太鼓判だと思った。お船手方の伊織は、直接は琉球貿易の仕事にかかわりあってはいない。そこに、強いていえば、一抹の不安がないでもなかったが、大役を命ぜられた日から、伊織は一日も欠かさず城中に詰めて、適切な調所の指示のもとに、着々と準備をととのえていた。祝言の日でさえ、半日は城中にいたとも聞いている。唐物方の役人も、つき切りで、あらゆる質問に備えて、ことこまかなところまで伊織に教えこんだ筈である。そして伊織は、下城してからも、分厚い問答書を前にして、答弁の練習にはげんだものだった。朗々たる声が、千鶴の耳にも焼きついている。

雲ひとつない、秋空を見あげて、千鶴はふたたび自分の胸に、確信をたたみこんだ。だが、その日の夕方、思いもかけない悲報が、調所笑左衛門のもとへもたらせられたのである。千鶴は、今一つ、海のおそろしさを忘れていた。

信じられないような知らせであった。その知らせは、奄美大島の名瀬代官所から早舟で届いた。おもろ丸が沈んだのだ。山川港を出て、二日目の真夜中ごろ、有川伊織たちは、奄美大島の近くで、おもろ丸もろとも波にのまれてしまった。暗礁に乗り上げたらしく、あっという間に船底が砕けて、同船した七十余名ほとんど助からず、ただわずかに、伊織の介添をつとめた鎌田八弥太と、幕吏の一人布施勘之丞、ほかに水夫二名、賄方一名、都合五名が、思い思いに船板にすがって波間にただよっているところを夜が明けてから、それぞれ前後して漁師に救われたという。

「それ以上のことは、今のところまだわからぬそうじゃ。追って藩庁から、正式に発表するまでは、口外してはならぬとのことであった」

火急の招きを受けた頼母は、調所の屋敷からもどってきて、千鶴に告げたが、その顔からは、さすがに血の気が失われていた。悲しみが千鶴の胸に落ちこむのに、しばらくかかった。それほど信じられなかった。別れの日を振りかえってみても、虫の知らせなどと呼べるものはなにも思いあたらなかった。千鶴は奇跡を念じた。

鎌田八弥太、布施勘之丞ら五名の生存者は、数日後鹿児島にもどってきた。いずれも憔悴しきっていた。助かった水夫と賄方は、清兵衛、平助、六蔵だった。このほかに、船頭の杉戸仁左衛門も助けられたが、杉戸は正気づくと同時に、腹を切ってしまったそうであった。

五名が帰ってきたあくる日、有川頼母は、ひそかに呼び出しを受けて、調所笑左衛門からあらためて、おもろ丸遭難のあらましを聞いた。

おもろ丸は、山川港で四日間風待ちしてから琉球に向った。乗船した三名の幕吏のうち、三上彦四郎は、至ってもの静かな態度だったが、秋月主膳は、常に傲然と反りかえっていた。また、布施勘之丞は、三名の中ではもっとも年長者だが、いちばん好人物らしく、だれにもあいそがよかった。

秋月主膳は役料三百俵取りの小姓番士、三上彦四郎は千石高の使番である。そのくせ主膳は、三上彦四郎と、ほぼ対等に近い口のききかたをした。したがって、同船した薩摩藩士など眼中にもおかぬていで、有川伊織に対しても終始高飛車な態度でのぞんだ。

こんな若僧が案内役か。一つにはそうした忿懣もあったに違いない。だが、伊織は悪びれなかった。絶えずにこやかな表情をたたえ、孜々としてつとめた。幕吏たちが、海の眺めにあきたらしいと見てとると、琉球の万葉集といわれる「おもろそうし」のことや、壮麗な首里城正殿の結構、守礼の門のたたずまい、あるいは、丁字路のつきあたりによく見かける石敢当、風変りな亀甲墓などについても、ものやわらかに語った。三上彦四郎や布施勘之丞は、かなり興深かそうに話に乗ってきたが、秋月主膳は、にべもない様子をしめした。船酔いを案じて、

「いかがでごわす。御気分が悪いようなことはごわはんか」

と気づかうのにも、鼻先でせせら笑った。

「これしきのことで、船酔いなどしておっては、大切な公儀の御用はつとまらぬわ」

「ごもっともでごわす」

あくまで下手に出る伊織へ、じろっと目をくれて、こんどはなぶるように、

「ときに有川どの、うけたまわればおてまえは、祝言をあげられたばかりだそうだな」

「だれがいいもした、そげんことを」

「舟子どもがさっきしゃべっておった。のう、御同役」

相槌を求められて、布施勘之丞は、気の毒そうに苦笑しながらうなずいた。主膳はなおもいいつのる。

「われら両名、先ほどもうわさをしておったところじゃ。さりとは薩摩のご家老がた、そろいもそろって不粋なお方ばかりとな。もっとも、そのような有川どのなればこそ、老練の者をさしお

いて、あえてわれらの案内役を命ぜられたかもしれぬて」

「どういうことでごわしょう」

伊織は、やわらかな態度をくずさず、さりげなく聞きかえした。

「聞くまでもなかろう。もらいたての若女房が、陰膳そなえて帰りを待ち侘びているとあれば、船を宰領するにも、いきおい慎重にならざるを得まいからのう。してみれば、有川どのにとっては、不粋きわまる御家老がたも、われら三名のためには、ずいぶんと気をきかされたことに相なる。ハハハハ」

あたりかまわぬ高笑いをする主膳へ、

「秋月氏、ちとつつしまれい」

三上彦四郎は、冷ややかにたしなめた。主膳は露骨に苦い顔をして横を向き、布施勘之丞は、すまぬという風に、伊織に目顔であやまった。三人三様であった。気まずさをとりつくろうように、布施勘之丞は、ことし三つになるという孫の話をはじめた。直参旗本らしい気どりなどみじんもない、人の好さをまる出しにした話しぶりだった。

三上彦四郎は、秋月主膳をうながすと、胴の間におりていった。布施勘之丞は、あわてて床几から腰を浮かして、二人のあとを追った。鎌田八弥太が、伊織の方へ寄ってきた。

「好かんやつでごわすな、あの秋月というのは」

「いや、おいはたいして気にしとらん。あげん男はかえって御しやすか。問題は三上彦四郎でごわす」

調所どのもそういわれたと、伊織はつけ足した。そして、自分もすぐ胴の間へおりていった。あとに残った八弥太は、袖で額をぬぐった。暑かった。頭上には、午後の太陽が照りつけている。九月なかばとはいっても、やはり南の海である。船のまむかいはるかに、大小二つの島が見えてきた。左舷にも、細長い島が望まれた。左舷の島は種子島で、まむかいの二つは屋久島と口永良部島であった。海の色はしだいに色を濃くしていた。ずしりと重い感じの海を、おもろ丸は一路南下していった。そのあと、この日はなにごともなかった。以上はだいたい、鎌田八弥太が語ったところである。

六

あくる日の昼過ぎ、胴の間から甲板へ出た鎌田八弥太は、船頭の杉戸仁左衛門となにか話しこんでいる有川伊織の姿を見ると、ゆっくりと船櫓へのぼっていった。宰領とはいっても、伊織がなにからなにまで指揮をとるわけではない。船の実際の仕事は、おもに杉戸仁左衛門がやった。

八弥太は、伊織としばらく、二、三のことばをかわしているようだったが、間もなくつれだって船櫓をおりると、波がしらの砕ける舳近くへやってきた。風がおとろえたか、船脚はかなり落ちている。波の音、帆綱のきしりにまじって、ときどき、船頭の大声、こたえる楫取りの声が飛んだ。

「有川どん、いつやっとでごわす」

あたりに十分目を配ってから、低いが鋭い声で八弥太は迫った。伊織は冷静に聞きかえした。

「なんばじゃ」
その落ち着きが、逆に八弥太を刺激した。
「あん三人ば、いつたたっ斬るか聞いちょっとでごわす」
「ばかな、そげん命令、おいは受けとらん」
みなまでいい終らぬうちに、八弥太ははげしく浴びせてきた。
「ことばには、裏ちゅうもんがごわす。まかり違っても御家老が、あん三人ば斬れと、口に出していわれる筈はなか」
秋月主膳は、今胴の間で、酒をくらって太平楽をならべ立てている。ことばじりをとらえて、けんかを吹っかけるならこの際だ。幸い三上彦四郎も、布施勘之丞もそばにいる。三人いっしょに斬ってしまおうと、八弥太はいった。殺気十分、八弥太はすでにその気になっている。
「いかん、そげんこと、絶対にならん」
「辱しめを受けたから、やむなくたたっ斬った。ことは簡単じゃ。責めはおいがとる。おいが腹かっさばけばそれで一切けりがつく」
そうなれば、船をもどすしかあるまい。薩摩士風のきびしさは、天下周知のことだ。謀殺と見られる筈はないと八弥太は力説した。
「おはん、本気でいうのか」
「本気じゃ」
ひとりでに声が高くなっていた。伊織までが思わずつりこまれた。

「うろたえるな。そげん単純な考えで、一切のけりがつくくらいなら、おはんの指図など受けるまでもなか。おいがやる。鎌田どん、すこし頭を冷やすがよか」
へたなことをすれば、島津七十七万石の、命取りにもなりかねんぞと伊織は説いた。
「命取り……。では、あいつらを黙って琉球まで案内することは、薩藩の命取りにはならんちゅうとでごわすか。公許の額の何倍にも及ぶ唐人との密貿易、のっぴきならぬ証拠をつかまれたら、いったいどげんするつもりでごわす」
「証拠をつかまれるくらいなら、こんどのお役目、引き受けたりはせん」
「おはんのことじゃ。いかにもぬかりはごわすまい。が、ものには、万が一ちゅうことがごわすぞ」
このおれに限って——伊織は断乎いい切った。むろん八弥太は納得しない。その策を聞こうとつめ寄った。いう必要はなかと伊織はつっぱねた。八弥太はいきり立った。
「介添たるおいにいえんとでごわすか。この鎌田八弥太が、それほど信頼できんとでごわすか」
「そげんわけじゃなか。ただおいは、調所さまにいいつけられた通りを、忠実にやるだけじゃ。三上、秋月、布施、ご三名に、琉球貿易の実情をお見せした上で、ふたたび鹿児島へ無事つれもどる。それだけでごわす」
そのために、こんどの大役を仰せつかって以来、連日調所のもとにあって、絶対に手落ちのないよう指示を受けていたのだと伊織はいった。八弥太は一瞬つまったが、すぐまた気をとり直して、たたきつけるようにいった。

「わかった。しょせんおはんな臆したとじゃ。きまっちょる」
「なに、臆したと」
聞き捨てにできることではない。伊織も色を変えた。八弥太はずけずけといった。
「女房をもろうたちゅうだけで、人間こうも変るもんか」
「黙れ」
「いう。いわせてもらう。おはんな、おいの腹一つですまんときのこと、考えちょるに違いなか。自分まで腹切るはめになってはと、そいがおそろしかとじゃ」
「鎌田ッ、いうてよかことと、悪かことがあっぞ」
伊織は顔をまっかにした。が、すぐわれをとりもどした。握りしめていたこぶしをゆるめた。
「もうよか。なんとでもいうがよか。だが、よいか鎌田どん、しかと覚えちょってもらおう。御家老の命を受けたのはおいじゃ。この有川伊織じゃ。おはんじゃなか。おはんな、おいの介添に過ぎん」
「そうか。そっちがひらき直るなら、こっちにも考えがある」
八弥太はくるりと背を向けて、大またに立ち去りかけた。
「待て、鎌田どん」
伊織は八弥太に追いすがり、背後から武者ぶりついた。八弥太も振りかえって、もみあいになった。伊織は、相手の腹に思い切りこぶしを入れた。ぐったりと八弥太は崩れた。人が集ってきた。

「この男を船底へ閉じこめちょけ」
下役の一人が聞いた。
「どげんしたとでごわす」
「命令に服せんからじゃ」
吐き捨てるように伊織はいった。
調所はそこまで語って一息ついた。頼母は膝を乗り出した。
「鎌田が話したとでごわすか」
「いや、鎌田は一言もそのことにはふれん。有川どんと、口論などした覚えはなかといい張った」
調所は水夫の清兵衛から聞いた。手のあいていた清兵衛は、積荷のかげにいて、二人のいいあらそいを聞いてしまったのだという。有川さまも、鎌田さまも気づかれなかった。出るに出られず当惑した。清兵衛は調所にそう語った。もちろん、いま一人の水夫平助と、賄方の六蔵はなにも知らない。
その日は、陽が傾くころから、波のうねりが目に見えて高くなり、船の揺れが強くなった。胴の間にいてもそれがわかった。秋月主膳は、土気色の顔をしてはいずりまわり、げえげえ吐いた。伊織が薬を与えると、いくらかおさまったらしい。布施勘之丞も多少気分が悪くなった。吐きまではしなかった。
甲板から段ばしごをおりると、せまい通路がたてに走っており、その左右に、いくつもに仕切

られた船室がある。中央部の一つが、三上、秋月、布施、三名の部屋で、その両隣りが彼らの供の者にあてられていた。伊織の部屋は、通路をへだてて、三上らと向い合わせであった。伊織のほかにも、何名かが、その部屋を使った。

船は予定よりだいぶおくれていた。風向きが変ったせいである。夕方、六蔵は通路を通った。その時、伊織は三上らの部屋にいた。苦しげな秋月主膳の声が、六蔵の耳に入った。

「おい、いつ港に着くのだ」

「明朝、奄美大島の名瀬という港に入る予定でござる」

伊織の声であった。こんどは、三上彦四郎の声がした。

「山川港を出る時は、今日の夕方には着くということではなかったかな」

「申しわけござらぬ。なにぶん、風しだいでござって」

「だいぶ、揺れがはげしくなったようだ」

布施勘之丞が、元気のない声でつぶやいた。

「気のせいでござろう。このあたりまでくれば、これが普通でござる」

しばらくして、ではこれにてまえはという伊織の声がした。六蔵はあわててそこを去った。あとで、伊織の部屋へ食膳を運んでいったが、そのとき伊織は、鈍い灯りのもとで日誌らしきものをしたためていた。

「わかったのは、これくらいだ」

と調所はいった。以上は、六蔵と布施勘之丞の話をまとめたものである。平助は、伊織のことについて、あまり知ってはいなかった。頼母はたずねた。

「遭難の状況はどうでござろう」

「くわしくはわからぬ。とにかく、あっという間のことだったらしいのでな」

船が暗礁に乗り上げたことは間違いない。平助と六蔵はそういった。なにしろ、めずらしくぐっすり寝こんでいた。目をさましたときは、大きく船が傾き、もう水がなだれこんでいた。暗くてなにもわからなかった。寝こんでいたのは清兵衛も同様である。風向きが変ってはいたが、櫓を使うまでのことはなかったので、水夫たちのうち、起きている者はごくわずかだった。しかも皮肉なことに起きていた者は一人も助かってはいない。

暗礁に乗り上げたと思うと、清兵衛もいいはしたが、彼は、

「もしかすると、鎌田さまが……」

と、微妙なことをもらして、あとはことばを濁した。共通していることは、すさまじい地獄図の中から、

「三上さま、秋月さま、布施さまをお助け申せ。ご三名を失っては、わが島津家の面目が相立たんぞ。ご三方をお助け申せ」

と絶叫する、有川伊織の声を聞いたことである。そして布施勘之丞は、暗夜の波間で、伊織が船板にすがらせてくれたことを、はっきり覚えていた。伊織の叫びは鎌田八弥太も聞いている。八弥太は、遭難の原因を、ためらいなく座礁といい切った。

「それにしても、杉戸仁左衛門が……」

つぶやくように頼母がいった。

「そのことじゃ」

と調所もうなずく。船頭杉戸仁左衛門は、伊織がとくに選び出したもので、お船手方切っての熟練者であった。琉球への航路は、わが家の庭のように、そらんじつくしている筈である。

「鎌田は、伊織と口論したことは、絶対にみとめんのでごわすか」

「みとめん。天地神明に誓って嘘はつき申さぬと、断乎いいおった」

布施勘之丞に気づかれてはまずいので、いまのところ、両者を対決させるわけにはいかぬが、おそらく清兵衛のいった通りであろうと調所はいい足した。

「では御家老、船はやはり鎌田が」

「いや、そげんことはわからん」

頼母にたたみこまれて、調所は否定した。そして、

「念を押すまでもないと思うが、このたびのこと、あくまで船が暗礁に乗り上げたがためと、含んでおいていただきたい」

といった。頼母の胸中に、湧然と悲しみがあふれてきた。伊織は死んだ。もう、動かしようはなかった。

以上のことを頼母から聞かされて、千鶴は唇を噛んだ。鎌田八弥太が憎かった。船を沈めたのは、八弥太がしたことに違いない。どういう方法をとったか知らないが、たしかに八弥太がやったにきまっている。千鶴は確信した。

幕吏のあらゆる質問を想定して、それに対する答弁を、練りに練っていた伊織の姿が、声が、千鶴の胸をしめつけた。

七

おもろ丸の遭難が、正式に藩庁から発表されると、千鶴の父国分源右衛門が、まっ先に有川家へ駆けつけた。謹しんで弔意を述べる源右衛門へ、

「暗礁に乗り上げたらしく、あっという間に船が沈んだとかで、あいにく夜のことではあり、暗さも暗し、幕使三上彦四郎どの、秋月主膳どのをはじめ、ほとんどの者が波にのまれたとのことでごわした」

と、調所にいい含められた通りを告げたあと、頼母は深く頭をたれた。

「国分どん、おはんには面目しだいもなか。大事な娘御、早や若後家にいたして」

「なんばいう。いまさら、おいは、後悔なんぞ、しとりゃあせん。千鶴にしてもその通りじゃ、のう」

こともなげに源右衛門はいった。蠟のような顔の千鶴は、黙ってうなずいた。しかし頼母は、

「千鶴を若後家にするために、無理に祝言を急いだようなもんじゃった」

と、またくりごとを述べるのだった。

「よされい有川どん、そげんことをいえば、伊織が浮かばれん。千鶴は、薩摩隼人の娘じゃ、薩摩隼人の女房じゃ」

怒ったように源右衛門はいい、間もなく他の弔問客もくる筈じゃと、立ちあがって、頼母にかわり、奉公人たちにてきぱきと指図をはじめた。

あくる日、葬儀がいとなまれた。葬儀は、そこでもかしこでも行われた。藩庁からはむろん、江戸屋敷へ急使が出された。幕閣への報告陳謝もなされねばならないのだ。

伊織の葬儀には、調所笑左衛門や、鎌田八弥太も参列した。帖佐喜八郎の姿も見えた。ことに目だったのは、幕吏の一人布施勘之丞であった。布施勘之丞は、焼香の際、香をつまんでから、しばらく動かなかった。よく見ると、そのからだは、こまかくふるえていた。人々は奇異の思いにかられたが、彼が、伊織が渡してくれた船板にすがりついて、奇跡的に助かったことを思い出すと、さもあろうという風にうなずいた。

葬儀が終って、三日後、長崎に遊学中の采女が、馬を飛ばせてもどってきた。初七日の夜、まだ親類のおもだった者や、近所の者が残っているところへ、早目に辞去した、源右衛門の長男久之進があわただしくもどってきた。久之進は、調所屋敷に留め置かれている鎌田八弥太に会いにいったのだった。彼は手に書状らしいものをたずさえていた。

「御家老がわしに……」

いぶかる頼母へ久之進はいった。

「鎌田どんの遺書でごわす」

「なに、遺書……」

「最前がた、腹かっさばいたちゅうことでごわした」

頼母は一同に会釈して別室にさがったが、しばらくしてまた顔を出した。表情はすこしも変っていないようであった。二、三人が、待ち受けていたように身を乗り出した。

「なんと書いてごわした」

「調所どのにお伺いした通りでごわす」

頼母は淡々と答えた。

「鎌田も、せっかく助かったものの、自分一人生きちょくわけにもいかんじゃったと見えるのう」

国分源右衛門があわれむようにいった。それをしおに、客たちは挨拶を述べて、一人立ち、二人立ちし、最後に、国分源右衛門と久之進だけが残った。頼母が、思いも寄らぬことをいい出したのはその時であった。

「国分どん、おもろ丸を沈めたのは伊織でごわした」

采女、千鶴、源右衛門、久之進、四人の目がいっせいに頼母に集中した。

「そうじゃ。公儀役人を葬り去るため、伊織がわざと船ば沈めたとでごわす」

頼母は、調所に聞かされた、ほんとうの事情を述べてから、鎌田の遺書に及んだ。遺書の中には、伊織と争論したことを、くわしくしたためてあった。遭難の様子もしたためてある。八弥太は、船が遭難する直前まで、縄をうたれて、船尾に近い小部屋にとじこめられていたという。

屈辱にからだが燃え、目が冴えて仕方がなかったが、それでも子の刻を過ぎると、眠む気がしてきて、ついうつらうつらした。それからどのくらいたったろう。ずしんという衝撃があって、

はじかれたように目ざめたが、その時まで、船が沈むなどとは夢にも思わなかった。

全身から一時に血が引く思いをしたのは、一から十までを数えるほどの間をおいてからだったろうか。あとはどうなったか、ほとんど覚えていない。怒号と悲鳴の渦が巻きおこった。もうだめだと思ったとき、だれかが走ってきて、八弥太の縄を切った。だれだったかわからない。顔や声をたしかめるゆとりはけし飛んでしまっていた。甲板へ駆けあがりながら八弥太は凄惨な地獄図絵の中から、

「ご三名をお助け申せ」

と絶叫する伊織の声をとらえたのだった。同時に、暗黒の海が八弥太をのんだ。それから、どのくらいの時がたったか、まったく見当がつかない。われにかえった時は、一枚の船板にすがって、波にもまれていた。すぐ近くで、人の影を二つ見た。文字通り瞬間のことである。一人はたしかに伊織、いま一人は間違いなく、三上彦四郎であった。おそい、欠けた月が出ていた。伊織は、三上彦四郎の髪をつかんでいた。助けようとしているのではなかった。八弥太の頭の中を、稲妻のようなものが突っ走った。

遺書には、以上のようなことが、簡潔にしたためてあった。そして最後に、伊織どのの意を体すれば、一切自分の胸にたたんでおくべきだと思う。だが、自分にはとうていできない。そう結んであった。思うに、八弥太が、伊織と争論に及んだ覚えなしとしらを切り、船は暗礁に乗り上げたと、断乎としていい放ったのは、伊織の真意に気がついたからに違いなかった。

「策など、はじめからなかったとでごわす」

頼母はうめくようにいった。源右衛門は大きくうなずいた。千鶴の顔は、真っ青であった。伊織が調所笑左衛門に進言した策は、船を沈めることだったのだ。殺してはならぬと調所は釘を差した。そのことばの裏を、伊織は読み取ったのであろう。調所は当然、鎌田八弥太の遺書を読んだに違いない。にもかかわらず調所が、その遺書を握りつぶさず、あえて頼母に渡したのは、伊織の心を知れとのことか。

八

伊織が船をどうして沈めたか、いまは知るよしもない。船底に、なんらかの仕掛をほどこしていたのか、それとも伊織が、船頭の杉戸仁左衛門に暗礁乗り上げを命じたのか。後者とすれば、命じた伊織も伊織、敢然としてそれを実行に移した杉戸も杉戸である。しかし、委細を知るすべはなかった。

親として、わが子の覚悟も読めなかった不覚が、いまさらのように悔まれる。書置も残さなかった伊織への不憫が、頼母の胸を締めつけた。書置さえも残すわけにはいかない伊織であった。若年の上にひとり身とあっては、幕吏に対していかがであろうか。伊織はそういって祝言を急いだ。思えばそれも、絶対の死への布石であった。

千鶴のうけた衝撃は、頼母以上であった。琉球に向う前に、是非とも祝言をあげたい。伊織のことばをそのままとって、支度も十分にはととのわぬまま、いそいそと嫁いできた千鶴だった。別れの日、伊織は晴れ晴れとしていた。どこにも死のかげなどなかった。これが薩摩隼人という

ものか。とすれば、なんとすさまじいものだろう。

「琉球みやげ、楽しみに待っちょくがよか」

にこっともらした伊織の白い歯が、いまも目に残っている。千鶴は胸をふくらませて、伊織が買ってくるであろうみやげを、あれやこれやと想像したものだった。その琉球みやげが、なんと伊織の死であろうとは。

「兄者もむごいことをなされた」

采女がぽつんともらした。藩命によって長崎へ遊学している、いかにも聡明な若者らしい落ち着いた声のどこかに、なじるようなひびきがある。むごいとは千鶴をさしていた。

「なんばいう采女どん、伊織どんな、島津七十七万石を救うために……」

采女とは正反対の、朴直さをむき出しにして、久之進がくってかかった。采女も負けてはいない。

「それを責めとるとじゃありもはん。おいが兄者でも、船ば沈めたに違いなか。だが、だからというて、なにも知らぬ嫂上ば……」

「ばか、故意に難破させたと悟られぬため、どうでも祝言あげる必要があったとじゃ。伊織の苦衷がおはんなわからんのか」

源右衛門は、頭ごなしに采女をきめつけた。久之進が語を継いだ。

「それに伊織どんな、千鶴ば好いちょった。千鶴もまた、伊織どんば好いちょった。はたからとやかくいうことはなか」

「好いちょるなら、なおさらでごわす」

采女の白い顔に勃然と血がのぼった。

「好いちょるなら、なおさらあげんことはできん筈。好きな女を、みすみす不幸にすると知りつつ、やみくもに祝言を急いだ兄者の気が知れん」

しだいに激してくる采女を、頼母が制しようとしたとき、それまで黙っていた千鶴が、青い顔をあげて、まっすぐに采女を見た。

「采女どの、お気持はありがとうございますが、あなたは誤解しておいでです」

「誤解……」

「わたくしは、はじめから、なにもかも承知していました。伊織どのは、祝言の前に、一切を打ち明けてくれたのです」

頼母、源右衛門、采女、久之進、四人の顔に驚きが走った。わけても、頼母はことばもなかった。とても信ずることはできない。思いあたりはさらになかった。つばさの傷癒えたすずめを籠から放ってやったあの朝にしてもそうだった。空に吸いこまれるようにすずめが飛び立ったときの、千鶴の美しいまなざしを、頼母ははっきり覚えている。あの澄んだ眸が、夫が生きてふたたび帰らぬことを、あらかじめ知っている若妻のものといえるだろうか。

違う、違う。頼母は否定した。だが、千鶴ははっきり知っていたといった。頼母はそれでも、いま一度、念を押して見ずにはおられなかった。

「千鶴、そなたはまこと、半月とはせぬうちに、死んでいく伊織と、承知の上で嫁いできてくれ

たのか」

「はい」

千鶴はやはりうなずいた。

「でも、これだけは申し上げておきます。伊織どのは、わたくしを利用なされたのではございません。死ぬために、わたくしをめとられたのではなく、死なねばならぬから、かげろうのように残りすくない命ゆえ、矢も楯もたまらず、千鶴をほしいと思われたのでございます。だからこそ、だからこそ、わたくしは、つかの間の夫婦と承知の上で、嫁いで参ったのでございます」

千鶴の目から、涙があふれた。知っている筈がない。知っている筈がない。伊織がいう筈がなかった。あのような大事を、女の千鶴などにもらす筈がなかった。それでも、知っていたと、いわずにはおれなかった。でなければ、伊織が、そして、自分自身が、あまりにもみじめだった。

その夜おそく、一人になってから、千鶴は嗚咽した。わたしは利用されただけなのか。幕閣をあざむくために利用されただけなのか。伊織の胸をたたいてみたい。だが、その伊織はもう、この世の人ではなかった。

采女は長崎へ去った。去りぎわに、くれぐれも父を頼むと千鶴にいったが、折目正しくもの静かなその態度のどこかに、なにか、一種冷ややかなものが感じられた。あなたは、実にしっかりしたお方だ。そんな皮肉ととってとれないこともなかった。それでいいと千鶴は思った。

夜、一人仏間にこもっていると、ふすまがあいて、頼母が入ってきた。いつかと同じであった。いや、違う。あの時は仏間ではなかった。そして、頼母も千鶴も、こんなにやつれてはいなかった。

「そなたは、さすがに国分源右衛門の娘だな」

思い出したように頼母がいった。感嘆というよりも、皮肉にとれた。非難といったがよいかもしれない。千鶴は黙っていた。つらいが、なにもいうまいと思った。いや、責めるような頼母のまなざしは、千鶴にとって救いですらあった。

千鶴は、伊織に七夜添った。たった七夜、かげろうの命のように、はかなく短い妻の座だった。しかし千鶴はもう、なに一つ打ち明けてくれなかった伊織を、憎いとも、うらめしいとも思ってはいない。むしろ哀れであった。たとえ島津のお家のためとはいえ、七十余名の人間を、親があり、妻があり、子がありする血の通った人間を、おもろ丸もろとも道づれにしたのである。苦しくないわけがなかった。おそらく、焦熱地獄にもまさる苦しみだったに違いない。千鶴という一人の女をあざむいた苦しさなどとは、比べるべくもない罪の苛責であったろう。

死に向って旅だつ二日前、傷を負うた一羽のすずめにしめした伊織のいたわりを思うと、千鶴はことばもない。七十余名の人間の命を失わせようとする者が、すずめ一羽を救うたからとてなにになる。千鶴にはとてもそうはいえなかった。鬼に化身しなければならぬ身であったからこそ、すずめ一羽を見殺しにできなかった。そうとってやりたい。とはいえ千鶴は、切に伊織の心が知りたかった。わたしは利用されただけなのか。わたしへのみれんなど、伊織には、つゆもなかったのだろうかと……。

あくる日千鶴は、頼母の許しを得て、賄方の六蔵をたずねた。六蔵のいうことは、調所を通じ

て頼母が聞いたこととは、すこし違っていた。六蔵が、食膳を持って伊織の部屋にいったとき、伊織は、反古紙のようなものに筆を走らせていた。同じような字ばかりだったように思うと六蔵はいった。あっと、千鶴は声をあげそうになった。

「その同じ字というのは、こうではありませぬか」

指で、左のてのひらに、千鶴という字を書いた。さあと、六蔵は首をかしげた。千鶴はなんどもくりかえした。それでもわからない。六蔵は近所から硯を借りてきた。千鶴は懐紙をとり出して、千鶴と書いた。六蔵はやはり首をかしげる。千鶴、千鶴、千鶴、伊織はそう書いたのだと思う。だが六蔵は思い出してくれない。字は読めなくとも、形くらい覚えているだろう。わらにもすがるように、千鶴はくりかえし、字体を変え崩しかたを変え、千鶴、千鶴、千鶴と書いた。

「わしは文盲でごわすので」

気の毒そうに六蔵はいった。

あきらめて帰宅すると、広い屋敷の中がしんとしていた。頼母の居間へ足を踏み入れて千鶴は立ちつくした。頼母は、腹を切って突っ伏していたのである。見事な十文字腹であった。一通の遺書があった。

――伊織儀ふつつかにして、大切なる藩船をあやまり沈め、多くの人命を損じ、あまつさえ、三上、秋月両幕使を死に至らしめ候段、重々申しわけこれなく……。

即日にも腹を切ってお詫びすべきであったが、あとの始末かれこれあって、今日に至った旨、書き添えてあった。

急を聞いて駆けつけてきた国分源右衛門は、感動に身をふるわせて、

「画竜点睛じゃ。この父にしてこの子あり、まさしく薩摩隼人の典型じゃ」

と叫んだ。その時、おそろしいことが、千鶴の心にひらめいた。もしかすれば、父の源右衛門は、最初から伊織の心を見ぬいていたのではなかろうか。実の父頼母さえ悟らなかった伊織の心を、見通していたのではなかろうか。とうから見ぬいていながら、

「有川のせがれもせっかちじゃ」

などと笑っていたのではなかろうか。千鶴のからだがふるえはじめた。あらたな悲しみが、胸にこみあげてきた。自分に向けられた千鶴の目に、はげしい憎しみがたたえられているのを、すこしも気づかず、国分源右衛門は、

「画竜点睛じゃ」

と、もう一度つぶやいた。

奸臣と人のいう

一

月はなく暗かった。それでいて、おぼろ夜のように煙った感じがするのは、夜空を濁して降りしきる火山灰のせいに違いない。ときどき、腹の底まで揺すぶって、桜島が鳴動した。

平の馬場の宏壮な調所屋敷に忍びこんだ愛甲民部は、さっきから、からからにのどがかわいていた。

民部は二十七。家中でも指折りの示現流の使い手だが、これまで、実際に人を斬ったことはなかった。それが、今夜はじめて人を斬る。それもただの男ではなく、島津七十七万石を寝せ起こしするとまでいわれる、家老調所笑左衛門を斬るつもりなのである。

「愛甲どん、うまくやってくれ」

「斉彬さまのご運が開けるかどうかは、おはんの腕一つにかかっているのだぞ」

「斉彬さまが、家督ご相続なさらぬかぎり、おどんらの世に出る時はなかとじゃ」

同志の市来新八や薬丸伝之進らの声が、耳もとによみがえった。

――まあ、見ちょるがよか。

民部は、心の中で答えた。

調所笑左衛門は、ことし七十三になる。さほど雄偉な体軀の持主ではないが、若いころは相撲が好きで、暇さえあれば、だれかれとなくとって投げていたといわれるだけに、筋肉質のしまったからだをしている。かなり力もあった。だが、若い愛甲民部の敵ではないはずだった。

いま薩摩では、藩内がまっ二つに割れていた。当主島津斉興を立てる者と、世子の斉彬を奉ずる者、この二派であった。斉彬は、若いころから英明を知られていたが、父の斉興は、かえってそれを喜ばず、愛妾お由良が生んだ久光に家督を譲るつもりで、一向に隠居をしなかった。そのため斉彬は、すでに四十歳となっても、いまだに部屋住みのままであった。

「これではあまりにもおかわいそうじゃ」

斉彬派は斉興を憎んだ。といっても、直接斉興にほこ先を向けることはできない。いきおい、斉彬派の人々は、斉興派の首領格と見られる調所笑左衛門に、ひたすら憎しみを浴びせたのである。

先々代島津重豪の、放漫な積極政策がたたって、薩摩藩は窮乏のどん底にあえぎ、文政の末ごろは、借財は、五百万両にものぼっていた。しかも藩の歳入は、十四万両そこそこに過ぎず、利息を支払うにも足りなかった。それを調所は、わずか十年あまりのうちに、辣腕をふるって見事に立て直した。いまでは藩庫に二百五十万両のたくわえさえできている。したがって、斉興が調所を寵用するのは当然だったが、斉彬派は、

「わずかな功に誇って、専横目にあまる」

と調所を非難した。町奉行近藤隆左衛門、鉄砲奉行山田一郎左衛門、船奉行高崎五郎右衛門、物頭赤山靭負、同じく名越左源太などがそうであった。

だが、かるがるしい行動は、かえって斉彬に累を及ぼす。彼らは、慎重にことを進めようとした。それが愛甲民部らにとっては、大いに不服で、

「一思いに調所を斬れ。調所さえ斬ってしまえば」

と、非常手段に訴えることをきめ、民部が刺客にえらばれたのであった。

民部は、離れを捜した。笑左衛門は、たいてい離れにこもっているというわさであった。笑左衛門は、例年どおり、間もなく江戸へ向かうことになっている。その前に、斬ってしまう必要があった。

暗い庭を、民部はそろそろ進んだ。金にあかせて粋をつくした庭のたたずまいが、夜目にもそれとわかった。

「殿様のお住まいよりもりっぱだ」

といわれていた。

離れには、灯りがともっていた。縁の雨戸は、閉めてはない。十月下旬の夜とはいっても、南国鹿児島は、まだ冷気を覚えるほどではなかった。

手水鉢のかげまで近づいて、民部は、ようすをうかがった。部屋の中では、そろばんの音のあいまに、帳簿をめくる音がしている。

「もうおそうございもす。そろそろ、おやすみなさいもしては」

妻女の声がした。笑左衛門は答えず、相変らずそろばんの音がつづいた。そのあと、妻女がまた、なにかいっているようだったが、よく聞きとれなかった。

「わたくし、気がかりでございもす……」

こんどは、察しがついた。

ここ二十年来、笑左衛門の仕事は、判コで押したようにきまっていた。十月の末に鹿児島の城下を立ち、江戸へ着くのが十二月の初め、あくる春江戸屋敷を出て、大坂の蔵屋敷に立ち寄り、商人どもと談合、薩摩米と、大島産の砂糖の相場が定まるのを見届けた上、ふたたび鹿児島にもどってくるのが、七月か八月ごろになる。

「調所さまは、道中かたときも気をぬかれぬ。絶えず諸国の物産に目をとめなされ、ご精励ただ感嘆のほかはなか」

笑左衛門の片腕として、常に財政立て直しに協力してきた海老原宗之丞などは、口をきわめて賞めたたえるが、

「茶坊主あがりの成り上り者め」

と、ののしる者も多かった。

ことに笑左衛門が、数年前、この平の馬場に、藩侯の居館をはるかにしのぐ、豪奢な邸宅を構えてからは、

「調所の僭上もここにきわまる」

と痛論する者があとを絶たない。それが気がかりでならぬと、妻女はいうのらしかったが、笑

左衛門は平然と答えた。

「いちいち気にやむことはなか。いいたいやつにはいわせておけ」

「そんなおっしゃりかたが、わたくし、いやなのでございもす。率先して粗衣粗食に甘んじ、財政立て直しに、久しく専念なされたあなたさまらしくもない、うってかわった近ごろのおごり、とかくの非難が出るのも、無理からぬことと思いもす」

「ハハハ、これは手きびしいの」

笑左衛門は、笑って取り合おうともしなかった。反省の色など少しも感じられない。妻女はなおもいった。

「世間はあなたさまを、鬼と申しているそうでございもす」

「それを責めるのか」

「いちがいに、責めるつもりはございもはん。ただ……」

「ただ、いけんちゅうとじゃ」

「わたくし、大殿様、殿様のご難渋、ご扶持もとどこおって、朝夕の暮らしもいとなみかねた家中のかたがたを救うため、鬼となられたあなたさまのお働き、ごりっぱと存じておりもした」

「おりもすではなかとじゃな」

「いまのあなたさまは、お変りなさいもした。おそろしいほど、お変りなさいもした。以前のあなたさまは、お殿様のお住まいをしのぐような、豪奢な屋敷なぞ、望まれるお方ではなかったはずでございもす」

笑左衛門の声が、急にとがった。

「よけいなことを申すな。以前は以前、いまはいまじゃ。何人(なんぴと)といえども、いまのわしの多少のぜいたくに、文句をつけるすじあいはなかはず」

――くそっ。

握りしめた民部のこぶしに、いっそう力がこもった。妻女の声はしなかった。

「もうよか。さがって先にやすんじょけ」

笑左衛門の声はそれでとぎれ、ふたたび、そろばんの音と、帳簿をめくる音がしはじめた。

障子があいて、妻女は母屋の方へ去っていった。

二

「だれだ」

低いが鋭い笑左衛門の声と同時に、民部は静かに障子をあけた。肩には、火山灰がかかっていた。

「愛甲民部でごわす。お家のため、命を頂戴しもすぞ」

いきなり斬ってかからず、名乗りをあげてから刀をぬいたのは、自信がそうさせたといえる。一つには、天誅を加えるという気負いのためでもあった。

天井は高い。示現流独特の八双の構えは十分とれる。それとも、突きで仕とめるか。つかの間、民部は迷った。その迷いが、すきとなった。

「待て。待ってくれ、愛甲」

笑左衛門は、とっさに民部の手もとにとびこんで、必死に武者ぶりついた。不意をうたれて、民部はふりほどくことができない。笑左衛門は、おそろしく力が強かった。七十三にもなるとは、とうてい信じられないくらいであった。無言の争いがつづいた。民部の方が逆に床柱に押しつけられた。

「民部、話を聞いてくれ。頼む」

声を殺して、笑左衛門はいった。

「この期に及んで」

「ばかな。命が惜しくば、とっくに大声をあげておる。寝ずの番の者どもに、悟られまいとしとるのがわからんのか」

民部は、一瞬、耳を疑った。笑左衛門は、なおも力をゆるめず、民部を柱に押しつけたまま、

「愛甲どん。おはん、この調所が、薩藩のためにどれだけのことをしてきたか、よう存じておるはずじゃ」

「存じておりもす。存じておっても、なおかつ斬らねばなりもはん。功績は功績、罪は罪でごわす」

民部の腕に、また力がこもった。

笑左衛門は、安永五年、川崎家の次男として生まれ、名を良八といったが、十三の時、調所清悦の養子となり、表坊主として出仕、名も笑悦とあらためた。それが先々代島津重豪にみとめら

れるきっかけだった。

三十八歳の時、髪をたくわえて、はじめて笑左衛門と名乗るようになったが、以来、お小納戸頭取、ご用取次見習、町奉行、お側ご用人と累進して、いまでは家老職をつとめている。それも才能があればこそである。でなければ、単に藩侯の引き立てだけでここまでのしあがることは、とうていできなかったであろう。

ことに財政立て直しの手ぎわは、あざやかだった。隠居の島津重豪と、その孫にあたる当主斉興の命を受けて、笑左衛門が、財政改革の第一歩をふみ出したのは、文政の末で、五十の坂を越えて間もない、お側ご用人時代である。

そのころ、薩摩藩の窮乏は底をついていた。藩主の手もとに、二分金がたった一枚しかないことさえあったというのは、有名な話で、定府の藩士の俸禄など、一年以上もとどこおった。それほどの財政難を、笑左衛門は見事に立て直したのである。

笑左衛門がまずやったことは、奄美大島、喜界島、徳之島、いわゆる奄美三島の砂糖の総買入れ——すなわち、今日でいう専売制であった。すさまじい搾取政策だった。

島人は泣かされた。自分が作った砂糖でありながら、自分勝手に売ることもできない。それまでは、所定の量目だけ藩庁に納めればあとは自由に売りさばくことができたのが、こんどは、ただの一斤でも、気ままにできなかった。

落ちている砂糖きびを拾ってかじったといっては、幼い子が棒しばりの罰を受けた。作用人は、きびの切り株が高過ぎるといっては、首かせをはめられた。砂糖を樽づめにする時、指先についた、わずかな砂糖をなめたといっては、鞭で打たれた。こっそりと、砂糖を横流ししたことでもわかれば、たちまち打ち首である。

砂糖地獄と呼んでもよかった。

かしゅてしゃんてん
誰がためなりゅり
やまといしぎゅらが
ためどなりゅる

こんな歌がうたわれた。

これほど難儀苦労して働いたとて、いったいだれのためになる。薩摩のちょんまげのためになるだけじゃないか。こんな意味であった。米三合で取り上げた砂糖一斤が、大坂では米三升になった。

つづいて笑左衛門は、琉球を舞台に大仕掛けな唐人との密貿易を行なった。はじめは幕府の公許をとった。

買入れる唐物のおもなものは、鬱金、琥珀、人蔘、絹織物などで、おそろしく利益があがった。公許の額は、年額銀一千七百二十貫、金子にして二万八千余両までと制限されていたが、笑左衛門は、それをはるかに上まわる取引きを行なった。

しかし、どれほど利益があがっても、莫大な借財があっては追いつけない。そこで笑左衛門は、思い切った荒療治をやった。

当時薩摩藩は、京、大坂、江戸――三都の商人からの借財が、つもりつもって五百万両に達していたが、その大半は大坂商人に借りたものであった。笑左衛門は、大坂の蔵屋敷に乗りこむと、証文を書きあらためると称して、大坂商人に差出させた借用証書を、残らず焼き捨ててしまった。

たちまち、大さわぎになった。

「調所さま、約束が違います」

「そうや。証文書きかえてつかわすいやはるさかい、信用してお預けしたんだす。それを灰にするとは、いくらなんでもあまりやおまへんか」

「いったい、どないしてくれはります」

血相変えて押しかけてきた商人たちに、笑左衛門は開き直った。

「その方らの勝手しだいじゃ。この調所を斬るなり突くなり存分にいたせ」

「そんな無茶な」

「調所さまを存分にしたかて、どうにもなりはしまへん」

「ではこの際乗りかかった船、わしにまかせてくれるか」

笑左衛門は、かねて用意しておいた新しい通帳を渡して返済の方法を切り出した。元金一万両について、年四十両、二百五十ヵ年賦ばらい、しかも利息はすべて切り捨てという理不尽な条件であった。むろん、おいそれと承知するはずがない。しかし笑左衛門は、ねばり強く交渉をつづけて、とうとうその条件をのませた。

「薩摩産の黒糖を独占して扱わせる」

という切り札が、最後にものをいったのである。それでも、大坂商人の中から、何人かは、首をくくる者が出た。数年の間は、島津斉興の行列は、大坂に泊ることができず、参覲の際の泊りを、一時西ノ宮に変更したくらいであった。

幕閣も問題にしかけたが、うまくもみ消した。結局、調所のふところ刀のような存在であった、出入り商人の浜村屋孫兵衛が、大坂から追放されるということで、やっとおさまりがついた。この時の思い切った荒療治で、薩摩の財政は立て直り、いまでは、藩庫に二百五十万両のたくわえまで残すようになったが、それもすべて笑左衛門の力によるものである。それは民部もみとめている。

だが、奸婦お由良に与して、斉彬の家督相続をはばんでいる点は、絶対に見のがすことはできない。

「許さぬ。あくまで許さぬ」

民部の顔はまっかになった。

三

笑左衛門の顔が苦しげにゆがんだ。老人の力にはかぎりがある。最後には、民部の若さがもの

をいう。力がつきる前に、納得させねばと思うのであろう。笑左衛門の顔に、あせりが見えてきた。

「愛甲どん、頼む。調所の一命、あとしばらく預けてくれ。時がくれば、この命、かならずおはんにくれてやる」

「まだそげんいいのがれを」

「違う。いいのがれではなか。お家のために頼むとじゃ。調所を、江戸へ行かせてくれ。調所を信じてくれ。おはんも知っておろう。わが藩が、公許の額をはるかに越える密貿易を行なっていることを」

それが幕閣にもれたのだと、笑左衛門はいった。

「捨ておいてはお家の大変、ここはなんとしても、たとえ黒を白といいくるめても、申し開きをせねば相ならん。幕閣のきびしい取調べを受けて、見事申し開きのできる者が、わしをおいてほかにあるか。なか。絶対になか。そのためにも、わしはいま死ぬわけにはいかんとじゃ」

さすがに、民部は動揺した。

「愛甲どん。望みとあらば、命の借用書、書いておこう」

「密貿易が幕閣にもれたという証拠、たしかにごわすか」

「ある。いま見せてやる」

はじめて力をゆるめて、笑左衛門は、机の前にもどった。民部は、ともかくも刀を鞘におさめた。笑左衛門にわしづかみにされた、右の手首がどす黒くなっている。

「これを見るがよか」

ぶあつい書類つづりの中から、二通の書状をとり出して、笑左衛門は民部に渡した。その書状は、江戸屋敷と、大坂の蔵屋敷から、ほぼ前後して、早飛脚で届けられたものであった。

「わしの片腕となって働いてくれた、中嶋屋喜三郎が、隠密に二重帳簿を盗まれてしもうたとじゃ」

中嶋屋喜三郎は、まだ三十をいくつか過ぎたばかりの若さだが、薩摩屋仁兵衛、油屋吉右衛門らとともに、鹿児島の物産を専門に扱う、薩摩問屋の一人であった。しかも、家のしきたりまで破って、薩摩の女を妻に迎えたほどの島津びいきでもある。

喜三郎の名が出て、民部の顔色がかすかに動いた。一度も会ったことはないが、うわさは聞いている。それに、無縁の人間でもなかった。喜三郎の女房の千世は、民部のいとこなのである。

笑左衛門がはじめて喜三郎と会ったのは、天保七年だった。五百万両の借財を、荒療治でけりをつけたあくる年である。

その年の春、笑左衛門が例年どおり、江戸屋敷を立って大坂の蔵屋敷に着いた時、薩摩問屋の長老格である薩摩屋仁兵衛が、一人の若者を引き合わせた。

「中嶋屋喜右衛門の親類筋にあたる、浜田屋の三番目のせがれでおります」

こんど、中嶋屋の養子になることがきまったから、よろしく頼むと仁兵衛はいった。それが喜三郎だった。

「浜田屋はどうしちょる」

「おやじは、首をくくりよりました」

他人ごとのように喜三郎はいった。

不意に、苦いものが、笑左衛門の胸を突きあげてきた。浜田屋は、ことによく島津家につくした男だった。身代ぎりぎりまで、金を用立ててくれた。その浜田屋にも、笑左衛門は、ためらいもなく、二百五十ヵ年賦ばらいを押しつけたのである。気落ちした浜田屋は去年の暮、とうとう首をくくり、あとは、喜三郎の兄が、ほそぼそと家業をつづけているという。

「わしを怨みたいであろうな」

「いいえ、そんなことはおまへん。それよりも、わてはかえって、おやじがうらめしゅうおます。あれしきのことで、気落ちして首をくくるなど、大坂商人の風上にもおけん、ど根性なしだす」

喜三郎は、若い眸をきらきらさせて、見事にいいきったものだった。そして、にっこり笑った。

「調所さま。死んだおやじの仇討ちや。もうけさせてもらいまっからな」

中嶋屋を継いだ喜三郎は、きびきびと立ち働いた。密貿易品の荷受けや売りさばきも、たくみにやってのけた。薩摩堀に船が入るたびに、目を光らせている、大坂町奉行所の唐物方同心にも、すきを与えなかった。

帳簿も完璧だった。どこをつつかれても、ぼろを出す気づかいはなかった。みるみる身代が太った。やがて中嶋屋喜三郎は、調所笑左衛門にとって、いや、島津家にとって、なくてはならぬ存在になった。

家つき娘だった女房のみなが死んだのは、そんな時だった。あとに、喜八とすみという幼い二人の子が残った。後添いの話が出ると喜三郎は、

「もうけさせてもらえるのは、薩摩さまのおかげや。そやから、後添いには、薩摩の女衆をもらいたい」

といい出した。中嶋屋の血が切れると、親類が反対したが、

「中嶋屋の血は喜八とすみに流れてます」

といって聞かなかった。こうして、江戸詰めの藩士で、斉興派でも、斉彬派でもないと見られている、谷山半太夫の娘千世が、後妻に迎えられたのである。千世ははじめ、商人の後添いなど死んでもいやといっていたが、喜三郎の気骨にほれこんだ半太夫が、

「商人とはいえ、薩摩隼人に劣らぬ男じゃ」

と強引に千世を説き伏せた。

夫婦仲はしっくりいった。それに、谷山家から千世についてきた新助という男が、意外に商才があって、たちまち喜三郎の気に入られた。喜三郎は、しまいには、二重帳簿まで新助にまかせるようになった。だれにまかせるよりも安全だった。薩摩生まれの新助なら、薩摩藩の生死にかかわる密貿易の秘密を、もらす気づかいはなかった。

ところが、その二重帳簿の一部が、つい最近、何者かに盗み去られてしまったというのだ。蔵屋敷からの書状では、まだそれ以上のことはわからず、笑左衛門に、一日も早く上坂してもらい

たいとあるのみだった。

笑左衛門は、硯を引き寄せて、ゆっくりと墨をすりはじめた。命を預けてくれるであろうなと、目が語っている。答えるかわりに、民部はいった。

「てまえ、千世とはいとこ同士でごわす。さればこのたびのこと、無縁ではごわはん」

千世の夫、中嶋屋喜三郎の油断から引きおこされた大事なら、あなたを斬るわけにはいかない。そんな意味であった。

「もっとも、千世とは、久しく会うたこともごわはんが……」

千世の父谷山半太夫が、江戸詰めになる前だから、七つ八つのころの千世しか覚えていなかった。

笑左衛門は、耳にとめたのか、とめないのか、真剣なおももちで筆をとり、

借用証

一、生命一人分

右正に借用仕り候也

うんぬんと、さらさら書き流し、嘉永元年十月二十五日と、日付を入れたあと、署名をして花押をし終った。

「これでよいな」

うなずいた民部は、

「ただし、条件がありもす」

「条件……」

「ぶじ申し開きなった節は、斉彬さまご家督のこと、おはからい願いとうごわす」

六十歳近くなっても、まだ隠居しようとしない、当主斉興を説得して、斉彬の家督相続を実現させよというのである。

だが、笑左衛門は一蹴した。

「ばかな。そげんことはできん」

斉彬の曽祖父で、舶来かぶれした栄翁島津重豪の放漫な政策が、薩摩の財政に極度の窮乏をもたらせたのだ。その栄翁譲りで舶来ごのみの斉彬などに相続されては、苦心の末に立て直した財政が、またぞろ火の車にもどるおそれがある。

「絶対にそげんことは許さん。この調所の目の玉の黒かかぎりは……」

「ならば斬りもすぞ。命は貸しもさんぞ」

「おお、斬れ。密貿易の申し開き立たず、島津のお家に大事が及ぶともやむを得ん。斉彬さまのご相続推し進めるくらいなら、お家をつぶしたがましじゃ」

「調所どの。おてまえは、それほど斉彬さまをお憎しみでごわすのか」

「憎んではおらぬ。それどころか、あっぱれ名君のお器とおみとめ申しておる」

老中の阿部伊勢守正弘や、斉彬の大叔父にあたる筑前侯黒田斉溥、あるいは宇和島侯伊達宗城らが、斉彬の明敏に望みを托して、なんとか当主斉興を隠居させようと画策していることも笑左衛門は知っていた。

一昨年――弘化三年五月、旗艦クレオパトラ以下のフランス艦隊が、那覇港外にあらわれ、琉球政府に通商を求めて、大さわぎになったことがある。その時幕閣は、当主斉興をさしおいて、世子斉彬に帰国を命じた。それも斉彬がいかに高く幕閣に評価されているかを明らかにしめしている。

「だが、それとこれとは話が別じゃ」

笑左衛門は、あくまでも斉彬の相続を阻止する腹であった。

「それが不服ならば、わしを斬れ」

笑左衛門は、火のようなはげしい目を、民部に浴びせた。民部は、唇を噛んだ。くやしいが、いまはまだ、笑左衛門を斬るわけにはいかなかった。

四

「おはん、そいでのめのめ、引きさがってきたちゅうとか」

まだ夜明けに間のあるころ、むなしくもどってきた民部の口から、いきさつを聞くより早く、市来新八はいきり立った。

「斬ろうと思えば斬れた。だが、お家をつぶすわけにはいかん。おいは、ともかく、調所を江戸へやる気になった」

むろん、わかってもらえるはずはない。

「ばかなこつばいえ」

「調所ば斬ろうといい出した、発頭人はおはんじゃぞ」

薬丸伝之進と伊集院作馬もつめ寄った。

「その発頭人のおいが、斬らずにもどってきた。そいだけで一切がわかっじゃろう」

自分の気持を整理して、いま一度説明したが、三人とも、てんから受けつけようともしなかった。

「やつは古だぬきじゃ。おはんな、木の葉をつかまされてきたとじゃぞ」

「わが藩の密貿易は、いまや公然の秘密になっちょる。いまさら、取調べを受けるはずなどありゃあせん」

「愛甲どん。即刻とってかえし、調所の首ばさげてこい」

民部は無言だった。

「いやか」

「いやなら頼まん。おどんらがやる」

新八がまっ先に、縁から庭にとびおりた。伝之進も作馬もそれにならった。

「待て、待ってくれ」

あとを追ってとびおりた民部は、植込みの間をかけぬけて裏木戸まで先に行き、三人をさえぎった。

「どけ」

「どかねばぶった斬るぞ」

三人は、刀のつかに手をかけた。

「斬ると……」

民部は血相を変えて、かわるがわる三人を見た。語気が鋭くなった。

「おはんら、三人がかりなら、おいの示現流に勝つちゅうとか」

新八らは、さすがに黙りこんだ。たとえ三人がかりでも、まともに立ち向かえる相手ではない。だからこそ、刺客の役を、民部一人にまかせたのでもあった。無言の時がつづいた。突然民部が両手をついた。

「おはんら、頼む。おいば信じてくれ。調所の一命、おいに預けてくれ。そんかわり、おいも江戸へ行く。密貿易の申し開きをさせた上で、あらためて調所をたたっ斬る」

ようやく、夜明けの近づきかけた空から、なおも火山灰が降りつづけていた。

その二日後、調所笑左衛門は、いつもの通り、ごく小人数の供まわりをしたがえて、あわただしく鹿児島を立った。愛甲民部が同行したのはいうまでもない。藩庁への手続きは、笑左衛門がすませてくれた。まことに、妙なぐあいであった。

笑左衛門は、とても七十三歳とは思われぬ健脚をしめした。途中で休息することなどほとんどない。歩きずくめに歩きつづけて、なにかものにとりつかれたかのようである。例年同行している家士の二階堂忠作が、ときどき小首をかしげた。

「いつもは、こうではごわはん」

四、五年前ごろから、だいぶおとろえが目立って、よく年には勝てぬともらしていたものだという。

二階堂忠作をはじめ供の者は、愛甲民部の存在について、格別気にとめている風はなかった。公用のため出府するので、便宜上同行している。そうとでも考えているようであった。

密貿易露見という重大事が、いっそう口を重くさせたのであろうか。笑左衛門は、道中めったに口をきかなかった。民部もまた黙々と歩いた。

忠作は、旅の日数を重ね、なれてくるにつれて、しきりに民部に話しかけたがった。豊前の小倉に泊った晩、忠作は、民部の方に寄ってきた。

「人間、とかく勝手なものでございもすな」

ほかには、だれもいなかった。

「どういうことじゃ」

「家中のかたがたは、以前は、てまえの主人を、神か仏のようにいうておりもした」

苦い顔になる民部に気づかず、忠作は心外でならぬといいたげであった。

窮乏の苦しみをなめつくした家中の者は、笑左衛門の財政改革が、一応の成果を見せると、たしかに神に対するごとく感謝した。しかし、それは、改革が農民と奄美三島の島人の犠牲によってのみ推し進められていたあいだのことである。

やがて笑左衛門は、さらに一歩進めて、改革の大なたをふるい、家中の武士たちのあらゆる役得を封じこめてしまった。年貢米収納の方法を、徹底的にあらためたのもその一つである。

藩士たちは、改革の波がしらを、自分たちがまともにかぶるようになると、たちまちてのひら

をかえすように、笑左衛門を非難しはじめた。二階堂忠作は、それがくやしくてならぬという。

「愛甲さま、そうではございもはんか」

忠作の声が急に高くなった。民部は、むっとした。

——一方的なことをいうな。

思わずそうたたきつけたくなるのを、やっとがまんした時、隣室から、

「忠作、よけいなことをいうな」

と、笑左衛門がしかりつけた。

大坂の蔵屋敷についたのは、十一月のなかば過ぎであった。蔵屋敷には、重苦しいものが満ちていた。

「おはん、わしのそばにおれ」

民部にそういってから、笑左衛門は、留守居役をはじめ、蔵屋敷詰めのおもな者を集めた。もちろん、薩摩屋仁兵衛や、中嶋屋喜三郎も呼ばれた。

「申しわけおまへん」

喜三郎は、両手をついてうなだれた。日ごろのこの男らしくない姿であった。さらに意外なことを、喜三郎はいった。

「調所さま。隠密は新助でおました」

「なにっ」

めったに動じない笑左衛門も、これには顔色を変えた。おいそれと、信じられることではない。が、喜三郎は、間違いないといいきった。帳簿の紛失に気がついたのは、先月なかばであった。その時まで、新助を疑う者など、一人もいなかった。

新助は、気の毒なほどしょげかえり、青い顔で頭をかかえこんで、ものもいわなかった。責めを感じているのだと、だれもが思いこんでいた。

「首でもくくられたらことや。気いつけなはれ」

善後措置に頭を痛めながらも、喜三郎は、千世にそういったくらいだった。ところが、三、四日すると、その新助が、ふらっと姿を消してしまった。

——隠密は新助やなかったやろか。

不吉な思いがひらめいたのは、その時だったと、喜三郎はいった。とやかくするうち、こんどは江戸屋敷から、密貿易の機密が、老中阿部伊勢守正弘の手に握られたらしいふしがあると知らせてきた。

もう間違いなかった。

「新助にかぎって」

といいはっていた千世も、なにもいわなくなった。

「それにしても……」

笑左衛門は、なおも半信半疑だった。新助の鹿児島弁は、まぎれもなく本物であった。よそ者が、苦心の末に覚えこんだものとは、とても思えなかった。よそ者ならば、どんなにうまく覚えこんでいても、微妙なまりの違いを不用意に見せずにはいまい。

江戸詰めになった父の谷山半太夫にともなわれて、千世が出府したのは、七つの春だった。その時から新助は、中間として谷山家に奉公した。千世とは、十一違いの十八であった。それまでは、古くから江戸詰めだった、有川四郎次に仕えていた。

四郎次は、半太夫と入れちがいに、国詰めにかわるにあたって、江戸なれぬ半太夫のために、新助を譲ったのである。それが隠密だったなどとは考えられなかった。しかし、前後の事情から推量すれば、隠密だったと見なさぬわけにはいかない。

「くよくよするな。頭をかかえこんだところで、なるようにしかならん」

一同を励まして笑左衛門は、あっさりいってのけたが、内心の動揺は、やはり隠しようがなかった。

「おはんな、いとこちゅうたな。あとで千世に会うてやれ」

笑左衛門にいわれて、後刻民部は、中嶋屋をたずねた。千世は思っていた以上に、美しい人妻になっていた。商家の女房らしい色気もある。それでいて、すっかりは商家の女になりきれず、どこかに、武家育ちのおもかげを残してもいた。

ただ、いたいたしくやつれているのは、こんどのできごとで、よほど心に傷を受けたからに違いない。

いとこ同士とはいっても、十七、八年近く会っていないのだから、初対面も同様で、

「民部でごわす。覚えていもすか」

ということばが、われながらぎごちなかった。それでも、しばらく話しているうちに、かなりうちとけることができたのは、血のつながりのせいだろう。

幸せかと聞くと、千世は、

「いい夫でございもす」

と、やや誇らしげに答えたが、すぐまた、声を沈めて新助のことにふれ、しみじみとつらさを訴えた。

「気にすることはなか。おまんさぁのせいではごわはん。調所どのにまかせておけばようごわす」

といってから民部は、調所どのという呼びかたに、畏敬の念に似たひびきがあるのに気がついて、内心うろたえた。

「これがもとで、お家の破滅になるようなことは、ございもすまいか」

千世はなおも案じた。民部は、そんな千世が不憫でならない。兄の妹に対するような、いたわりを覚えた。ほんとうは、それほど年の違いはないのだが、知るべも少ない大坂の、それも住む世界の違う商家にとついで、苦労したであろうこと、これからも、なにかとつらいことがあろう千世の身を考えると、せめて気持の上でなりと、兄がわりになってやりたい民部だった。

「おいは、調所どのといっしょに、江戸へ行く。しばらくは、そのまま江戸にとどまることになろう。なにほどの力にもなれやせんが、思いあまることでもあった時は、手紙なりとくれるがよか」

そう千世にいって、中嶋屋を出た。

笑左衛門は、五日ほど大坂に滞在した。その間、留守居役をはじめ、おもな蔵役人、それに、薩摩屋仁兵衛や中嶋屋喜三郎ら、関係者と一室にこもりきりで、対策に腐心していたが、六日目の朝になって、

「もう心配いらん。まかせちょけ」

と、笑いを見せた。たのもしい態度であった。一行は大坂を離れた。

日和に恵まれた、東海道の旅がつづいた。ところが、沼津の脇本陣に泊った夜、思いがけない知らせを持った早飛脚が着いたのである。届けられたのは、民部にあてた千世の書状であった。読んでいくうちに、民部の顔は蒼白になった。

五

笑左衛門や民部の一行が、大坂を立ったあと、千世は部屋にとじこもりがちだった。心がひどくもろくなっていた。血のつながりのある、いとこの民部にやさしくいたわられたことが、かえって、張りつめていた心をたわめてしまったのかもしれない。喜三郎に、

「調所さまは、心配いらんいやはったやないか」

といわれても、一向に気が晴れなかった。しだいに気鬱の病いのようになった。しまいには、死ぬよりほかに道はないように思われてきた。思いつめたあげく、

「千世といっしょに死んでくださりもせ」

と喜三郎を責め立てたのは、笑左衛門たちが去って、四日目の夜であった。

「てんごういうんやない」

喜三郎はとりあわず、さまざまにいいなだめた。千世は聞き入れない。死んでお詫びをするといいはった。

「死んでお詫びをするのは、調所さまの申し開きが通らんときのことや」

なだめるたびに、千世の目は、逆にだんだんに血ばしってきた。

「千世と死ぬのは、いやでございもすか」

たかぶると、日ごろはつとめてひかえている、鹿児島弁がとび出してくる。

「千世と死ぬのは、いやでございもすか」

ふたたび千世が迫った。その時、喜三郎の目が、異様に光った。

「いやや。敵の片割れと、いっしょに死ぬなどまっぴらや」

たたきつけるような喜三郎のことばに、千世は目をみはった。目の前で仕掛花火がきらめいたかと思われた。しばらく、正確な意味がとれなかった。しいんと心が冷えるのがわかったのは、さらに喜三郎が、

「そうや。おまえも敵の片割れや」

とたたみかけたあとだった。

「わいは、島津七十七万石、とりつぶしたる。刺しちがえたる。わいは、そのために生きてきたんや」

喜三郎は、つぎつぎにすさまじいことばを吐いた。

「わいは、新助が隠密かもしれんということ、二年もせんうち気いついた。それからや、仕返しを思い立ったんは。新助に、わざわざ二重帳簿をまかせたのも、島津への仕返しのためや」

千世は、口がきけなかった。喜三郎は、なおもつづけた。

「わいのおやじは、島津に殺された。おやじだけやない。何人、何十人の商人が、泣かされてきたかしれへん。わいは、その仕返しがしたかったんや」

といって、私怨だけではないと、喜三郎はいった。また、島津家に対する怨みというのも、島津家だけへの怨みではなかった。いわば島津家が代表する、大名すべてへの怨みなのである。

寛永の昔から、大名貸しによって破滅した富豪の数は非常に多い。京、大坂で名をうたわれた豪商が没落した最大の原因は、例外なく大名貸しであった。「お断り」と称する支払い拒絶によってつぶれたのが、ほとんどであった。

喜三郎が生まれるよりも、はるかに以前のことだが、京都の石河自安がそうであった。那波屋九郎右衛門も例外ではない。中には両替屋善六のようなものもあった。

両替屋善六は、京都でも有数の豪商だったが、美作の、森美作守に対する貸金がこげついたのが、破滅のもととなった。なんど催促してもらちがあかないので、しびれを切らした善六は、とうとう江戸へ出て、その筋へ訴え出た。

ところが善六は、多額の貸金に対する褒賞として、森家からいくばくかの禄を受けていた。結局、それが命取りになった。

「かりそめにも、主家を訴え出るとはなにごとか」

と訴えを却下されたばかりか、財産はすべて没収されて、両替屋はつぶれたのだ。こんな例はいくらもある。いまもなお、あとを絶たない。

調所笑左衛門が行なった、ふみ倒し同様の、二百五十ヵ年賦ばらいもその一つであった。いったんは捨ててもおけずと、大坂町奉行が乗り出したが、調所に知恵をさずけた浜村屋孫兵衛が、大坂から追放されただけで、当の島津家にはなにごともなかった。

喜三郎は、それがくやしかった。すでに、十年以上たったいまでも、忘れることができなかった。中嶋屋の養子になった日から、ずっと仕返しを考えつづけてきたともいえる。家つき娘のみなに死なれたあと、後添いに薩摩藩士の娘を望んだのも、そのための布石であった。千世の存在は、喜三郎の胸の底に秘められた復讐の念を、包み隠す役割を果たしてくれた。

もっとも、最初から具体的な報復の策があったわけではなかった。喜三郎の胸に、埋み火のようにひそんでいた怨念が、

——新助は隠密ではないか。

と気がついた一瞬に、たちまち青白い炎を吐きはじめたといったほうがよい。

「共倒れになるいうんは、大坂商人の計算にはないことや。そやけど、わいはがまんがならん。やったる。島津七十七万石と刺しちがえたる。わいを見こんで、養子にしてくれはった、喜右衛門さんにはすまんことやが、ここまで思いつめたわいの気持は、草葉のかげで、わかってくれはるはずや」

喜三郎は、目をきらきらさせた。

「島津がおとりつぶしになれば、きっと、ほかの大名かて、あわてるやろ。あくどいまねは、せんようになるやろ」

千世は、目の前がまっくらになった。もうことばも出ない。中嶋屋にとついできてこのかたのことが、走馬灯のように、千世のまわりをかけめぐった。

喜三郎はやさしかった。商家のしきたりにも、大坂のことばにもなれぬ千世を、心からいたわってくれた。だが、それは、喜三郎の本心ではなかったのだ。

——わたしは、仕返しの道具に使われただけなのか。

自分を支えきれず、くずれ落ちそうな千世を、喜三郎は、ひややかな目で見おろしていた。

民部から手渡された、ひどく文字の乱れた千世の書状を読み終った時は、さすがの笑左衛門も、かなりの衝撃を受けたように見えたが、それもつかの間だった。老いにも鈍磨されていない、笑左衛門の明敏な頭脳は、すぐさま活路を見出した。

「これこそ、天の助けじゃ。愛甲どん、この書状、わしが預かるぞ」

民部には、はじめ、その意味がよくわからなかった。

「逆手にとるのじゃ」

笑左衛門にいわれて、民部は、心の中であっと叫んだ。

隠密に奪い去られた二重帳簿は、中嶋屋喜三郎が、島津家を陥れるためにこしらえあげたもの。笑左衛門はそう主張するというのである。

ほかの者ならともかく、笑左衛門の知能と弁舌をもってすれば、さしてむずかしいとは思われなかった。

「心配はいらん。わしにまかせちょけ」

大坂を立つとき、そういった笑左衛門だがまだ確信があったわけではなかろう。ぬぐいきれぬ不安が残っていたに違いなかった。それがいま、確信にかわった。

「愛甲どん。おはん、すぐ大坂へ引き返してくれ。どう処置すべきかは、おはんの判断にまかせる」

いやもおうもない。頭からきめつけるようなことばだったが、民部は、まるで引きこまれでもしたように、

「心得もした」

と答えていた。

六

とっさに、民部の腹はきまっていた。大坂へただちに引き返して千世にいいふくめ、千世の手で喜三郎を殺させる。その上で、千世に書置を書かせ、自害させる。かわいそうだが、それしかなかった。笑左衛門の考えも、そうに違いない。

復讐の執念から、密貿易のにせ証拠を作って、島津家を陥れようとする夫の企らみに気づき、かつての主家と夫との板ばさみに、思いあまって夫を殺し、自分も命を絶った……そう仕立ててしまうのだ。

中嶋屋には、先代喜右衛門以来の、子飼いの番頭が何人もいる。彼らはおそらく、養子の喜三郎よりも、久しくつづいた中嶋屋ののれんを守ろうとするだろう。とすれば、かならず、千世に口裏を合わせてくれる。それでよい。

民部は馬を飛ばせた。

大坂に着くと、蔵屋敷には立ち寄らず、まっすぐ中嶋屋をたずねて、この前よりも、もっとやつれた千世に会った。民部は、企図がくずれたことを知った。喜三郎はすでに、中嶋屋にはいなかった。

「きのうの夕方、喜三郎は、西町奉行所に引き立てられもした」

喜三郎が引き立てられただけで、店にはなんの手入れも受けてはいない。

「蔵屋敷や、薩摩屋仁兵衛には知らせたか」

「知らせもした。調所さまにご指示を乞うまで、あわてず、ともかく家業に励んでいるようにと、お留守居はいわれもした」

「喜三郎の企らみについても、知らせとるじゃろうな」

「いいえ、それは知らせとりもはん」

心の中で、ああと民部はうめいた。千世はいま一つ、意外なことをいった。

「喜三郎は、自分で自分のことを、奉行所に投げ文したらしゅうございもす」

喜三郎が、自分で投げ文したのは、千世の口から、自分のことが蔵屋敷にもれた場合を考えての、自分を守る苦肉の策だったかもしれない。

喜三郎は、いよいよ島津七十七万石との刺しちがえを実行に移したのだ。隠密の報告と、喜三郎の口が一致すれば、もうこれは決定的である。

——そうはさせぬ。

民部は、千世に迫った。

「おまんさぁも、薩摩の女なら、とっくに覚悟はきまっちょるはずじゃ」

「どうせよといわれもすか」

「聞くまでもなか。懐剣をふところに、喜三郎と会うんじゃ、思いきって金を使えば、奉行所でも会わせんとはいうまい。会うたら、すきを見て、一思いに喜三郎を刺し殺し、おまんさぁもその場で死ぬがよか。それよりほかに、お家を救う道はごわはんぞ」

むごいと知りつつ、民部はずばっと切り出した。

「いやでございもす。そげんこと、千世にはできもはん」

「なんばいう。喜三郎はおまんさぁに、おまえも敵の片割れというたのではごわはんか。そげん男を、おまんさぁは、なんでかばうとじゃ。まだみれんでもごわすのか」

「ございもす。わたしは、いまでも喜三郎がいとしゅうございもす。喜三郎のくやしさがわかりもす……」

千世は、目にいっぱい涙をためている。

「ばかなことばいいもすな。いまさらそげんこというくらいなら、おまんさぁは、なんで早飛脚など出したのじゃ」

「わかりもはん。なんでそうしたのか、自分でも、わかりもはん……」

千世は、じっと民部を見かえした。その目は、民部を責めていた。困った時は、力になってやるといった、そのことばのかわかぬうちに、こんなむごいことが、よういえもすなとでもいうように。

民部は、思わず目をそらせた。こうなっては、もう民部の手には及ばない。どうすべきか、思案にあまった。笑左衛門に、ありのまま報告するほかはなかった。

——示現流は使えても、こげん時は、からっきし役立たずじゃ。

愛甲民部は、ふたたび馬を乗り継いで、江戸に向かった。

薩摩屋敷にたどりついたのは、嘉永元年十二月十八日の、日暮れには、いくらか間のあるころであった。

藩邸には、異様な空気が満ちていた。さほど人々が、右往左往していたわけではない。それでいて、ただごとではなさそうで、だれもが、妙に落ち着きがなかった。

出府を届け出たあとで、手近にいた一人に、笑左衛門のいどころをたずねると、ちょっとためらってから、

「お呼び出しを受けて、老中阿部伊勢守さまのお屋敷にいかれもした」

と答えた。

民部は、ひとまず伯父の谷山半太夫の長屋にいった。半太夫は、笑左衛門のすすめで、千世を中嶋屋にとつがせはしたが、斉興派でも、斉彬派でもない、無色の人物と見られている。

その半太夫が民部を見ると、

「おお、きたか」

といった。民部の出府を、前もって知っていたような口ぶりだった。笑左衛門から聞いたとも思われない。それに半太夫は、密貿易露見のことも知っているようであった。とすれば、隠すにも及ぶまいと、民部は手短かに千世のことを告げた。もどってきたのは、思いがけない答えであった。

「案ずるな。新助は、公儀の隠密ではなか」

「えっ……」

「おはんになら、いうても差しつかえあるまい。実は新助は、斉彬さまの御意を体して、わしが送りこんだのじゃ」

「そ、それでは伯父上は……」

「さよう。わしは早くから、斉彬さまのお味方じゃった。調所め、うまくあざむかれおったわ」

新助の盗み出した中嶋屋の二重帳簿は、すでに斉彬の手から、老中阿部伊勢守正弘に渡っている。それもはじめから、計算に入っていたことだと半太夫はいった。

「斉彬さまが、あの斉彬さまが、さようなことを……」

目の前が大きく傾いた。民部は、いまさらのように、斉興派と斉彬派の、抗争の根深かさ、複雑さを思った。民部の出府も、おそらく国もとのだれかが、半太夫までひそかに知らせていたのであろう。

「伯父上」

ひとりでに、責めるような語気になった。

「千世のことか」

「むごうごわす。あまりでごわす」

民部自身、一度は千世に死を迫った。が、これは、それよりももっとむごい。千世は、夫の喜三郎だけではなく、父親にまで、道具に使われていたのだ。むろん千世は、なに一つ知らせられてはいない。

「千世が、かわいそうでごわす」

「そげんことはなか。千世はわかってくれる。千世は、薩摩の女じゃ。薩摩隼人の娘じゃ。斉彬さまのおんためであったと知れば、わしを怨んだりはせぬ」

半太夫は、昂然といった。

「伯父上、このこと、国もとの高崎どのや、近藤どのは、ご存じでごわすか」

「いや。いまのところ、そこまで知っているのは、わし一人じゃ」

半太夫はつづけた。

「この前は、殿がご老中にお呼び出しを受けられた。今日は、調所が呼ばれた。調所は二度目の呼び出しじゃ。こんどばかりは、いかな調所めも手も足も出まい」

その言外の意味は、察しがついた。

「これで、斉彬さまを、世にお出しすることができる。引いては、われわれの同志も、重いお役につき、藩政の枢機に参与することができるというものじゃ」

半太夫の顔は、酔ったようであった。

七

民部は、笑左衛門と会えなかった。あくる十九日の朝、藩邸内の長屋の一室で、おびただしく吐血して絶命している笑左衛門が発見されたのである。たちまち、大さわぎになった。

「胃病悪化のため急死」

と発表されたが、前日の夕方、阿部伊勢守の屋敷から帰った笑左衛門の、いつもと変りない姿を何人も見かけている。

昨夜は、そのあとおそくまで、島津斉興となにごとか話し合っていたらしい。しかりつけるような斉興の声を聞いたという者もあった。大声をあげていたのは、笑左衛門の方だったと、逆のことをいう者もある。それ以上のことはわからなかった。

——覚悟の死。

民部はしかし、首をかしげた。茶坊主あがりとはいえ、いまは藩中随一の実力を持つ家老である。覚悟の死ならば、当然割腹するはずであった。

さまざまなうわさが乱れ飛んだ。

数日たったある夜、民部は、笑左衛門の家士、二階堂忠作の招きを受けた。忠作は、笑左衛門が絶命したという、西長屋の一室で待っていた。

「こちらからおうかがいすべきを、お呼び立てしもして、申しわけごわはん」
ていねいに詫びてから忠作は、よそではさしさわりがあるからと前置きして、
「一命を預けてもろうたこと、くれぐれも礼を申すとの主人遺言にございもした」
「礼を……」
「命の借用証文のこと、主人よりうかがいもした」
忠作の目に、民部に対する憎しみはなかった。
「調所どのは自殺か」
忠作はかすかにうなずいた。
「なぜ毒を仰がれた。なぜ、腹を切られなかった」
それには答えず、忠作は目をうるませた。
「主人の心をはかれば、だれにも語るべきでなかことと存じていもす。が、てまえは、黙っておれもはん。残念でございもす。くやしゅうございもす」
影の形に添うように、絶えず笑左衛門の身辺で生きてきた忠作は、とつとつと語りだした。
笑左衛門はやはり、密貿易の申し開きを不可能と悟ってみずからの命を絶ったのだ。
密貿易のからくりは、一つは長崎にある。抜け荷の品も、一度長崎を通せば、大っぴらに通用する。長崎は心配なかった。日ごろから、ちゃんと手を打ってあった。長崎奉行の任免さえ、薩摩藩の意向を無視しては、行なえないような仕組みになっている。
斉彬は、その裏をかいた。千世の付き添いとして、新助を中嶋屋に送りこむという、気の遠く

なりそうな謀略が、笑左衛門の死命を制した。そのほかにも、重大な機密が、斉彬から、阿部伊勢守に渡っていた。笑左衛門はそれに気がつき、絶対に申し開きの不可能なことを悟ったのである。
斉興は、やむを得ず退隠を決意した。笑左衛門は真っ向から反対した。
「罪は一切、この調所がかぶりもす。殿は、知らぬ存ぜぬで押し通してくだされい」
笑左衛門は斉興の剛腹に望みをかけた。かつて、江戸城西ノ丸が焼けたことがある。その時、家臣の一人が、
「西ノ丸が炎上つかまつりました」
と言上したところ、斉興は、
「たわけ。焼けたとなぜいわぬ。炎上とは、禁裡もしくは、伊勢神宮の火災の場合にのみいうことぞ」
と、声あらかにしかりつけた。それほどの斉興である。かならず、知らぬ存ぜぬで押し通してくれるに違いない。笑左衛門はそう信じた。斉興はしかし、
「そなたを殺すわけにはいかん。財政立て直しに大功あったそなたを死なせてまで、余は藩主の座にとどまりとうはない」
といった。笑左衛門は怒った。
「いいえ。斉彬さまが藩主になられるくらいなら、調所は死んだがましでございもす」
奄美三島の島人を搾取し、大坂商人を泣かせ、鬼となって、ようやく立て直した藩の財政を、

ふたたび昔の火の車にもどすなど、とうてい忍びない。

主従ははげしく対立した。藩邸詰めの者が、争い声を聞いたというのは、その時のことであった。

「密貿易は、調所が私腹をこやすために、勝手に行なったもの。余はなにも知らぬ。その一点ばりで、押しきっていただきとうございます。斉彬さまのご家督相続、あくまで阻止していただきとうございもす。殿、よろしゅうございもすな」

長時間かかって、笑左衛門は斉興を説き伏せ、車の両輪ともいうべき腹心の、海老原宗之丞、二階堂志津馬を、連座の罪を名目に罷免すること。江戸家老として、島津将曹を起用すべきこと、その他、こまごました点まで進言した上、夜半、西長屋の一室で毒を仰いだのであった。

「愛甲さま。斉彬さまは、その英才をつとに天下に知られたお方でございもす。それに、すでにお年も四十歳、一日も早く藩主の座に直り、とうとうたる時世の流れに対処して、経綸を行ないたいとお望みなさること、もっともではございもそ。しかし、だからといって、藩の死命を制する密貿易の機密をみずからさぐり、それをたとえ親交ありとは申せ、阿部伊勢守さまに渡し、父君に退隠を迫られるとは、あまりではごわはんか」

忠作は、こぶしで涙をぬぐった。

「とはいえ、てまえは決して、主人を一人正しとはいいもはん」

笑左衛門には、大局を見る目がない。たとえ、藩財政の窮乏を救い、島津七十七万石を寝せ起こしてきたとはいえ、しょせんは、家老としての器に過ぎない。

その点、斉彬の目は、外国にまで見ひらかれている。相つぐ外国船の来航からも察せられる、しだいに激動の様相を見せはじめた時局を乗り切るためには、つめに火をともしてたくわえた金であろうと、費消すべき時には費消しつくすべしと斉彬は考えていた。

しかし、笑左衛門には、それが許せないのである。

「さような主人の気持、この忠作にはよくわかりもす。よしんば、大局の動きを知らぬかたくなな執念に過ぎぬとしても、てまえは汲んでやりとうございもす……」

忠作は泣いていた。

その夜、民部は眠れなかった。

八

愛甲民部が、鹿児島の城下にもどってきたのは、あくる嘉永二年三月初めであった。それから三日もせぬうちに、市来新八や、薬丸伝之進らが、五、六名で押しかけてきた。だれの目もけわしかった。

「おはんら、もう聞いただろうな」

民部の方から、先に声をかけた。

「調所がくたばったことか。知っちょる」

ぶすっとして、新八が答えた。

——笑こともとうとう死去にござ候。

うんぬんという斉彬の手紙が、すでに同志の吉井七郎右衛門あてにきていた。

——笑吐血は、大円寺にてはこれなく候。宿にてのことにござ候。まったく胃血のことにござ候。

こんな手紙もきている。宿とは、藩邸内の長屋のことであった。笑左衛門の死を機に、その腹心海老原宗之丞や二階堂志津馬が失脚したことも、知らせがあった。

「愛甲どん。新しく江戸家老として、島津将曹が起用されたとはほんとうか」

「その通りじゃ」

「では、あまり変りばえもせんの」

島津斉興が、海老原や二階堂をしりぞけたのは、幕閣への首尾をつくろうために過ぎないというわさもある。げんに島津将曹は、同じ穴のむじなと見られていた。

新八や、薬丸伝之進、伊集院作馬の顔に、失望があらわになった。

「調所がくたばった以上、すぐにも斉彬さまがご家督相続なさると見とったが、将曹が起用されては、そうもいかんな」

「おいどんらも、当分はまだ、冷やめしをくわんけりゃいかんらしい」

民部は眉をひそめた。薬丸伝之進が、いち早くそれを見てとった。

「おはん、おかしかぞ。いったい、いけんしたとじゃ。江戸にいっても、手紙一つよこさんじゃったが……」

「おいはこのごろ、わけがわからんごとなってきた」

民部は、素直に感懐をもらした。

「わけがわからんと……」

「どっちもどっちという気がしてきたのじゃ。殿のご意向通り、久光君を立てようとする方も、斉彬さまを奉じようとする方も、しょせんは、わが身第一の考えに出たこと。しきりに、そげん気がしてならん」

伯父の谷山半太夫がそうであった。いままた、新八らも、露骨なことばを吐いた。民部は、調所を斬れと息まいていたころの自分と、その周囲をふり返っていた。民部の周囲には、斉彬派の領袖ともいうべき人々がいた。近藤隆左衛門、高崎五郎右衛門、山田一郎左衛門、赤山靱負らである。

「その近藤どの、高崎どのにしても、おはんらやおいにしても、必死に斉彬さまを世にお出し申そうとする心の片隅には、いまのままでは、いつまでたっても、わが身の浮かぶ瀬がなか。そげん打算が、ひそんでおらんとはいえまい。考えてみれば、斉彬さまにつくすということが、そのままとりも直さず、斉彬さまを利用することにもなる……」

「そげんことはなか。絶対になか」

声が高くなった。

「いいや、なかとはいいきれん。ともあれ、調所どのは、お気の毒じゃった」

いま、いちばん心を占めていることを、民部は口にした。

「なにが気の毒じゃ」

「どのなどつけるのはよせ」
民部は、たかぶりを制していった。
「おはんらには、とてもわかってはもらえまいなあ、いまのおいの気持は……」
「まだそげんことを」
「おはんらは知っちょるまい。調所どのの死因は、吐血などではなかぞ。みずから毒を仰がれたのじゃ」
これは、新八らにとっても、さすがに意外だったらしい。が、すぐ居直った。
「自害ならどうちゅうとじゃ」
民部はにじり出た。
「いま思えば調所どのは、常日ごろから、万が一の時は、死ぬ覚悟をきめてごわしたのじゃ。久しく粗衣粗食に甘んじてごわした調所どのが、ここ数年来、にわかにぜいたくになり、平の馬場に、殿様のお住まいをしのぐ豪奢な屋敷を、これ見よがしにお建てなされたのは、密貿易は調所が一人でやったと、いつの日にか、責めを一身に負われるためじゃった……。とも白髪までつれ添うた、お内儀にさえ本心を明かさず……」
世間は鬼の調所と呼んだ。だが、その鬼の調所は、泣いていたのかもしれない。大坂商人を手玉にとり、奄美三島の島人を、砂糖地獄に追いこみながら、心の中では血の涙を流していたのかもしれなかった。これほどの非道を行なわねば、どん底に落ちた薩摩藩の財政立て直しはできないかと。

「おいは、そげん思う」
みなまで聞かず、市来新八は、たたきつけるようにいった。
「愛甲どん。おはん、いつ戯作者になった」
「おいが戯作者じゃと……」
「おもしろおかしゅう、話の筋道をつくるのが、うまいもんじゃ」
「ことばが過ぎるぞ。おはんな、そげんものの見かたしかでけんとか」
民部は、しだいに激してきた。

九

「おいは、江戸を立ってから今日まで、ずうっと、天下の政治ちゅうもんを考えとった。天下のまつりごとちゅうもんは、不思議なもんじゃ」
部屋は、いつしか暗くなりかけていた。
「天下のまつりごとが不思議じゃと……」
薬丸伝之進が聞き返した。民部の声に、いっそう力がこもった。
「いいかおはんら。薩摩の密貿易は、もはや公然の秘密じゃった。その公然の秘密を、いまになってなぜつつこうとしたか。これは、高い声ではいわれんが、斉彬さまと老中阿部伊勢守さまの企らみじゃ」
「ばかばいうな」

「先まで聞け」
民部は、谷山半太夫と、二階堂忠作に聞いた真相を語った。
「愛甲どん。やめろ」
市来新八がどなった。薬丸や伊集院、そのほかの者も気色ばんだ。片ひざ立ちになった者もいる。
民部はひるまずつづけた。
「いう。どこまでもいう。正しかるべき天下のまつりごとにも、からくりがある。老中阿部伊勢守さまは、密貿易の不問を条件に、殿にご隠居を迫られたのじゃ。調所どのは、みずからの死で殿のご隠居をくいとめられた。しかも毒を仰いで……。反対派に、茶坊主家老と、かげぐちたたかれた調所どの、せめて最後は、見事に腹を切りたかったことじゃろう」
だが、そうはできなかった。密貿易で、私腹を肥やした茶坊主あがりの家老は、見事な腹の切りかたをするわけにはいかなかったのだ。事実その服毒死をめぐって、
「いくら家老になっても、茶坊主あがりは茶坊主あがり。毒をのんでしか、死ぬこともできんじゃったと見える」
そんな声が流れたものだった。
「からくりはまだある」
愛甲民部はさらに、中嶋屋喜三郎の名をあげた。島津七十七万石と、刺しちがえをくわだてた喜三郎の執念も、政治のからくりの前には、無為に終った。

喜三郎は、西町奉行所の仮牢内で急死した。一服もられたのはいうまでもない。密貿易をあばくことを、斉興排斥の手段としてだけしか考えていない、老中阿部伊勢守正弘にとって、本気で島津家のとりつぶしを企てている中嶋屋喜三郎の存在は、邪魔以外の何物でもなかったのだ。
帰国の途次、民部は千世の口から、喜三郎の死を聞かされた。千世は、喜三郎の死の意味も、父に道具として使われた自分の役割も、気がついているようであった。
「すぐもどってくるようにと、父から書状がきもした」
「いけんしもす？」
「もどりもはん。あくまで大坂にとどまって、中嶋屋ののれんを守りもす。父には、さかさまながら、こっちから、義絶をいうてやりもした」
それがせめてもの、千世の抵抗だったに違いない。
民部は、できれば千世をともなって、鹿児島にもどり、妻に迎えるつもりであった。千世の心の傷を、自分の手で、いやしてやりたいと思っていた。しかし、なにもいわず別れた。
「斉彬さまは、たしかに英明無比のお方ではある。だが、天下のこと、時世の動きには明るくても、千世の心は、千世の悲しみは、おわかりではあるまい……」
民部は、新八たちを見まわした。
「天下のまつりごとという、大きなからくりの前には、調所どのほどの人でも、一匹の虫に過ぎなかったのじゃ。ましてや、喜三郎や千世などは……」
民部がそこまでいった時、

「もうよか」
「おはん、変節したな」
市来新八らは、いっせいに立ちあがった。
「変節……」
「これが変節でなくてなんだ」
「恥を知れ」
「違う。おいは、本質においては、少しも変っとりゃあせん。いまもって斉彬さまを、一日も早う、世にお出し申したかて思うとる一人じゃ」
「詭弁はやめろ」
「詭弁ではなか。おいはただ、真実をいうただけじゃ。おいは、斉彬さまのご政治力を、尊崇する一念においては、だれにもおくれはとらん」
「ならば、どうしておはんな」
「おいには、そいがわからん」
民部も、いつか立ちあがっていた。はげしいものが渦を巻いて、胸の中にひしめきあふれた。
「こっちこそ聞きたい。なぜおいが変節したといわれねばならんのだ。調所どのの死に心をうたれ、千世のあわれさに、胸をゆすぶられたことが、なぜ責められねばならんのだ。おはんらは、是非を問わず、一切のまつりごとのからくりに、目をつぶれというのか。目をつぶらねば変節か。主義、目的のためには、心にわずかな疑問を抱くことさえ許されんのか」

民部は、一人一人見まわした。わかってくれたらしい顔はない。目の前の顔は、一つ一つ違っているのに、みな同じような表情であった。民部にはそれらの顔が、鋳型で作った同じ顔に見えてきた。
「問答無用じゃ。愛甲、おはんの変節は、ただちに、他の同志一同に報告する。今日かぎり、おはんなもはや、おいたちの同志ではなかぞ。いこう」
あごをしゃくる、市来新八の声に応じて、薬丸伝之進、伊集院作馬、そのほか、たたみをふみ鳴らして出ていった。
「待て。おはん待て。待ってくれ」
あとを追って、愛甲民部も外へ出たが、ふりかえる者は、一人もなかった。外はもう、夜だった。夜空が白く濁っているのは、今夜もまた、桜島がさかんに噴煙をあげているせいだろう。
火山灰がしきりに降った。去年の秋、調所笑左衛門を斬ろうとしたあの夜のように。ときどき地鳴りのような鈍い音が、暗い大地を伝わってくる。
民部は、灰の降ってくるにまかせた。
調所笑左衛門は死んだとはいえ、斉興派と斉彬派の抗争は、まだまだおさまりそうになかった。事実、これから半年後、高崎五郎右衛門、近藤隆左衛門はじめ、斉彬派の領袖と見なされる人々が、斉興の激怒を買って、一挙に処断されるという、いわゆる高崎くずれの悲劇が生じ、さらに幾多の曲折をへて、嘉永四年二月、ようやく斉彬の襲封が実現したのである。
もちろん、いまの愛甲民部に、そこまでの見通しはなかった。しかし、火山灰の降りしきる夜

の底に、なんとも知れぬ、すさまじい魔性のものが身をひそめているのを、肌で感じていたかはしれない。

「調所どの……」

民部はうめいた。

「これが、これが変節か……」

これが変節ならば、甘んじて変節の汚名を受けよう。民部の胸の中には、怒りとも、悲しみともつかぬどろどろしたものが、けもののようにのたうちまわっていた。

後日、薩摩藩は、明治維新の原動力となった。その時、もっとものをいったのは、薩摩藩の財力であった。だが、その財力を築きあげた調所笑左衛門の功績は完全に抹殺され、ただ、奸臣としての悪名のみが残った。

解説

磯貝勝太郎

ここに収められている七篇の短篇は、いずれも薩摩を舞台にした作品で、薩摩の士風のきびしさ、はげしさ、男らしさに心をひかれた作者のおさえがたい創作意欲から生まれた小説である。

わが国本土の最南端を占める薩摩は、北方をけわしい山岳によってとざされた辺境の国であるばかりでなく、江戸時代には、完備した関所・番所制度や百を越す外城などを設け、藩外との自由な交通を遮断した閉鎖性のつよい国であったことはよく知られている。当時は日本が海外に対して鎖国をしていたが、薩摩はこの鎖国の日本に対しても鎖国をおこない、他国からの侵入者を防ぎ、藩内から外に出る者を厳罰に処した。〝薩摩は二重鎖国なり〟といわれたゆえんである。このような薩摩の辺境的閉鎖性が、薩摩隼人特有の士風や方言を、転変流動する時代の風潮から護り、純粋保存するのに役立ってきた。

薩摩隼人の遠い祖先である隼人族は、台湾の高砂族と同系で、黒潮にのって南九州に漂着したインドネシア族の一分派だとされている。彼等は大和人とは系統を異にする異族で、その性質は敏捷にして勇猛、ことばもインドネシア系の言語と同源で、大和ことばとは相違していた。その

行動がすばやいために、〝隼人〟とよばれた勇敢な薩摩隼人の血をひく後裔は、鎌倉時代以来の九州第一の名族、島津氏の強力な指導体制におかれ、徳川三百年の間に、薩摩藩独特の郷中教育によって、剛強で勇敢になるように鍛錬され、男らしく勇敢にふるまうという美意識を徹底的にたたきこまれた。その美意識は、男の意地を貫き、おのれをいさぎよくすること、つまり颯爽たる男性的気概を最上とする態度のことで、素朴で、あらあらしい武者気質ともいうべき戦国の殺伐な気風を残した男道と相通ずるものであった。太平の世であった元禄時代に、儒教が盛んになると、男性的気概を最上のものとする男道は批判されるようになり、儒教によって修正された結果、平和な時代にふさわしい行動規範としての武士道が成立し、武士道が変化したが、その変化の波は、日本の片隅で二重鎖国している薩摩には、なかなか響いて来ず、勇猛果敢な薩摩の士風は、長い間にわたって残存してきたのである。

男の意地を立てて、一筋に剛強であることを武士の面目とする薩摩の士風は、他国人からみれば奇矯で、一種不可解な印象を与えがちであったことは否めない事実であろう。しかも、薩摩の方言は、他の方言と違ってほとんど独立の言語なので、他国人には難解な方言である。したがって、薩摩人の土着的な人間性や言動を真に理解することはむずかしいといえよう。このため、おおかたの作家は薩摩を舞台にした小説を、あえて書こうとはしない傾向がある。作家が薩摩を素材とした小説を書こうとする際に、まず必要なことは、奇矯のおもむきのある薩摩気質に対する理解と方言の知識である。たとえば、小説を書くのに参考となる薩摩の古い書物には、多くの方言が出てくるので、方言を正しく理解しないかぎり、薩摩気質の理解や正確な歴史解釈はできない。薩摩を舞台にしたこの短篇集には、「薩藩旧伝集」を種本としたいくつかの作品が収められ

ているが、「薩藩旧伝集」は、戦国時代から江戸初期にかけての薩摩武士らの逸話を多く集録した古書で、そのなかには、薩摩気質をあらわした逸話や、他国人には理解しがたい薩摩の方言が出てくるので、作者は方言を理解するのに苦労したであろうかとおもわれる。

作者の滝口康彦は、本名原口康彦、大正十三年三月、長崎県佐世保市で生まれた。警察官だった父親の転勤で間もなく佐賀県伊万里市に移り、小学校三年生のとき父親が亡くなったので、母親の実家のある多久市へ移った。北多久尋常高等小学校（現在の市立北部小学校）の五年生の際に、担任の若いN先生が、自分の月給の大半をはたいて備えてくれた学級文庫の本（吉川英治「神州天馬侠」、大仏次郎「日本人オイン」、佐藤紅緑「ああ玉杯に花うけて」などの少年小説）を手当り次第に乱読、文学的に目覚め、六年生で将来、作家になることを志望した。家庭の事情で旧制中学の進学を断念、中学講義録などで勉強するかたわら、N先生の書斎に通い、本を借り出してむさぼるように読んだ。高等小学校卒業後、郵便集配員、運送会社事務員、炭鉱の鉱員などの職業を経たが、終戦までの一年ほどを山口県・防府海軍通信学校等で兵隊生活を体験した。二十九年夏、働いていた佐世保の炭鉱が倒産し、失業していたとき、東京のある雑誌が小説を募集し、大阪の放送局が浪曲の台本を募っているのを知り、応募したところ、ともに佳作入選。小説は返り討ちをテーマにした時代小説、浪曲台本は「仇討たず物語」と題する作品であった。この入選を機に文筆に専念、三十一年にNHKの契約ライターとなり、三十二年に「オール読物」に応募した「高柳父子」が、第十回オール新人杯の次席に選ばれ、同年度下半期の直木賞候補となったことから一躍注目された。以後、「かげろう記」「霧の底から」「仲秋十五日」「日向延岡のぼり猿」「主家滅ぶべし」などの諸作品が、それぞれ直木賞候補作となった。作品の多くはほと

んどが短篇。そのなかで「異聞浪人記」は「切腹」、「拝領妻始末」は「上意討ち」のタイトルでそれぞれ映画化され、ヒット作となり、話題になった。長短篇合わせて軽く百篇を超える作品には、歴史・時代小説の正統派に属する堅実な手法によって、藩政時代における佐賀、薩摩、日向などの武士社会のひとびとの生きざまを描いた作品が多い。滝口康彦は佐賀県多久市に居住し、封建時代の武士社会に素材をとった作品を、一貫して書きつづけているので、武士道、ことに葉隠に象徴される武士道讃美の作品を好んで書く土着的な作家だとおもわれ勝ちだが、佐賀の多久市に定住し、創作活動をおこなっているのは、その土地の風土に根を下して、郷土の歴史を掘りおこし、郷土のひとびとの土着的な人間性を追究しようという確固たる意図があるわけではない。たしかに作品のなかには、武士道讃美ともとられかねない作品もみられるが、作者はそれらの作品をとおして武士道を讃美しているのでも、肯定しているのでもない。作者が封建時代における武士社会のひとびとの生きざまを好んで描くのは、武士道をむなしいもの、哀れなものとしてとらえ、その世界のさまざまな極限状態におかれたひとびとにあらわれる人間相に作者の関心があるからにほかならない。たとえば、死は武士の行動原理とされてきたが、武士が死に直面するという極限状態におかれた際に、その武士がいかに死と対決し、その家族たちにいかなる苦悩や悲哀を与えたかという人間相や、強大な権力に押しつぶされようとしながらも、そういった極限状態のなかで死を賭して貫こうとする武士の反骨精神などに、作者はつよくひかれるからだ。

「薩摩軍法」は、過酷な薩摩軍法に従う武勇の士、綾部主税と元服以前の薩摩少年、染川小八郎との情誼的な結合を描いた感動的な作品である。薩摩軍法は、作品冒頭に記載されている一条をみれば明らかなように、むごくきびしい軍律であった。その過酷な軍法に従い、命をちりあくたのように扱って戦う薩摩武士同士の間にも、思いやりや恩愛の情が生じるのは当然のことである。したがって、戦陣にのぞんでは原則として、肉親の者を同一の隊に配することは避けることになっていた。恩愛のきずなに左右されぬためである。隊の編成上の手違いであろうか、主税がいとこの古垣右馬助の隊に加えられたことが遠因となり、小八郎の悲劇が起った。主税と小八郎とは血縁関係の間柄ではなかったが、隊将の右馬助を討たれた以上、退くわけにはいかないという極限状態に陥った主税は、若い小八郎の命を惜しみ、思いをかけた策をとるにいたる。島津のお家のためにという主税の口実によって、それに応じた小八郎は、主税の情誼を胸の内奥に秘めて、卑怯みれんな男だといわれても、その秘事を誰にもうちあけずに切腹して果てた。薩摩人にとって最も屈辱的なことばは、〝きっさねこっすい〟（卑怯なことをする）といわれることで、他人にそう思われたり、云われた場合には、死んで恥をそそがねばならなかった。元来、薩摩人は屈辱や侮辱にたえ忍ぶ訓練をしていない。侮辱を受けたら、即座に相手を両断して、切腹せよと先祖代々教えられてきた。しかも、言いわけをすることは、めめしいという観念が薩摩人にはつよかった。卑怯な男だと云々されても一切の弁解をせず、屈辱に耐え、主税への情誼に酬いるべく、割腹して果てた小八郎の死にざまや、父掃部の最期にも悲壮美が光る。

「秋雨の首」は、秀吉の勘気にふれた島津歳久の悲劇を格調高くつづった傑作である。〝薩摩に馬鹿殿なし〟ということわざがあったように、島津家には名君や傑出した人物が多く、豪邁で知に富む人物で悲劇的な生涯を送った英傑も少なくない。十五代の貴久の子、義久、義弘、歳久、家久の四人兄弟は、それぞれすぐれた素質をもち、たがいに結束して前線で働いたので、島津の勢力はほぼ全九州におよんだ。十六代を継いだ義久は、武勇の人として知られ、九州の大友氏、

竜造寺氏との一連の合戦を指揮したのは、義久の三人の弟たちであり、敵からは〝武勇の義弘、知謀の歳久、兵術の家久〟とよばれ、おそれられた。当時の島津勢力は、旭日昇天の勢いだったので、秀吉の九州征伐に際しても、義久から雑兵にいたるまで秀吉を軽視したが、歳久は威望四海を圧する秀吉をおそれ、戦いの中止を再三、義久に申し入れた。だが、義久とその周囲から無視され、悲劇的な半生を送ることになる。歳久の悲劇の要因は、梅北国兼の乱に歳久の家臣たちが加わっていたこと、中風を病み、半身不随で秀吉のもとに伺候できなかったことなどにあるが、歳久が知謀と思慮の人であり、島津が降伏したのち、秀吉に対して一連の反抗的な意地立てをおこなったことが、悲劇を招く最大の原因であったとおもわれる。島津四兄弟のなかで、もっとも知略と思慮に富む歳久は、秀吉にとって油断のならぬ人物であるばかりでなく、複雑な心境による意地立ては、秀吉を大いに刺激したので、秀吉は無理無体ないいがかりをつけ、歳久の首を要求する態度に出たのだ。秀吉は人心の収攬術に巧みな人物であった。秀吉一流の演技によって、義久が巧妙な収攬術にかかって後悔するくだりや、秋雨にうたれる歳久の首についての場面描写が印象的だ。

「仲秋十五日」は、作者の代表作として定評のある作品。謀反をはかった伊集院源次郎を、主君の密命で鹿狩りの際の事故死といつわって射殺、即座に切腹した郷士、淵脇平馬、押川治右衛門とその家族の苦衷が描かれている。薩摩では各部落のことを郷中とよび、郷中ごとの青少年が団結して自治的に教育をおこなった。この郷中教育によって、武士は主君のためにあるものだという簡単明快な信念、それを即座に行動にうつせる実行力が重視され、勇敢は男子第一の美徳、儒弱は男子第一の悪徳という武士の美学などを教えこまれた。したがって薩摩武士は、主君のために自分の生命を捨てる覚悟を常にもっていたが、戦国の気風を残す薩摩武士は、男の意地を貫くことが必要な場合に、一族が団結して主君にさえ武力反抗した。主君に背いてまで男の意地を貫く行為は、武士の心意気をしめすおこないだと考えられたのである。主君の密命で源次郎射殺の白羽の矢をたてられた平馬が、即座に応じなかったのは、主家に弓を引き、男の意地立てをおこなった源次郎を尊敬していたからだ。しかも、狩りにこと寄せて殺すことを卑怯な行為だと考えたからにほかならない。決行二日前の晩、中秋の名月の下で、〝殿様は、……主君の命であれば、島津家の侍は、薩摩隼人は、迷わず黙って死んでいくものと、それがあたりまえじゃと、お考えなさるじゃろ……〟と、思わずもらし、〝強かもんか。人間はいっしょじゃ……〟と、治右衛門につぶやいた平馬の声には、いつわりのない人間性があらわれている。この作品の舞台は薩摩ではなく日向になっているが、日向とはいっても、穆佐も野尻も島津領であった。作者によると、初め日向の飫肥藩、伊東家の歴史をつづった『日向纂記』の中の「伊集院源二郎島津家ニ誅セラルル事」という八百字ほどの記述をもとにラジオ・ドラマを書き、後に『西藩野史』『称名墓誌』によってさらに創作意欲を刺激されて小説化したという。

「白梅月夜」は、薩摩武士そのものを主人公とした作品ではないが、宇喜多秀家の誠実な家臣玉川伊予の人物像をとおして薩摩人気質を知ることができる。伊予は弓術、馬術のいずれにもすぐれていた武士であったが、武士に似合わしからぬ柔和な姿かたちをしていた人物なので、〝なまっ白い柔弱者〟といわれて軽蔑され、わる企らみを仕掛けられた。男の強さを尊ぶ薩摩人は、伊予タイプの人物を毛嫌いし、精悍な面魂をした男性を好んだ。外柔内剛型の伊予が嫌われたのは、彼が新参者であったからにもよる。薩摩は辺境の地で二重鎖国をおこなっていたため、薩摩

人は、他国人や新参者に対して、きわめて排他的であった。この作品には、よそものの伊予に対する薩摩人の気質が巧みに描かれているとともに、薩摩の地で、主君秀家にひたすら仕えることを願いながらも、島津家久の情誼を受け、妻由美への情愛にしばられて苦悩する伊予の複雑な心境があざやかにあらわされている。家久へ義理や、子というきずなに身をしばられることをおそれる夫を思い、せっかく授かった子宝さえも、秘かに犠牲にした由美のこころづかいは、いじらしく、あわれである。

「鶴姫」は、作者が最初に手がけた薩摩ものの作品である。島津維新入道の妾腹の子で、島津家当主家久の異腹の妹にあたる若い鶴姫が、肥前唐津十二万石の寺沢志摩守広高の嫡子式部との婚礼を間近にひかえて、突然、輿入れに対して不服を言いはじめるというのが、物語の発端である。不服の理由がわからない家中の人々は、鶴姫をわがままだときめつけるが、彼女にすれば、ほんとうの理由があった。それは寺沢家との縁談を犠牲にして、侍女の志野を婚約者の主税に嫁がせたかったからなのだが、鶴姫が不服を申し立てたことから、物語はおもいもよらない悲劇へと発展してゆく。最初の薩摩ものの短篇ではあるが、巧緻な構成によって作者の力量をしめす興味深い作品である。作者によると、「鶴姫」は、『薩藩旧伝集』『盛衰集』『称名墓誌』『西藩野史』に素材をとった作品で、脇役として出てくる肥前唐津、寺沢家の高畑新蔵は、講談で知られる「寛永三馬術」の一人、筑紫市兵衛のモデルと目されている人物だという。市兵衛に斬られる薩摩の使者、宍戸宇源太のモデルが、副主人公の伊勢平左衛門である。新蔵の名は本によって、高畑新助、高畠新蔵、竹畠新蔵、高畠仲兵衛など、諸説がある。作者の好みで新蔵をとったが、正確には仲兵衛だったように思われるという。

「かげろう記」は、薩摩の密貿易にまつわる逸話に素材を得た作品で、薩摩武士の有川伊織が、密貿易の実態を調べにきた幕使を、難破と見せかけて船もろとも沈めてしまう顛末を興趣深く描いている。この作品の中で、注意すべき場面描写は、鎌田八弥太が、欠けた月あかりの海のなかで、伊織と三上彦四郎の二人が遭難しているのを目撃する様子を描写した場面（230頁）だ。〝伊織は、三上彦四郎の髪をつかんでいた。助けようとしているのではなかった。八弥太の頭の中を、稲妻のようなものが突っ走った。〟と、記述されているが、この場面描写の簡潔な記述文によって、八弥太が伊織の真意に気づく瞬間を、作者はさりげなくとらえている。この作品は、『日本残酷物語　第三巻』（平凡社）の「鎖国の悲劇」中のわずか四行余の記述にヒントを得て創作された短篇で、作者の豊かな想像力と自在な構想力をしめしている。

「奸臣と人のいう」は、幕末、薩摩藩の財政立て直しに大功がありながら、反対派により奸臣としてその功績を無視されてしまった、調所笑左衛門の雪冤を願って書かれた作品である。薩摩は、調所の経済的な手腕によって貧乏の水ばなれができた。ただし、藩の財政を立直す方策を調所に与えたのは当時の経済学者、佐藤信淵であった。この作品の副主人公の愛甲民部が、調所を刺殺することができずに、許容するにいたる様子が巧みに描出され、薩摩問屋、中嶋屋喜三郎をめぐる隠密事件の設定が作品の興趣をもりあげている。昔も今も、利害相反する立場におかれた場合、人は往々にして、味方は百パーセント正義であり、敵は百パーセント悪であるときめつけたがる。そのいやらしさを、作者は作品のなかで告発したかったという。初め刺客として調所の命をねらい、後にはかえって調所に傾いていく愛甲民部には、ある革新的集団に所属して、みずからの行動や理念に、いささかの疑問を抱くことも許されなかった、若き日の作者の苦い思いが

托してあるという。

この短篇集に収められた七つの作品は、時代順に配列されている。これらの諸篇を読めばわかることだが、滝口康彦の作品世界は、えりすぐられた言葉、簡潔な文体、巧緻な構成によるもので、歴史の説明過剰もなく、文字通り人間描写に徹した手法を使い、薩摩武士の生きざまを通して、武士道の世界のきびしさ、はげしさをとらえると共に、綾部主税の従卒の与茂作や、淵脇平馬の妻とせ、あるいは鶴姫など、武士でない諸人物の視点から、武士道の世界のむなしさや哀れさをあざやかに描出している。すでにふれたことだが、薩摩人特有の気質や方言をとらえるのがむずかしいために、おおかたの作家は、薩摩ものを書くことを敬遠しがちである。薩摩の士風にひかれた滝口康彦が、そういった傾向を打破して、薩摩を舞台にした作品を書いているのは、歴史・時代小説の愛読者にとってよろこばしいことだ。薩摩武士のあらあらしく、きびしい世界については定評があるが、一見あらあらしい世界のように見えながら、現代の疎外感のつよい人間関係よりももっと緻密な人間同士の思いやりや、情誼の関係で成り立っていたことを、滝口康彦の作品をとおして知ることができるからである。

（文芸評論家）

講談社文庫
定価360円

薩摩軍法
滝口康彦

昭和56年12月15日第1刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社大進堂

© Yasuhiko Takiguchi 1981

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131735-0

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

A 日本文学Ⅳ

黒鳥譚・青鬚公の城 中井英夫
人形たちの夜 中井英夫
プレオー8の夜明け 古山高麗雄
今朝太郎渡世旅 古山高麗雄
バクの飼主めざして 庄司 薫
もと夫 婦 田辺聖子
無常ソング 田辺聖子
女が愛に生きるとき 田辺聖子
女の食卓 田辺聖子
うたかた 田辺聖子
銀色ラッコのなみだ〈北の海の物語〉 岡野薫子
ヤマネコのきょうだい 岡野薫子
ボクはのら犬 岡野薫子
海からの光 小川国夫
彼の故郷 小川国夫
生のさ中に 小川国夫
帰らざる夏(上)(下) 加賀乙彦
頭医者事始 加賀乙彦
彼方の水音 高橋たか子
枇杷の季節 坂上 弘
優しい人々 坂上 弘
物語愛と幻想 串田孫一
解剖学的女性論 渡辺淳一
病める岸 渡辺淳一
秋の終りの旅 渡辺淳一
氷紋 渡辺淳一
笛師 新田次郎
見事な娘 源氏鶏太
坊っちゃん社員 源氏鶏太
二十四歳の憂鬱 源氏鶏太
青春をわれらに 源氏鶏太
娘の中の娘 源氏鶏太
心狸学・社怪学 筒井康隆
乱調文学大辞典 筒井康隆
ウィークエンド・シャッフル 筒井康隆
春のいそぎ 立原正秋
雪のなか立原正秋
夢のあと 立原正秋
剣と花(上)(下) 立原正秋
永い夜 立原正秋
見知らぬ橋(上)(下) 船山 馨
軍旗はためく下に 結城昌治
虫たちの墓 結城昌治
幸福という名の不幸(上)(下) 曾野綾子
無名碑(上)(下) 曾野綾子
いま日は海に 曾野綾子
侍たちの風雪〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
篝火の燃ゆる街道〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
四季の江戸図絵〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
暮六ツの鐘鳴る刻〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
剣鬼らは何処へ〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
雲流るる城下町〈歴史ロマン傑作選〉 日本文芸家協会編
現代短編名作選(1)~(10) 日本文芸家協会編
女と刀 中村きい子

講談社文庫 目録

不意の声 河野多恵子
骨の肉 河野多恵子
狐狸庵VSマンボウ 遠藤周作 北杜夫
狐狸庵VSマンボウpart II 遠藤周作 北杜夫
冥途の家族 富岡多恵子
夜になっても遊びつづけろ 金井美恵子
春の画の館 金井美恵子
復讐するは我にあり (上)(下) 佐木隆三
大地と星輝く天の子 (上)(下) 小田実
ガ 島小田実
何でも見てやろう 小田実
鬼の詩 藤本義一
生きいそぎの記 藤本義一
罪喰い 赤江瀑
鳥獣戯話 花田清輝
小説平家 花田清輝
思い川 後藤明生
母を拭く夜畑山博
祭りの場 林京子
火炎城 白石一郎
能登路悲恋 加堂秀三
〈小説・沖田総司〉六月は真紅の薔薇 (上)(下) 三好徹
春来る鬼 須知徳平
日本の唱歌 (上)明治篇 (中)大正昭和篇 金田一春彦 安西愛子編
中国妖姫伝 駒田信二
髪の環 田久保英夫
雪明かり 藤沢周平
雑民の魂 駒尺喜美
100杯目の水割り 東君平
親不孝のすすめ 小峰元
退屈しのぎ 高橋三千綱
限りなく透明に近いブルー 村上龍
牙王物語 戸川幸夫
花隠密 岩井護
落日の鷹 滝口康彦
贋・久坂葉子伝 富士正晴
花の木登り協会 イーデス・ハンソン
コメディアン犬舎の友情 沼田陽一